

IBM SPSS Collaboration and
Deployment Services 4.2 管理
者ガイド



Note: Before using this information and the product it supports, read the general information under Notices p. 160 .

This document contains proprietary information of SPSS Inc, an IBM Company. It is provided under a license agreement and is protected by copyright law. The information contained in this publication does not include any product warranties, and any statements provided in this manual should not be interpreted as such.

When you send information to IBM or SPSS, you grant IBM and SPSS a nonexclusive right to use or distribute the information in any way it believes appropriate without incurring any obligation to you.

© Copyright SPSS Inc. 2004, 2010..

はじめに

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は予測分析の幅広い使用および展開を可能にします。分析資産を安全かつ監査可能な形で集中的に格納でき、予測分析プロセスの管理および制御を行う高度な機能が提供されます。また、分析処理の結果をエンドユーザーに提供する高度なメカニズムも提供されます。

本マニュアルでは、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 操作の管理面について説明しています。コンテンツ リポジトリ サーバーのセットアップ、ユーザーの管理、通信プロトコルの構成、更新のインストール、リポジトリの監査など、タスクについての情報が提供されています。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のソフトウェアおよびハードウェアの要件およびシステム インストールおよび構成は、『IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 4.2 のインストール手順と構成ガイド』を参照してください。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の分析機能の日常的な使用に関連するタスクについては、『IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 4.2 ユーザー ガイド』に説明されています。

テクニカル サポート

SPSS Inc. のユーザー登録を行ったお客様は、SPSS Inc. のテクニカル サポートをご利用いただけます。SPSS Inc. 製品の使用方法、または対応するハードウェア環境へのインストールについてサポートが必要な場合は、テクニカル サポートにご連絡ください。テクニカル サポートに連絡するには、SPSS Inc. ホームページ (<http://www.spss.co.jp>) をご覧になるか、SPSS Inc. 社までお問い合わせください。お客様の ID、所属する組織 ID、およびシステムのシリアル番号をお手元にご用意ください。

ご意見をお寄せください

お客様のご意見は貴重な情報です。SPSS Inc. 製品に関するご意見、ご感想をお寄せください。E-mail: jpsales@spss.com 郵便: 〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-1-39 恵比寿プライムスクエアタワー 10F エス・ピー・エス・エス株式会社。

内容

1	概要	1
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services	1
	Collaboration.	1
	Deployment.	2
	システム アーキテクチャ.	3
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository	4
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager	4
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal	5
	ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager.	5
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View.	6
	実行サーバー.	6
	BIRT Report Designer for IBM SPSS	7
	Collaboration 付属の製品	8
2	このリリースにおける新機能	9
	リリース 4.2 の新機能	9
3	スタートアップガイド	11
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository の起動.	11
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository の停止.	14
	ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用	16
	パスワードの変更	17
	ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのナビゲーション	18
	システム情報へのアクセス	19
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用.	19
	管理対象サーバー.	20
	新しい管理対象サーバーの追加	21

管理対象サーバー プロパティの表示	24
管理対象サーバーへの接続	25
管理対象サーバーの接続解除	25
管理対象サーバーの削除	26
命名規則	26

4 ユーザーとグループ 28

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーの設定	29
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager における ユーザーとグループの管理	30
ユーザーの作成	32
ユーザーの編集	34
ユーザーの削除	36
グループの作成	36
グループの編集	38
グループの削除	40
ユーザーとグループのインポート	40
拡張グループの作成	41
許可ユーザーの作成	43

5 ロール 46

ロールの概要	46
Actions	47
管理者ロール	48
ロール定義の管理	49
新しいロールの作成	49
ロールの編集	51
ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集	51
ロールの削除	53

6 セキュリティプロバイダ 54

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるセ キュリティプロバイダ	55
セキュリティプロバイダの構成	56

ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のセキュリティ プロバイダ	63
セキュリティ プロバイダの構成	63
7 シングル サインオン	68
シングル サインオンの設定	68
8 リポジトリ構成	70
管理者	71
BIRT Report Designer for IBM SPSS	71
キャッシュ プロバイダ	72
カスタム ダイアログ	73
Data Service	75
Deployment Manager	75
Deployment Portal	76
Deployment Portal スコアリング	77
Enterprise View	77
ヘルプ	79
通知	79
ページャー	85
プロセス管理	85
報告	88
リポジトリ	88
Scoring Service	92
検索	92
セキュリティ	93
セットアップ	95
IBM ShowCase	96
CMOR	97
9 MIME タイプ	99
マッピングする MIME タイプを追加する	100

マッピングする MIME タイプを編集する	102
MIME タイプのマッピングの削除	102
10 リポジトリのインデックス再作成	104
11 通知	106
通知メッセージ テンプレートの構造	106
メッセージのプロパティ	107
メッセージ内容	109
メッセージ書式	111
通知テンプレートの編集	113
ジョブ ステータス	114
通知サービス パフォーマンスの最適化	116
通知サービス構成	116
一般的な推奨事項	118
通知サービスのデバッグ	120
通知の配信失敗のトラブルシューティング	121
12 JMS セットアップ	123
JMS トピックの構成	124
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のセットアップ	124
JMS クライアント プログラムのサンプル	124
サンプル プログラムの実行	126
メッセージ ベース プロセスの例	127
13 リポジトリの監査	128
データベースの監査機能	128
監査イベント	129
イベント テーブル	130
監査ビュー	133
監査 (SPSSPLAT_V_AUDIT)	133
カスタム プロパティ (SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY)	134

ファイル バージョン (SPSSPLAT_V_FILEVERSION)	135
ジョブ履歴 (SPSSPLAT_V_JOBHISTORY)	136
ジョブ ステップ (SPSSPLAT_V_JOBSTEP)	137
スケジュール (SPSSPLAT_V_SCHEDULE)	138
ストリーム属性値 (SPSSPLAT_V_STREAMATTRVALUE)	139
ストリーム ノード (SPSSPLAT_V_STREAMNODE)	139
スコアリング サービス ログギング	140
要求ログ テーブル	141
データベース ビュー	141
監査クエリーの例	144

付録

A トラブルシューティング 147

リポジトリのトラブルシューティング	147
Solaris	151
HP-UX	151
Oracle Database	151
JBoss	152
WebLogic	153
WebSphere	154

B Nativestore スキーマの参照 156

nativestore 要素	156
user 要素	157
obsolete 要素	158

C Notices 160

索引 163

概要

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は企業レベルのアプリケーションであり、予測分析の幅広い使用および展開を可能にします。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services によって、分析資産を安全かつ監査可能な形で集中的に格納でき、予測分析プロセスの管理および制御を行う高度な機能が提供されます。また、分析処理の結果をエンドユーザーに提供する高度なメカニズムも提供されます。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用すると、次のような利点があります。

- 分析資産の価値の保護
- 法令順守の実現
- 分析の生産性の向上
- 分析管理にかかる IT コストを最小化します

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用してさまざまな分析資産を安全に管理でき、分析資産の開発および使用における連携を促進します。さらに、展開機能によって適切なユーザーがタイムリーに、適切な処理を行う必要のある情報を取得できるようになります。

Collaboration

Collaboration とは、分析資産を効率的に共有および再利用する機能のことをいいます。企業全体で分析を開発および実行するために重要な機能です。分析者には、他の分析者またはビジネスユーザーが使用できるようにする必要があるファイルを置くための場所が必要です。こうした場所では、分析の展開を管理するためにファイルのバージョン制御の実装が必要です。ファイルへのアクセスおよび変更を制御するには、セキュリティが必要です。また、ビジネスにおけるこうした重要な資産の損失を防ぐためには、バックアップおよび復元のメカニズムが必要になります。

これらのニーズに対応するために、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では組織の多くのファイルシステムに類似したフォルダ階層を使用して資産を保存するリポジトリを用意しています。企業のユーザーに適切なアクセス権限がある場合、これらのユーザーは IBM®

SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository で保存されているファイルを使用できます。ユーザーが資産を検出できるよう、リポジトリでは検索機能を用意しています。

分析者は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のサービスインターフェイスを使用するクライアント アプリケーションからリポジトリのファイルを使用できます。IBM® SPSS® Statistics や IBM® SPSS® Modeler のような製品を使用して、リポジトリのファイルと直接相互作用できます。分析者は、開発中にファイルのバージョンを保存し、後でそのバージョンを取得、完了して運用プロセスに移行するまで変更を継続することができます。これらのファイルには、ビジネス ユーザが分析の結果を利用できる分析プロセスを実行するカスタム インターフェイスを追加できます。

リポジトリを使用すると、容易にバックアップおよび復元できる分析資産の集約場所を提供することによって、業務を保護します。また、ユーザー、ファイル、バージョン ラベル レベルの権限が各資産へのアクセスを制御します。バージョン コントロールおよびオブジェクト バージョン ラベルによって、適切なバージョンの資産を運用プロセスで使用できます。また、ログ機能によってファイルやシステムの変更を追跡できます。

Deployment

予測分析の利点を最大限に活用するために、分析資産では業務決定の入力を提供する必要があります。Deployment は、スケジュールに沿って、またはリアルタイムでユーザーおよびプロセスに結果を配信することによって、分析とアクションの間のギャップを埋めます。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では、リポジトリに保存されている各ファイルをファイルの実行順序を定義する **ジョブ** の処理に使用できます。実行の結果は、リポジトリ、ファイル システム、または指定した受信者に配信できます。リポジトリに保存した結果には、適切な権限を持つユーザーであれば IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal インターフェイスを使用してアクセスできます。ジョブ自体は、定義されたスケジュールに従って、またはシステム イベントに対応してトリガできます。

また、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のスコアリング サービスを使用して、展開モデルの分析閣下を、顧客との対話時にリアルタイムで配信できます。スコアリング向けに構成された分析モデルは、現在の顧客対話から収集したデータを過去のデータと結合して、対話のコースを決定するスコアを生成できます。クライアント アプリケーションはサービスを使用でき、プロセスを定義するカスタム インターフェイスを作成できます。

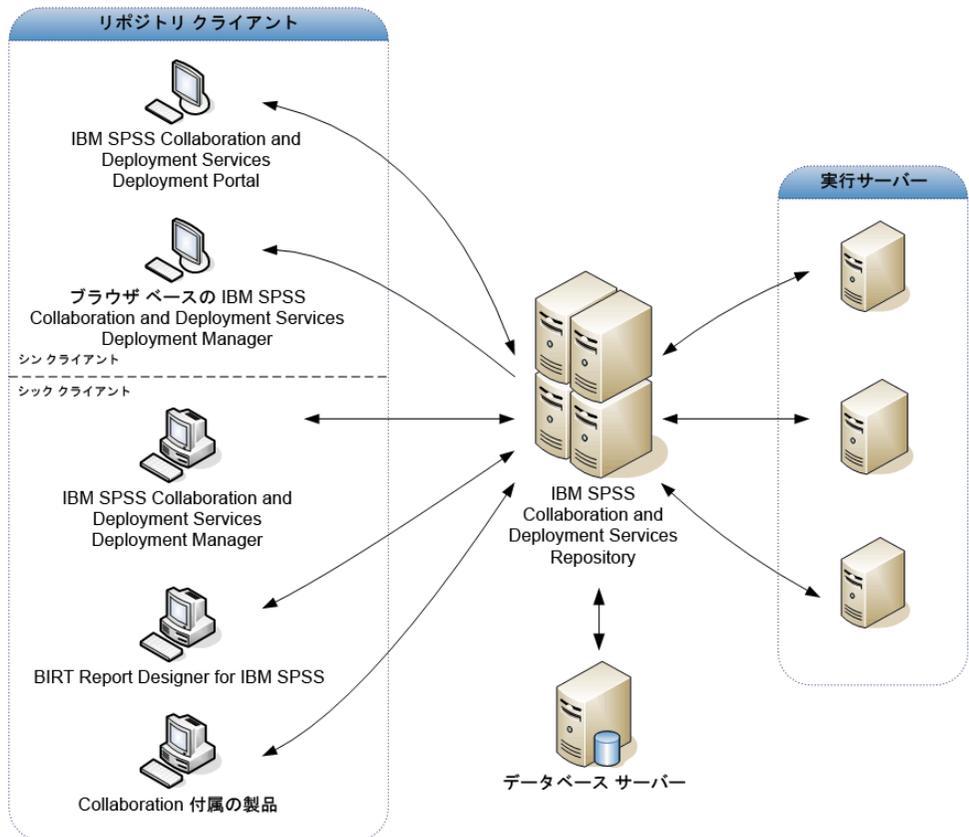
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の展開機能は、企業のインフラストラクチャと容易に統合するために設計されています。シングル サインオン機能によって、プロセスのさまざまな段階で資格情報を手動

で入力する必要がなくなります。さらに、Federal Information Processing Standard Publication 140-2 に準拠するよう、システムを設定できます。

システム アーキテクチャ

一般的に、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、さまざまなクライアントに機能する単一の、集約化された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository で構成され、実行サーバーを使用して分析資産を処理します。

図 1-1
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のアーキテクチャ



IBM SPSS Collaboration and Deployment Services は、次のコンポーネントから構成されています。

- 分析アーティファクト向け IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository
- Collaboration 付属の製品
- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager

- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal
- ブラウザベース IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager
- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View
- BIRT Report Designer for IBM® SPSS®

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository

リポジトリは、モデルおよびデータなどの分析資産を集中して格納するための場所を提供します。リポジトリには、次の機能があります。

- セキュリティ
- バージョン管理
- 検索
- 監査

リポジトリを使用するには、Oracle、IBM DB2 UDB、Microsoft SQL Server などのリレーショナル データベースがインストールされている必要があります。

リポジトリの構成オプションは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager またはブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して定義します。リポジトリのコンテンツは、Deployment Manager で管理し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal でアクセスします。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager はクライアント アプリケーションであり、リポジトリを使用して、モデルやスコアの更新など、分析タスクをスケジューリング、自動化、および実行できます。クライアント アプリケーションを使用すると、次のことが可能です。

- レポート、SAS シンタックス ファイル、およびデータ ファイルなど、システム内の既存ファイルを表示する。
- リポジトリにファイルをインポートする。
- 四半期ごとまたは時間ごとなど、特定の反復パターンを使用してジョブを繰り返し実行するようにスケジューリングする。
- ユーザーフレンドリなインターフェイスで既存のジョブ プロパティを変更する。

- ジョブのステータスを決定する。
- ジョブステータスのEメール通知を指定する。

また、クライアントアプリケーションを使用して、次のような IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の管理タスクを実行することができます。

- ユーザー管理
- セキュリティプロバイダ構成
- ロールおよびアクションの割り当て

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal は、リポジトリにアクセスするためのシンクライアント インターフェイスです。管理者向けに作成されているブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager と異なり、Deployment Portal はさまざまなユーザーを対象としている Web ポータルです。Web ポータルには次の機能があります。

- フォルダごとのリポジトリ コンテンツの参照
- 公開コンテンツの表示
- ジョブとレポートの実行
- リポジトリに保存されたモデルを使用してスコアを生成
- リポジトリ コンテンツの検索
- コンテンツのプロパティの表示
- Eメール アドレス、パスワード、全般オプション、登録、および出力ファイル形式のオプションなど、個々のユーザー設定へのアクセス

ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager は、次のようなセットアップやシステム管理タスクを実行するためのシンクライアント インターフェイスです。

- システムの構成
- セキュリティプロバイダの構成
- MIME タイプの管理

管理者以外のユーザーは、ログイン資格情報に関連する適切なアクションの権限を持つ場合、これらのタスクのいずれかを実行できます。アクション権限は管理者によって割り当てられます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View は、企業データの単一で一貫したビューを提供します。分析、最適化、配布、およびレポート作成に必要なウェアハウス データやトランザクションデータの共通ビューを、ユーザーが定義および管理することができます。基礎となるデータは、データ ウェアハウス、オペレーショナル データ ストア、オンラインのトランザクション データベースなど、さまざまなソースから入手できます。Enterprise View を利用すれば、企業データの使用方法が統一されるため、保存データの複雑な構造をエンド ユーザーが意識する必要はなくなります。Enterprise View は、予測エンタープライズにおけるデータ処理の中核を担っています。

データを検出するには、予測分析を実施する組織による大規模なリソースの投資が必要となります。このプロセスには、多大な労力がかかります。組織の各部門の担当者たちが関与することになり、また、多くの場合、組織の境界を越えてデータの構造や意味の違いを解決する必要が生じます。Enterprise View は、データ検出プロセスの結果の記録、結果として生じたスキーマのバージョン管理やセキュリティ保護、時間の経過に伴う変更の追跡を行うためのメカニズムを備えています。

Enterprise View には IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View Driver コンポーネントが含まれており、他のアプリケーションを使用してリポジトリに格納されている Enterprise View オブジェクトにアクセスできるように設計されています。このドライバは、ODBC ドライバと同様に機能しますが、物理データ ソースに直接問い合わせるのではなく、Enterprise View のデータ プロバイダの定義およびアプリケーション ビュー を参照します。Enterprise View が IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の一部としてインストールされるのに対して、Enterprise View は別個にインストールする必要がある点に注意してください。詳細は、インストール手順を参照してください。

実行サーバー

実行サーバーには、リポジトリ内に保存されているリソースを実行する機能があります。リソースが実行するジョブに含まれている場合、ジョブ ステップ定義でステップの処理に使用される実行サーバーが指定されています。実行サーバーの種類はリソースによって異なります。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services で現在サポートされる実行サーバーは次のとおりです。

- **SAS** :SAS の実行サーバーは SAS 実行形式ファイル sas.exe です。これは、Base SAS® ソフトウェアに含まれています。SAS シンタックス ファイルを処理するには、この実行サーバーを使用します。
- **リモート プロセス** :リモート プロセス実行サーバーを使用して、プロセスをリモートサーバー上で開始および監視できます。プロセスが完了すると、成功メッセージまたは失敗メッセージを返します。Remote Process Server として機能しているマシンには、リポジトリと通信するために必要なインフラストラクチャをインストールする必要があります。
適切なアダプタをインストールして、その他特定の種類のリソースを処理する実行サーバーをシステムに追加できます。詳細は、これらのリソース タイプのマニュアルを参照してください。
ジョブ作成時、実行サーバーをジョブ内の各ステップに割り当てます。ジョブを実行すると、リポジトリは、指定された実行サーバーを使用して対応する分析を行います。

BIRT Report Designer for IBM SPSS

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のレポート作成機能は、BIRT (Business Intelligence and Reporting Tools) により有効化されます。BIRT は、Eclipse Foundation が Eclipse Public License に基づいて配布するオープンソースのパッケージです。BIRT により、レポートのレイアウト、データ アクセス、スクリプトなど、レポート作成の中核となる機能が提供されます。BIRT の詳細は、[BIRT プロジェクト ページ \(http://www.eclipse.org/birt\)](http://www.eclipse.org/birt) を参照してください。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールには、BIRT のレポート作成エンジン サーバー コンポーネントが含まれており、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のレポート作成ジョブ ステップの一部として、BIRT のレポート シンタックス ファイルを実行できます。BIRT Report Designer for IBM® SPSS® は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services と組み合わせて使用できるスタンドアロン アプリケーションです。レポート作成のための高度な機能を豊富に持つユーザー インターフェイスを備えており、別個にインストールする必要があります。

BIRT Report Designer for IBM SPSS レポートで JDBC ベースのデータベース接続が必要な場合、対応する JDBC ドライバを IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository とともにインストールする必要があります。JDBC ドライバの場所に関するアプリケーション サーバー固有の情報については、リポジトリのインストール手順の該当する項を参照してください。

BIRT Report Designer for IBM SPSS を起動するには、インストール ディレクトリのファイル BIRT.exe を実行します。BIRT Report Designer for IBM SPSS の使用方法については、アプリケーションとともにインストールされるドキュメントを参照してください。

Collaboration 付属の製品

コラボレーションを伴う製品を使用すると、ネイティブ インターフェイスと使用して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository と対話できます。ファイルは、コラボレーション製品から直接保存および取得できます。

また、リポジトリに保存されているいくつかのファイルをジョブ内のステップとして実行できます。ジョブにはステップをいくつも追加することができます。各ステップは各ファイルに対応しています。ステップ間で定義されたリレーションシップによって、処理フローが決まります。繰り返しのパターンに従って、または定義されたイベントに対応して、特定の時刻に実行されるよう、ジョブのスケジュールを指定できます。さらに、通知を指定した受信者に送信し、各ステップおよびジョブ実行のステータスについて報告できます。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services と他の製品とのコラボレーションは、アダプタの使用によって可能です。これらのアダプタは、製品固有の機能を追加するために IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 環境に導入されています。詳細は、コラボレーション製品のマニュアルを参照してください。

このリリースにおける新機能

リリース 4.2 の新機能

アプリケーションでは次の機能拡張が行われています。

本リリースでは、PASW Collaboration and Deployment Services の名称が IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に変更されています。次の表では、以前のリリースで導入された機能の新しい名前を示しています。

旧名称	新名称	一般的な使用
PASW Collaboration and Deployment Services	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services
Deployment Manager	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager	Deployment Manager
Deployment Portal	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal	Deployment Portal
ブラウザベース Deployment Manager	ブラウザベース IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager	ブラウザベース Deployment Manager
PASW BIRT Report Designer	BIRT Report Designer for IBM® SPSS®	BIRT Report Designer for IBM SPSS
PASW タグ ライブラリ	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Tag Library	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Tag Library
リポジトリ	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository
Enterprise View	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View

RSS 通知

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用すると、リポジトリ コンテンツへの変更や処理ステータスのアラートを受信するために、RSS (Real Simple Syndication) フィード素材に登録し、通知をブラウザ

ベースのカスタム インターフェイスやダッシュボードに統合することができます。また、RSS フィードをフィルタリングして、特定の種類の通知のみを表示することができます。たとえば、ジョブの成功および失敗の通知に関心のあるユーザーは、コンテンツ通知を除外することができます。

スタートアップガイド

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository を正常にインストールすると、次の操作を実行できます。

- サーバーをコンソール アプリケーションまたはサービスとして起動する
- サーバーをコンソール アプリケーションまたはサービスとして停止する
- システムへのログインとログアウト
- パスワードの変更とインターフェイスによるナビゲーション
- IBM® SPSS® Modeler サポートの追加または変更

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository の起動

リポジトリはコンソールまたはバックグラウンドで実行できます。コンソールで実行すると、処理メッセージを表示することができ、予想できない動作の診断に役立ちます。ただし、リポジトリは通常、バックグラウンドで動作し、IBM® SPSS® Modeler や IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager などのクライアントからの要求を処理します。

注：同時に他のアプリケーションを実行すると、システムのパフォーマンスが低下し、起動が遅くなる場合があります。

Windows プラットフォームの場合、コンソールでの実行とは、コマンドウィンドウで実行することです。またバックグラウンドでの実行とは、Windows サービスとして実行することです。これに対し、UNIX プラットフォームの場合、コンソールでの実行とはシェルで実行することを意味し、バックグラウンドでの実行とはデーモンとして実行することを意味します。

注：UNIX システムでアクセス許可の競合を回避するには、常に同じ資格情報（可能な限り root）でリポジトリを起動する必要があります。

リポジトリは、インストール時に提供されるスクリプト、または WebLogic Server Administration Console など、アプリケーション サーバー固有の管理ツールを使用して起動できます。詳細は、アプリケーション サーバーのベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

Windows でサービスとして起動

JBoss を使用したインストールの場合、リポジトリを Windows のサービスとして起動するには、次の手順を実行します。

1. Windows の [サービス] コンソールを開きます。
2. 使用できるサービスのリストから [IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Server] を選択します。
3. [スタートアップの種類] を [自動] に設定します。これによって、システム起動時にリポジトリが自動的に起動します。
4. 現在アクティブでない場合は、[開始] をクリックします。
注：サーバーおよびコンポーネントがすべてアクティブになるまでに数分かかる場合があります。
5. [OK] をクリックすると、変更が確定され、ダイアログ ボックスが閉じます。

Weblogic を使用したインストールの場合は、SPSSDomain サーバーを Windows サービスとして設定する必要があります。詳細は、[WebLogic のドキュメント \(http://e-docs.bea.com/wls/docs81/adminguide/winservice.html\)](http://e-docs.bea.com/wls/docs81/adminguide/winservice.html) を参照してください。

WebSphere の自動起動構成の情報については、[WebSphere のドキュメント \(http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp\)](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp) を参照してください。

UNIX でデーモンとして起動

JBoss 以外のアプリケーション サーバーでリポジトリ デーモンを起動する方法の詳細は、アプリケーション サーバーのベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

JBoss を使用したインストールの場合、リポジトリを UNIX のデーモンとして起動するには、次の手順を実行します。

1. コマンド ラインから、JBoss インストールの bin ディレクトリに移動します。
2. 次のように入力します。

```
./mm.sh start
```

注：サーバーおよびコンポーネントがすべてアクティブになるまでに数分かかる場合があります。

3. サーバーがアクティブになっていることを確認するには、「`ps -e | grep wrapper`」と入力します。アクティブになっている場合は、プロセスが一覧に表示されます。

IBM i での起動

IBM i 上で IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services を実行する WebSphere インスタンスは、QShell 環境で次のようなコマンドを実行することにより起動します。

```
cd /QIBM/UserData/WebSphere/AppServer/V61/Base/profiles/<プロファイル名>/bin
./startServer <プロファイル名>
```

QWAS61 (WebSphere Application Server サブシステム) の起動時に、アプリケーションが自動的に起動するように構成するには、次の手順を実行します。

1. ユーザー プロファイルに QWAS61/QWASJOB D ジョブの説明および QWAS61/QWAS61 サブシステムの説明に対する権限を与えます。
2. プロファイルごとに、WebSphere Application Server プロファイルで使用するジョブの説明のコピーを作成します。コマンドラインで次のコマンドを使用します。

```
CRTDUPOBJ OBJ(QWASJOB D) FROMLIB(QWAS61) OBJTYPE(*JOB D) TOLIB(mywasjob d) NEWOBJ(myse rv)
```

3. 要求データまたはコマンド (RQSDTA) フィールドによって新しいサーバーを起動するように、CHGJOB D コマンドを使用して新たに作成されたジョブの説明を変更します。たとえば、サブシステム起動時にデフォルト プロファイルのアプリケーション サーバー (server1) を起動するには、RQSDTA フィールドを次のように設定します。

```
'QSYS/CALL PGM(product_library/QWASSTRSV R) PARM("-profilePath" "user_data_root/profiles/default" "-server"server1")'
```

4. 自動起動ジョブ エントリを QWAS61/QWAS61 サブシステムに追加します。CL コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
ADDAJE SBS D(QWAS61/QWAS61) JOB D(myse rv) JOB D(mywasjob d/myse rv)
```

オプション：システムの起動中に QWAS61 サブシステムが起動するようにシステムを構成します。自動起動を有効にするには、システムのスタートアッププログラムに STRSBS QWAS61/QWAS61 という行を追加します。

注：システムのスタートアッププログラムは QSTRUPPGM システム値によって定義されます。WebSphere Application Server サブシステムの起動前に、TCP/IP をアクティブ化する必要があります。スタートアッププログ

ラムまたは自動起動ジョブの STRSBS QWAS61/QWAS61 コマンドの実行前に、必ず STRTCP コマンドを実行してください。

注：これらのコマンドを、任意のスタートアップ rc スクリプトおよびシャットダウン rc スクリプトに追加できます。

Windows でコンソール アプリケーションとして起動

リポジトリを Windows でコンソール アプリケーションとして起動するには、次の手順を実行します。

1. リポジトリ インストール パスから、startserver.bat を実行します。バッチファイルによってコマンドライン ウィンドウが開き、サーバーが起動されます。

注：サーバーおよびコンポーネントがすべて読み込まれるまでに数分かかる場合があります。

2. ブラウザを開くことによって、サーバーがアクティブになっていることを確認します。URL フィールドに IP アドレスとポート番号を入力すると、ログイン画面が表示されます。

UNIX でコンソール アプリケーションとして起動

リポジトリを UNIX でコンソール アプリケーションとして起動するには、次の手順を実行します。

1. コマンドラインからリポジトリ インストール ディレクトリに移動して、startserver.sh を実行します。シェル スクリプトが実行され、サーバーが起動されます。

注：サーバーおよびコンポーネントがすべて読み込まれるまでに数分かかる場合があります。

2. サーバーがアクティブになっていることを確認するには、「ps -e | grep wrapper」と入力します。アクティブになっている場合は、プロセスが一覧に表示されます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository の停止

コマンドライン コンソールまたはサービス メニューからリポジトリを停止できます。

Windows でサービスを停止

リポジトリのアクティブなインスタンスを停止するには、次の手順を実行します。

1. Windows の [サービス] コンソールを開きます。
2. 利用可能なサービスの一覧から [IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Server] を選択します。
3. [停止] をクリックしてサービスを停止します。

注：サーバーおよびコンポーネントがすべて停止するまでに数分かかる場合があります。

UNIX でデーモンを停止

JBoss 以外のアプリケーション サーバーでリポジトリ デーモンを停止する方法の詳細は、アプリケーション サーバーのベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

JBoss を使用したインストールの場合、リポジトリのアクティブなインスタンスを停止するには、次の手順を実行します。

1. コマンド ラインから、JBoss インストールの bin ディレクトリに移動します。
2. 次のように入力します。

```
./mm.sh stop
```

3. サーバーが停止したことを確認するには、「ps -e | grep wrapper」と入力します。プロセスが一覧に表示されなくなります。

IBM i での停止

IBM i 上で IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を実行する WebSphere インスタンスは、QShell 環境で次のようなコマンドを実行することにより停止します。

```
cd /QIBM/UserData/WebSphere/AppServer/V61/Base/profiles/<プロファイル名>/bin  
./stopServer <プロファイル名>
```

Windows でコンソール アプリケーションを停止

リポジトリのアクティブなインスタンスを停止するには、次の手順を実行します。

1. 対応するコマンドライン ウィンドウを開き、Ctrl キーを押しながら C を押します。これにより、コマンドラインに処理終了が指示されます。
2. メッセージが表示されたら、「Y」を入力します。

UNIX でコンソール アプリケーションを停止

リポジトリのアクティブなインスタンスを停止するには、Ctrl + C キーの組み合わせを使用します。

注：サーバーおよびコンポーネントがすべて停止するまでに数分かかる場合があります。

ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用

[ログイン] ページは システムへの入口です。ログインするには、次の手順を行います。

- ▶ [ログイン] ページに移動します。通常、URL は `http://<ホスト IP アドレス>:<ポート番号>/security/login` です。[ログイン] ページが表示されます。IP アドレスの代わりに localhost を使用すると、一部のアプリケーションサーバーでログインに失敗する場合があります。常に IP アドレスを使用することをお勧めします。

図 3-1
[ログイン] ダイアログ ボックス

Deployment Manager にログイン

ログイン名:

パスワード:

[パスワードを変更しますか?](#)

Licensed Materials - Property of SPSS Inc., an IBM Company. © Copyright 2004, 2010 SPSS Inc., an IBM Company. IBM and the IBM logo are trademarks of IBM Corporation, registered in many jurisdictions worldwide. SPSS is a trademark of SPSS Inc., an IBM Company, registered in many jurisdictions worldwide.

- ▶ [ログイン名] フィールドにユーザー ID を入力します。
- ▶ [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。

- ▶ [ログイン] をクリックします。デフォルトでは、[構成] ページが表示されます。

付加オプション

[ログイン] ページでは、パスワードを変更することもできます。詳細は、p. 17 [パスワードの変更](#) を参照してください。

重要：ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、シングル サインオンを利用できません。

パスワードの変更

パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

[ログイン] ページで、[パスワードを変更しますか?] をクリックします。[パスワードの変更] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 3-2
パスワードの変更

The screenshot shows a dialog box for changing a password. It has four text input fields stacked vertically. The first is labeled 'ログイン名:' (Login name). The second is '現在のパスワード:' (Current password). The third is '新しいパスワード:' (New password). The fourth is '新しいパスワードの確認:' (Confirm new password). Below these fields is a blue button with the text '新しいパスワードの保存' (Save new password). To the right of the dialog box, there is a blue link that says 'ログインに戻る' (Return to login).

- ▶ [ログイン名] フィールドにログイン名を入力します。
- ▶ [現在のパスワード] フィールドに現在のパスワードを入力します。
- ▶ [新しいパスワード] フィールドに新しいパスワードを入力します。
- ▶ [新しいパスワードの確認] フィールドに新しいパスワードを再入力します。
- ▶ [新しいパスワードの保存] をクリックします。[メッセージ] セクションに次のテキストが表示されます。

Password updated

- ▶ [ログインに戻る] をクリックします。[ログイン] ページが表示されます。新しいパスワードを使用してシステムにログインします。詳細は、p.16 [ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用](#) を参照してください。

ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのナビゲーション

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、主にタブを基準としたナビゲーションを行います。通常、システムのコンポーネントは一般的な項目から特殊な項目へと並べられています。左側のナビゲーション パネルから、次のカテゴリを選択できます。

- 構成
- Deployment Portal
- MIME タイプ
- リポジトリ インデックス
- セキュリティ プロバイダ
- ログアウト
- バージョン情報
- 管理者ガイド
- ヘルプ

これらの項目ごとに、関連する 1 つ以上のセクションがあります。項目をクリックすると、対応するセクションが右側のペインに表示されます。セクションに複数のサブセクションがある場合は、一連のタブが右側のペインに表示されます。デフォルトでは、最初のタブの内容が表示されます。たとえば、ナビゲーションリストで [MIME タイプ] をクリックすると、[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] セクションが表示されます。

[設定] ボタンと Enter キーの使用

システムは、マウスで操作します。Enter キーを使用して操作を完了しないでください。これは通常、Enter を押しても要求が送信されないためです。システムでは常に [設定] ボタンが表示されます。[設定] をクリックする代わりに Enter キーを押すと、要求は処理されません。[設定] をクリックすることにより、変更内容がデータベースにコミットされます。

システム情報へのアクセス

インストール済みの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に関する情報は、バージョン情報ページを使用して確認できます。このバージョン情報ページには、システムのバージョン番号と、全般的なコンポーネントのカテゴリ（エリア）、バージョン番号、およびライセンスを含め、個々のコンポーネント（インストール済みパッケージ）に関する情報が表示されます。また、各パッケージに含まれるファイルを一覧する詳細情報も表示できます。システム情報、インストール ログ、およびアプリケーション サーバー ログをダウンロードすることも可能です。アプリケーション サーバー ログは、システムのトラブルシューティングに使用できます。詳細は、A 付録 p.147 [トラブルシューティング](#) を参照してください。

インストール済みパッケージの詳細情報を表示するには

- ▶ [詳細の表示] をクリックします。

システム情報をテキスト ファイルとしてダウンロードするには

- ▶ ページ下部の [バージョンとシステムの詳細をダウンロード] をクリックします。

バージョン、システム情報、およびアプリケーション サーバー ログのテキスト ファイルを含む zip ファイルをダウンロードするには

- ▶ ページ下部の [バージョン、システム詳細、およびログを 1 つの zip ファイルでダウンロードします] をクリックします。ファイルが zip アーカイブとしてダウンロードされます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用

管理タスクは、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の他に、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して実行できます。管理者は次の操作を行えます。

- セキュリティ プロバイダの構成と有効化
- システムにアクセスするユーザーおよびグループの作成
- システムの機能へのアクセスを制御するためのロールの定義

また、Deployment Manager を使用すると、IBM® SPSS® Statistics サーバーや IBM® SPSS® Modeler サーバーなどその他のサーバーの管理ができます。

管理対象サーバー

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのサーバー管理は、次の手順で実行します。

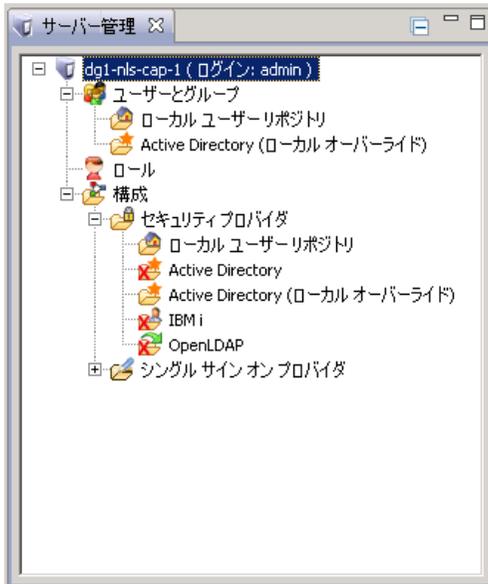
1. システムに管理対象サーバーを追加します。
2. 管理対象サーバーへログインします。
3. サーバーで必要な管理タスクを実行します。
4. 管理対象サーバーからログオフします。

この機能には、[サーバー管理] タブでアクセスできます。このタブには、現在管理可能なサーバーが表示されます。このリストは、Deployment Manager セッション全体に渡って存在するため、管理可能なサーバーに簡単にアクセスできます。

メニューから次の項目を選択します。

[Tools] > [サーバー管理]

図 3-3
管理対象サーバーのリスト



管理対象サーバーのリストには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバー、IBM® SPSS® Modeler サーバー、IBM® SPSS® Statistics サーバーなど、さまざまなサーバーの種類が記載されています。サーバーで実際に利用できる管理機能は、サーバーのタイプによって異なります。たとえば、リポジトリではセキュリティプロバイダを構成および有効化できますが、SPSS Modeler Server ではできません。

新しい管理対象サーバーの追加

管理タスクを行う前に、管理対象サーバーへの接続を確立する必要があります。

メニューから次の項目を選択します。

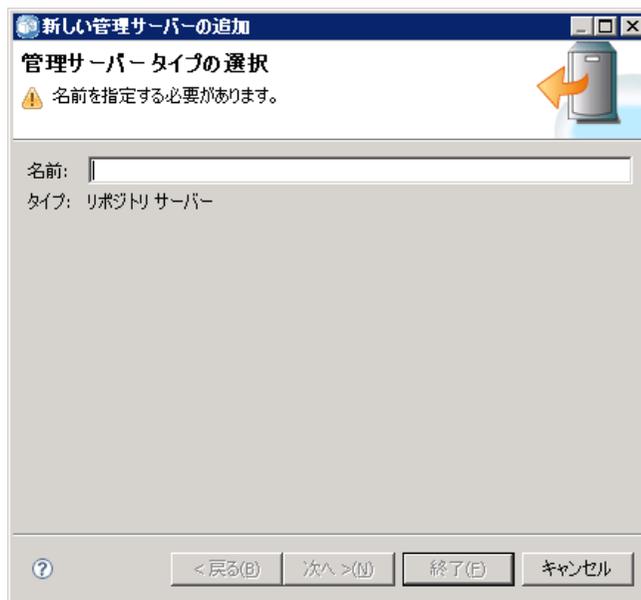
ファイル > 新規 > [管理対象サーバー接続]

[新しい管理対象サーバーの追加] ダイアログ ボックスが表示されます。新しい接続を追加するには、管理対象サーバーのタイプと、管理対象セキュリティ サーバーの情報を指定する必要があります。

管理対象サーバーの名前とタイプの選択

新しい管理対象サーバーをシステムに追加する最初の手順では、そのサーバーの 2 つのパラメータ (名前とタイプ) を定義します。

図 3-4
[管理対象サーバー タイプの選択] ダイアログ ボックス



名前: [サーバー管理] タブ上でそのサーバーを識別するために使用されるラベル。my_server:8080 など、名前にポート番号を含めると、管理対象サーバー リストでそのサーバーを識別するのに役立ちます。

注: アルファベット文字の使用をお勧めします。次の記号は禁止されています。

- 引用符 (一重および二重)

- アンパサンド (&)
- 小なり記号 (<) および大なり記号 (>)
- ピリオド
- カンマ
- セミicolon

タイプ: 追加するサーバーのタイプ。リストされるサーバー タイプは、システム構成によって異なります。次のものが含まれる場合があります。

- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Modeler Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Statistics Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Text Analytics Server

管理対象サーバー タイプの選択

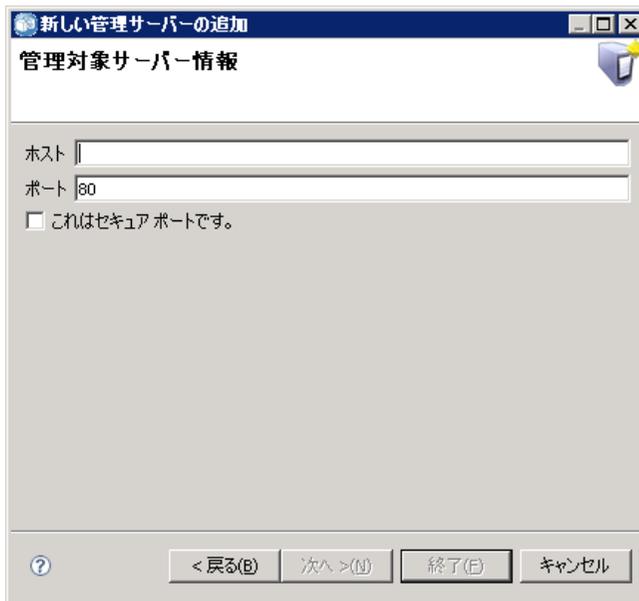
[管理対象サーバー タイプの選択] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。

1. サーバーの名前を入力します。
2. サーバー タイプを選択します。
3. [次へ] をクリックします。[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

管理対象サーバー情報

新しい管理対象サーバーをシステムに追加する 2 番目の手順では、そのサーバーのプロパティを定義します。

図 3-5
[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックス



ホスト：サーバーの名前または IP アドレス。

注：アルファベット文字の使用をお勧めします。次の記号は禁止されています。

- 引用符（一重および二重）
- アンパサンド (&)
- 小なり記号 (<) および大なり記号 (>)
- ピリオド
- カンマ
- セミコロン

ポート：サーバー接続に使用されるポート番号。

これは安全なポートです。サーバー接続での Secure Sockets Layer (SSL) の使用を有効または無効にします。このオプションは、すべての管理対象サーバー タイプで指定できるわけではありません。

管理対象サーバー情報の指定

[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。

1. 追加するサーバーのホスト名または IP アドレスを入力します。

2. 追加するサーバーが実行されているポート番号を入力します。
3. サーバーで SSL を使用するかどうかを指定します（使用できる場合）。
4. [完了] ボタンをクリックします。

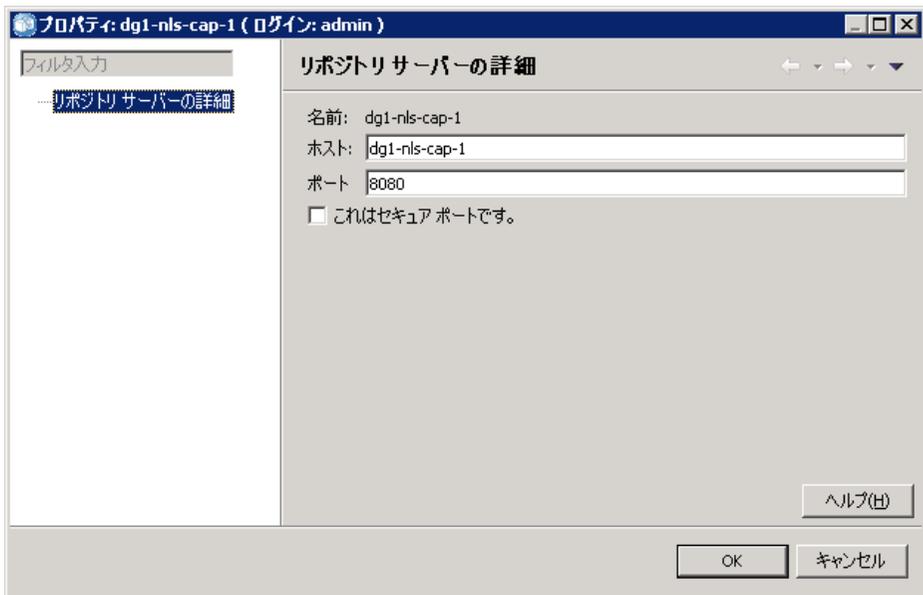
[サーバー管理] タブの管理対象サーバー リストに、該当サーバーが表示されます。

管理対象サーバー プロパティの表示

既存の管理対象サーバーのプロパティを表示するには、[サーバー管理] タブで該当サーバーを右クリックして、ドロップダウンメニューの[プロパティ]を選択します。[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。表示されるプロパティは、選択したサーバーのタイプによって異なります。

図 3-6

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository Server のプロパティ



リポジトリサーバーのプロパティには、次のものがあります。

- **ラベル:** [サーバー管理] タブで表示される、サーバーに関連付けられる名前。
- **ホスト:** サーバーの名前または IP アドレス。
- **ポート:** サーバー接続に使用されるポート番号。
- **これは安全なポートです。** このオプションを選択すると、サーバーの通信に SSL 接続が使用されます。

管理対象サーバーへの接続

ほとんどのサーバーでは、管理タスクを行うために、管理対象サーバーリストのサーバーに接続する必要があります。[サーバー管理] タブで、管理対象サーバーをダブルクリックします。[サーバーへログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 3-7
[サーバーへログイン] ダイアログ ボックス



リポジトリ サーバーのログイン パラメータには、次のものがあります。

ユーザー ID: サーバーにログインするユーザー。クリア テキストで表示されます。

パスワード: ユーザーの認証に使用される文字列。安全のために、パスワード テキストはマスクされた形式で表示されます。

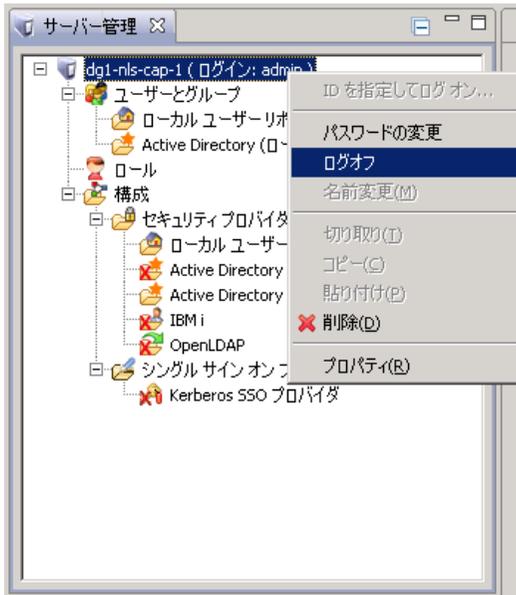
プロバイダ: 指定されたログイン名とパスワードの組み合わせを検証するために使用するプロバイダ。このフィールドは、システムで複数のセキュリティ プロバイダが有効になっている場合にだけ表示されます。複数のセキュリティ プロバイダが有効になっていない場合、システムによって、提供された資格情報がローカルのユーザー リポジトリに対して検証されます。

管理対象サーバーの接続解除

目的の管理タスクが完了したら、サーバーからログオフします。

1. [サーバー管理] タブで、サーバーを右クリックします。
2. [ログオフ] を選択します。

図 3-8
サーバーからのログオフ



サーバーを管理するには、再びログインする必要があります。

管理対象サーバーの削除

サーバーは、管理対象サーバー リストから削除するまで、リストに表示されます。

1. [サーバー管理] タブで、削除するサーバーを選択します。
2. メニューから次の項目を選択します。

編集 > 削除

または、サーバーを右クリックして、ドロップダウン メニューから [削除] を選択します。

削除したサーバーの管理タスクが後で必要になった場合は、そのサーバーをシステムに再び追加する必要があります。

命名規則

システムでは、フォルダからトピックまで、エンティティに名前を付けるように求められます。たとえば、新規ユーザーを追加したり、新しいトピックを作成したりすることがあります。

そのような場合には、次の命名規則が適用されます。

- システムでは、スペースを含む、大部分の文字を使用できます。ただし、スラッシュ (/) は使用できません。名前の一部にスラッシュを入力すると、このスラッシュは名前に含まれません。
- スペースを含め、長さは最大 255 文字です。
- 名前では、大文字と小文字が区別されません。

ユーザーとグループ

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ユーザーとは、ファイルへのアクセスとプログラムの実行が許可されている個人またはプロセスです。内部データベースまたは外部データベースに対するユーザーの認証は、ユーザー名とパスワードの組み合わせを使用して行われます。アプリケーション リソースに対するユーザーのアクセス レベルには複数の種類があります。

ユーザーは、情報へのアクセスや情報操作の必要性に基づいてグループに分類することができます。ユーザーをグループ分けすることで、複数のユーザーに対し系統立った一定の方法でアクセス許可を割り当てるときの労力を軽減できます。

ユーザーおよびグループに対して、システム リソースへのアクセス許可を割り当てるためのメカニズムをロールといいます。ロールとは、システム内で事前定義された複数のアクションの組み合わせで、たとえばファイルや MIME タイプへのアクセス権、システム構成を変更する権限などが設定されます。ロール割り当てを追加または削除したり、必要に応じて新しいロールを作成することができます。ロールは、ユーザーがシステムにアクセスする前に明示的に割り当てる必要があります。詳細は、5 章 p. 46 [ロールの概要](#) を参照してください。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のユーザーとグループは、セキュリティ プロバイダにより処理されます。セキュリティ プロバイダとは、ユーザーの資格情報を認証するシステムのことです。ユーザーとグループは、ローカルで定義したり（この場合は IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 自体がセキュリティ プロバイダとなります）、Windows Active Directory や OpenLDAP などのリモート ディレクトリを元にして作成することができます。詳細は、6 章 p. 54 [セキュリティ プロバイダ](#) を参照してください。

環境によっては、リモートで定義された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 専用のユーザーのグループを設定する必要があります。これが該当するのは、リモート ディレクトリに指定されているグループがそれほど詳細に指定されていない場合です。外部アプリケーションからのリモート ディレクトリのクエリーが許可されていない場合、またはポリシーの制限がある場合、ディレクトリの管理者は、より詳細なグループを追加できないことがあります。このような場合は、ローカルで指定したリモート ユーザーのグループ（拡張グ

グループといます) を、リモート ディレクトリですでに定義されているグループのリストに追加します。

ほとんどの環境では、リモート ディレクトリに存在するユーザーの数が非常に多くても、実際に IBM SPSS Collaboration and Deployment Services にアクセスする必要があるユーザーはその中のごく一部です。この場合、管理者が許可ユーザーのリストを指定することにより、該当するユーザーだけがログインできるようになります。許可ユーザーのリストはユーザー名でのフィルタとして機能しますが、実際のユーザー認証はリモート ディレクトリに対して通常の方法で実行されます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーの設定

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services でローカル ユーザーを設定する手順は次のとおりです。

1. ユーザーを作成し、必要に応じてグループのメンバシップを割り当てます。ローカル ユーザーとグループは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で管理できます。
2. 個別のユーザーごと、またはグループごとにロールを割り当て、ユーザーのアクセス レベルを定義します。詳細は、5 章 p. 51 [ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集](#) を参照してください。適切なアクションが設定されたロールがない場合は、新しいロールを作成する必要があります。詳細は、5 章 p. 49 [新しいロールの作成](#) を参照してください。

外部で定義されたユーザーを IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で設定する手順は次のとおりです。

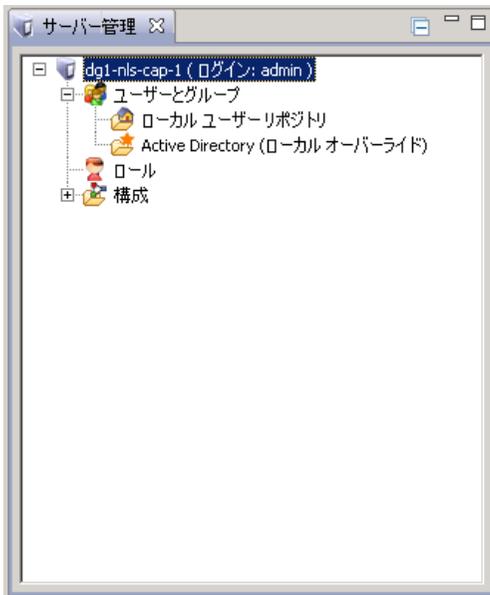
1. 外部セキュリティ プロバイダを設定します (定義されていない場合)。ユーザーは、このセキュリティ プロバイダを元にして作成されます。詳細は、6 章 p. 56 [セキュリティ プロバイダの構成](#) を参照してください。
2. Active Directory (ローカル オーバーライド) ユーザーの一部にアクセスを制限する必要がある場合は、許可ユーザーを作成します。許可ユーザーを作成できるのは、Deployment Manager だけです。
3. リモート ディレクトリに存在しないグループに Active Directory (ローカル オーバーライド) ユーザーを追加する必要がある場合は、拡張グループを定義し、ユーザーをそのグループに追加します。拡張グループを作成できるのは、Deployment Manager だけです。
4. 個別のユーザーごと、またはグループごとにロールを割り当てます。リモートで定義されたユーザーへのロールの割り当て方法は、ローカル ユーザーにロールを割り当てる場合と同じです。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるユーザーとグループの管理

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、ローカルユーザーとグループ、および Active Directory (ローカルオーバーライド) セキュリティプロバイダに対して定義した許可ユーザーと拡張グループを管理できます。ユーザーまたはグループに関する操作を行う前に、この機能を制御するための管理インターフェイスを開きます。

1. [ツール] メニューで、[サーバー管理] を選択します。
2. [サーバー管理] タブから、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバーにログインします。[ユーザーとグループ] アイコンをダブルクリックして、階層を展開表示します。設定済みの外部セキュリティプロバイダがない場合、階層には [ローカルユーザーリポジトリ] しか表示されません。Active Directory (ローカルオーバーライド) がセキュリティプロバイダとして設定されていて、許可ユーザーまたは拡張グループ オプションが有効になっている場合は、[Active Directory (ローカルオーバーライド)] も表示されます。

図 4-1
[サーバー管理] タブ

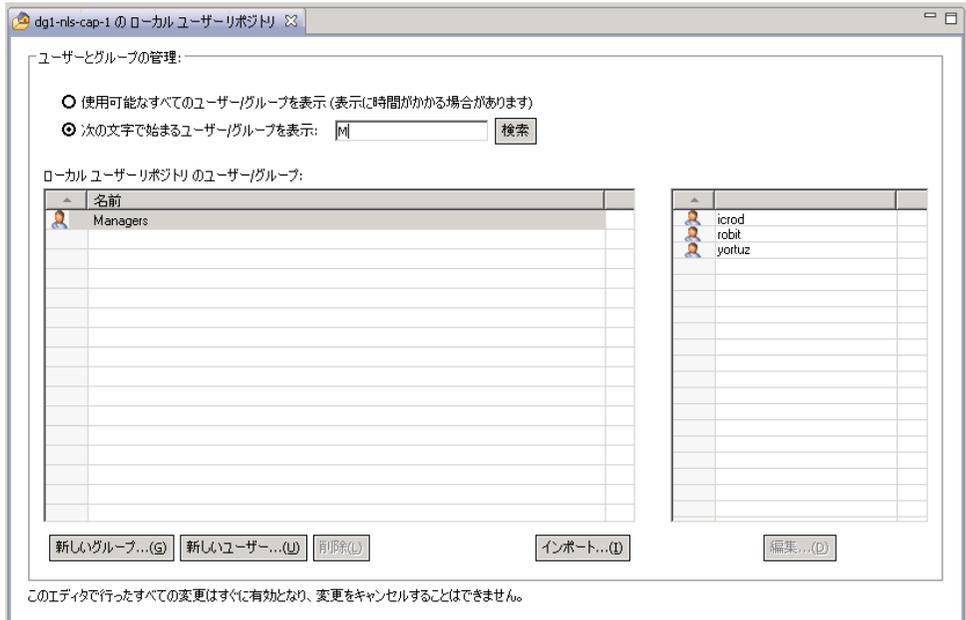


3. [ローカルユーザーリポジトリ] アイコン、または [Active Directory (ローカルオーバーライド)] アイコンをダブルクリックします。

[ユーザーとグループの管理] エディタが表示されます。

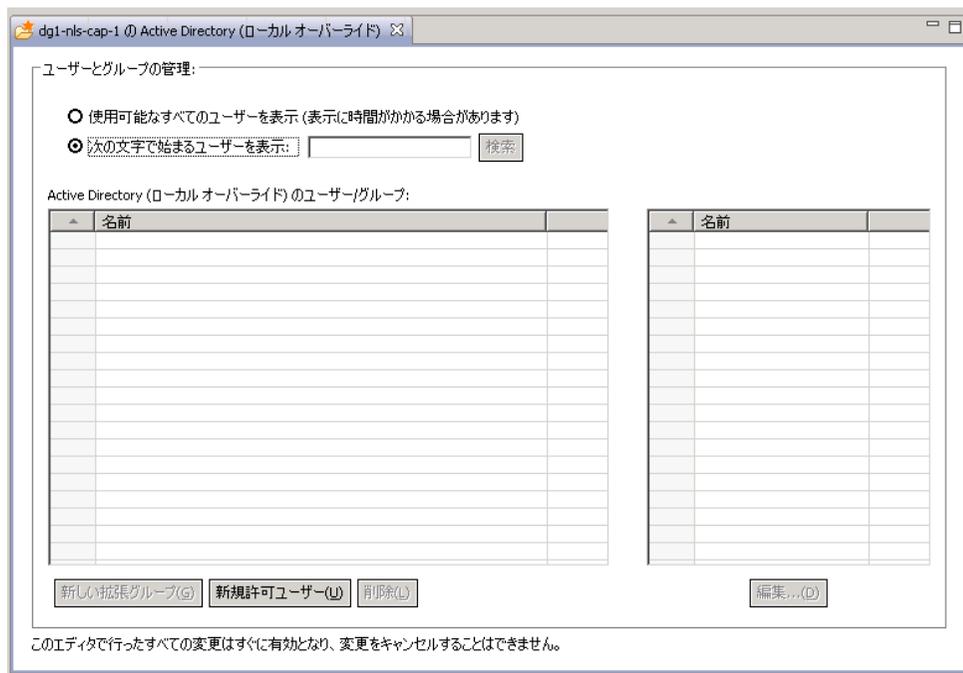
- ローカル ユーザー リポジトリの場合、このエディタには、すべてのネイティブ ユーザーおよびグループが表示されるか、ユーザー名やグループ名の最初の文字列に基づいてフィルタリングされたリストが表示されます。管理者は、ユーザーとグループの作成および削除、既存のユーザーとグループのプロパティの編集、ユーザーとグループのインポートを実行できます。

図 4-2
[ユーザーとグループの管理] エディタ



- Active Directory (ローカル オーバーライド) の場合、このエディタには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services にアクセスできるようにあらかじめ外部で定義されたすべてのユーザーおよびグループが表示されるか、ユーザー名やグループ名の最初の文字列に基づいてフィルタリングされたリストが表示されます。管理者は、許可ユーザーと拡張グループの作成および削除を実行できます。また、そのセキュリティ プロバイダに対して許可ユーザーと拡張グループのオプションが有効になっている場合は、既存のグループのプロパティも編集できます。詳細は、6 章 p. 54 [セキュリティ プロバイダ](#) を参照してください。

図 4-3
[ユーザーとグループの管理] エディタ (Active Directory (ローカル オーバーライド) の場合)



ユーザーの作成

ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新規ユーザー] をクリックします。[ユーザーの新規作成] ダイアログボックスが表示されます。

図 4-4
[ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックス

ユーザー名：名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。

パスワード：ローカル ユーザーのパスワードです。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

確認：パスワード確認用のフィールドです。パスワードが一致しない場合、メッセージが表示されます。

使用可能なすべてのグループを表示：システムで認識されている全グループのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

次の文字で始まるグループを表示：入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なグループ :ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

グループの所属ユーザー :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

すべて追加 :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

すべて削除 :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

ローカルユーザーを作成する場合、ログイン資格情報を指定する必要があります。ユーザーはグループに関連付けることもできます。

1. [ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスで、ユーザー名を指定します。
2. パスワードを指定します。
3. パスワードを確認します。
4. 必要に応じて、ユーザーをグループに関連付けます。
5. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいユーザーが表示されます。

ユーザーの編集

ローカルユーザーおよび Active Directory (ローカル オーバーライド) の許可ユーザーについて、グループ割り当てを編集できます。ローカルユーザーの場合、パスワードも編集できます。[ユーザーとグループの管理] エディタでユーザーを選択して、[編集] をクリックします。[ユーザーの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-5
[ユーザーの編集] ダイアログ ボックス

パスワード: ローカル ユーザーのパスワードです。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

確認: パスワード確認用のフィールドです。パスワードが一致しない場合、メッセージが表示されます。

使用可能なすべてのグループを表示: システムで認識されている全グループのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

次の文字で始まるグループを表示: 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なグループ: ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

グループの所属ユーザー :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

すべて追加 :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

すべて削除 :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

ユーザーの削除

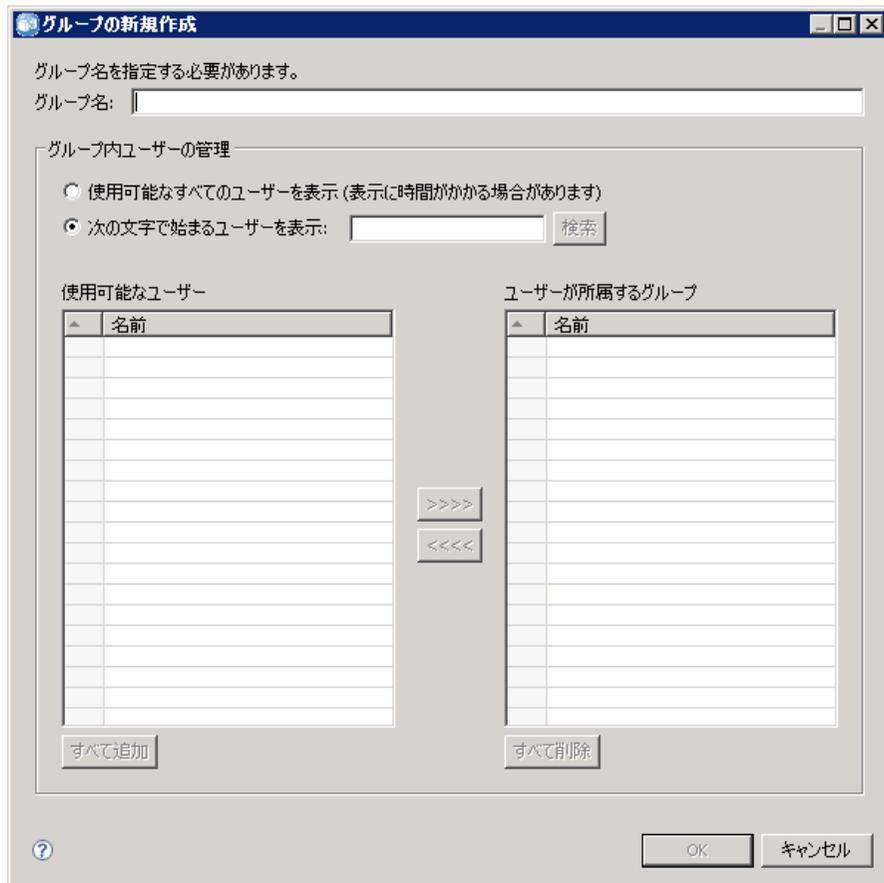
ローカル ユーザー、または Active Directory (ローカル オーバーライド) の許可ユーザーを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、ユーザーを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。ユーザーの削除を確認するダイアログボックスが表示されます。
3. [はい] をクリックすると、ユーザーがシステムから削除されます。ユーザーは、ユーザーとグループのリストから削除されます。

グループの作成

ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新規グループ] をクリックします。[グループの新規作成] ダイアログボックスが表示されます。

図 4-6
[グループの新規作成] ダイアログ ボックス



グループ名 : 名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。

使用可能なすべてのユーザーを表示 : システムで認識されている全ユーザーのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

次の文字で始まるユーザーを表示 : 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なユーザー : グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

ユーザーが所属するグループ : グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

すべて追加 :すべてのユーザーをグループに関連付けます。

すべて削除 :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

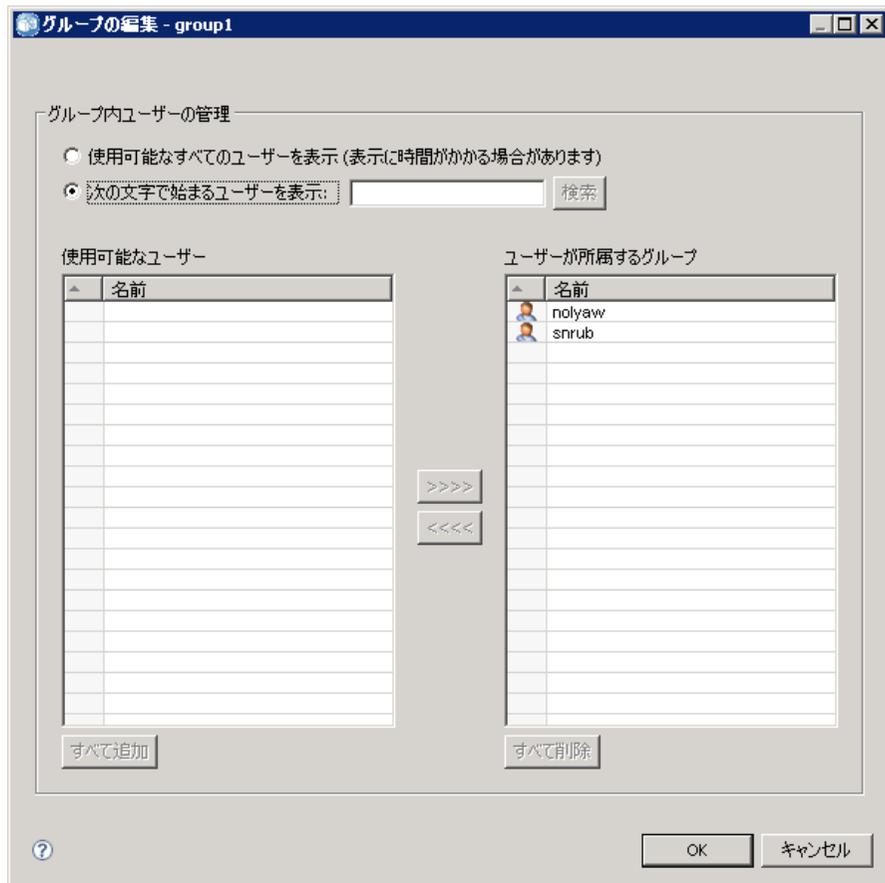
ローカル グループを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。グループには複数のユーザーを追加することもできます。

1. グループ名を指定します。
2. 必要に応じて、グループにユーザーを追加します。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいグループが表示されます。

グループの編集

ローカル グループ、および Active Directory (ローカル オーバーライド) の拡張グループのユーザー リストは変更することができます。[ユーザーとグループの管理] エディタでグループを選択して、[編集] をクリックします。[グループの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-7
[グループの編集] ダイアログ ボックス



使用可能なすべてのユーザーを表示 : システムで認識されている全ユーザーのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

次の文字で始まるユーザーを表示 : 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なユーザー : グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

ユーザーが所属するグループ : グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

すべて追加 : すべてのユーザーをグループに関連付けます。

すべて削除 :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

グループの削除

ローカル グループまたは Active Directory (ローカル オーバーライド) の拡張グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、削除するグループを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。選択したエントリの削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。
3. [はい] をクリックすると、グループがシステムから削除されます。グループはユーザーとグループのリストから削除されます。

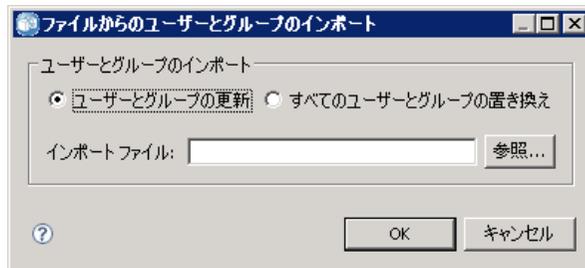
ユーザーとグループのインポート

多数のローカル ユーザーまたはグループを定義する場合は、プリンシパルのインポート ファイルを使用してユーザーとグループを一括してインポートできます。このファイルは `nativestore.xsd` スキーマで定義されている構造に従う必要があります。詳細は、「[B 付録](#)」を参照してください。

ユーザーとグループをインポートするには、次の手順を実行します。

1. ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで [インポート] ボタンをクリックします。[ファイルからのユーザーとグループのインポート] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-8
[ファイルからのユーザーとグループのインポート] ダイアログ ボックス



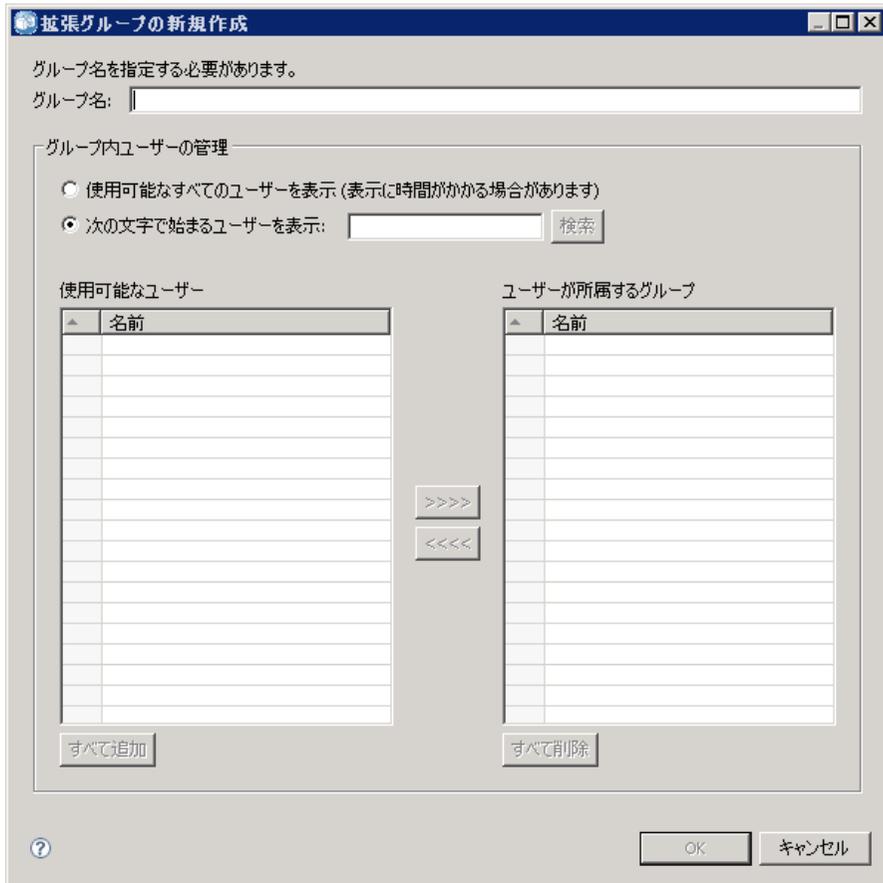
2. [ユーザーとグループの更新] または [すべてのユーザーとグループの置き換え] を選択します。

- **ユーザーとグループの更新** :インポート ファイルの情報で既存のユーザーを更新します。このファイルで定義されていない既存のユーザーとグループは、更新されません。
 - **すべてのユーザーとグループの置き換え** :現在のユーザーとグループを、インポート ファイルの情報で置き換えます。このファイルで定義されていない既存のユーザーとグループは、削除されます。
3. インポート ファイルが置かれている場所に移動します。
 4. [OK] をクリックすると、ファイルがインポートされます。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいユーザーとグループが表示されます。

拡張グループの作成

Active Directory (ローカル オーバーライド) 用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新しい拡張グループ] をクリックします。[拡張グループの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-9
[拡張グループの新規作成] ダイアログ ボックス



使用可能なすべてのユーザーを表示：許可ユーザーのオプションが有効である場合、すべての許可ユーザーのリストが表示されます。許可ユーザーのオプションが無効である場合、ディレクトリ内の全ユーザーのリストが表示されます。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

次の文字で始まるユーザーを表示：入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なユーザー：グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

ユーザーが所属するグループ：グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

すべて追加 :すべてのユーザーをグループに関連付けます。

すべて削除 :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

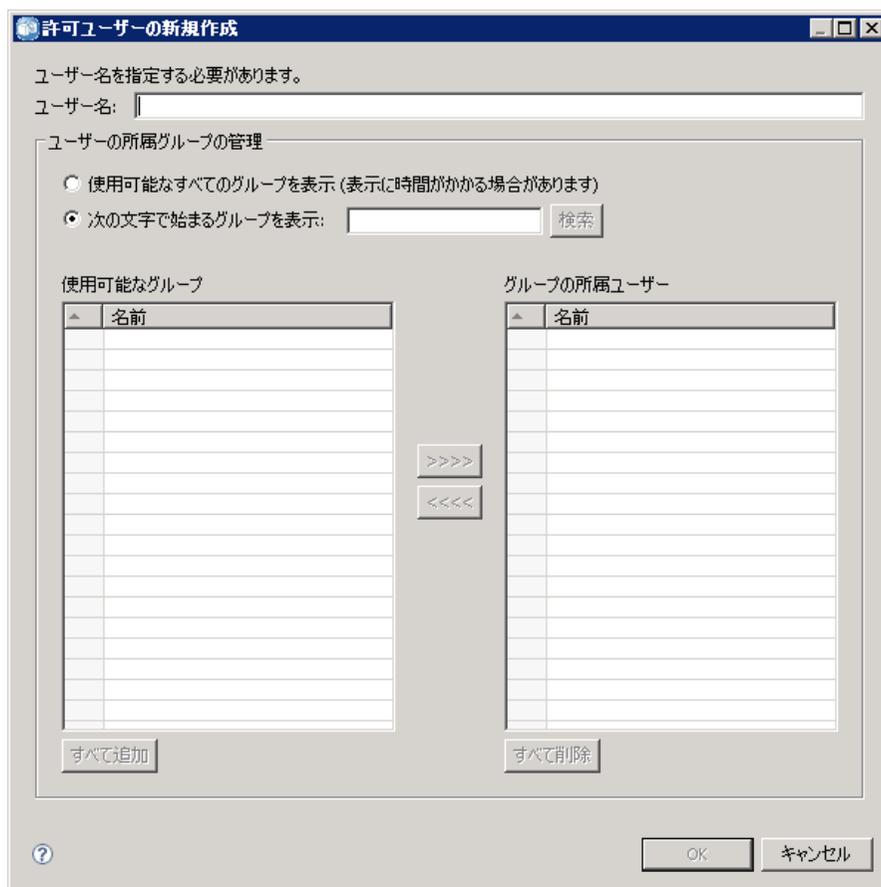
拡張グループを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。グループには複数のユーザーを追加することもできます。

1. グループ名を指定します。
2. 必要に応じて、グループにユーザーを追加します。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しい拡張グループが表示されます。

許可ユーザーの作成

Active Directory (ローカル オーバーライド) 用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新しい許可ユーザー] をクリックします。[許可ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-10
[許可ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックス



ユーザー名 : 名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。リモート ディレクトリにユーザーが実際に存在するかどうかの確認はできません。また、ユーザー名の入力を誤ると、システムに対する認証は行われません。

すべての拡張グループを表示 :すべての拡張グループのリストが表示されます。

次の文字で始まるグループを表示 : 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

使用可能なグループ :ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

グループの所属ユーザー :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

すべて追加 :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

すべて削除 :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

注：許可ユーザーを拡張グループに関連付けることができるのは、Active Directory (ローカル オーバーライド) で拡張グループが有効になっている場合だけです。拡張グループが有効になっていない場合、ユーザー選択のフィールドは表示されません。

許可ユーザーを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。ユーザーはグループに関連付けることもできます。

1. [ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスで、ユーザー名を指定します。
2. 必要に応じて、ユーザーを拡張グループに関連付けます。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しい許可ユーザーが表示されます。

ロール

ロールの概要

ロールを使用して、システム機能へのユーザーおよびグループのアクセスを管理することができます。ロールはユーザーおよびグループに割り当てられ、セキュリティプロバイダを組み合わせて使用します。

作成された各ロールは、ロールに割り当てられたユーザーまたはグループが持つアクセス許可やコントロールのレベルを示すアクションと関連付けます。たとえば、基本ユーザーロールを作成します。基本ユーザーロールには、システムにアクセスするためのアクションの制限されたセットや、リポジトリのコンテンツを表示する機能が割り当てられています。基本ユーザーロールは、サーバーを定義、他のユーザーを追加、またはその他のユーザーやグループに影響を与えるシステム構成を定義するような関連アクションを割り当てられていません。

ただし、上級ユーザーロールは、ユーザーを削除したり、グループを作成、追加ロールを定義するなど、管理タスクを実行する必要があります。この場合、アプリケーションドメインに対してより多くのコントロールを持つ、制限の少ないロールを作成し、非常に少人数のユーザーに割り当てることができます。

一連の可能なアクションはシステム内で定義され、アクションを割り当てるユーザーによって編集することはできません。

ユーザーが複数のグループに所属する場合、そのユーザーに割り当てられたロール「アクションセット」は、グループメンバシップを介して間接的に割り当てられているすべてのロール同様、そのユーザーに明示的に割り当てられたすべてのロールで構成されています。ユーザーまたはグループが複数のロールに割り当てられている場合、ユーザーまたはグループのアクションセットは、グループメンバシップで間接的に割り当てられたすべてのロールに加え、明示的に割り当てられたすべてのロールで構成されています。ユーザーとグループはセキュリティプロバイダごとに管理する必要があります。ロールはセキュリティプロバイダ全体で管理されます。ユーザーおよびグループの詳細は、「4章」を参照してください。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Managerのサーバー管理ツールを使用して、ロール定義を管理し、ロールに割り当てられているユーザーやグループを変更します。

Actions

一連のアクションで構成されるロール。このアクションはシステムによって定義されており、変更することはできません。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のアクション

- **コンテンツとフォルダへのアクセス** :IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository にアクセスします。
- **共同フィードにアクセス** :RSS (Really Simple Syndication) フィードなどの共同フィードにアクセスします。
- **布置**。リポジトリの設定を変更します。
- **モデルの構成** : スコアリングのモデルを構成します。
- **登録の作成** :リポジトリ オブジェクト (フォルダ、ファイル、ジョブなど) を個別に登録します。登録者は、対応するオブジェクトが変更されたときに E メール メッセージを受信します。
- **通知の定義と管理** :ジョブの成功や失敗などのイベントについて複数のユーザーに配信される通知を定義および管理します。
- **資格情報の定義** :実行サーバーのセキュリティ資格情報を作成、表示、および変更します。
- **カスタム プロパティの定義** :リポジトリ内のオブジェクトのカスタム プロパティを定義および変更します。
- **データ ソースの定義** :データ ソースを定義および変更します。
- **メッセージドメインの定義** :JMS メッセージングのドメインを定義および変更します。
- **サーバー クラスタの定義** :実行サーバー クラスタを定義および変更します。
- **サーバーの定義** :実行サーバーを定義および変更します。
- **トピックの定義** :リポジトリのトピック階層を定義および変更します。
- **ジョブ編集** :ジョブを作成および変更します。ユーザーに対してジョブが表示されるかどうかはアクセス許可によって決まります。
- **ジョブ実行** :ジョブを実行します。ユーザーに対してジョブが表示されるかどうかはアクセス許可によって決まります。
- **ロックの管理** :ユーザーがリポジトリ ソースで作成するロック (他のユーザーがロックしたリソースのロック解除など) を管理します。
- **IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View の管理** :Enterprise View、アプリケーション ビュー、データ プロバイダ定義を作成、変更、および削除します。
- **登録の管理** :他のユーザーの登録を管理したり、登録を削除したりします。

- **MIME タイプ**:リポジトリに対してマップされている MIME タイプを管理します。
- **リポジトリ インデックス**:リポジトリのコンテンツのインデックスを再作成します。
- **カスタム ダイアログの実行**:IBM® SPSS® Statistics カスタム ダイアログを実行します。
- **動的レポートの実行**:IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal で、Business Intelligence Reporting Tools (BIRT) など、動的レポートを実行します。
- **スケジュール**: ジョブ スケジュールを管理します。
- **モデルのスコアリング**: モデルをスコアリングします。
- **すべてのバージョンを表示**:Deployment Portalで、オブジェクトのすべてのバージョン（ラベル付けされているものとされていないもの）を表示します。デフォルトでは、Deployment Portal でラベル付きバージョンのみが参照できます。
- **最新を表示**: 最新バージョンのオブジェクトをインストールします。
- **ワークの送信**:IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services による処理で必要となるワーク（レポートなど）を送信します。
- **ユーザー設定管理**: 他のユーザーの設定を管理します。
- **期限切れファイルの表示**:ファイルやジョブなど期限切れコンテンツを表示します。
- **モデル管理ダッシュボードの表示**: IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager および Deployment Portal にモデル管理ダッシュボードを表示します。

注:[最新の表示] アクションは、[すべてのバージョンの表示] のサブセットで、両方のアクションがある場合、[すべてのバージョンを表示] が [最新を表示] に優先されます。

管理者ロール

システムには定義済みの管理者ロールが含まれます。このロールは変更できません。このロールは、システムで行うことができずすべてのアクションと関連付けられています。このロールに割り当てられたユーザーは、システムのいかなるアクションも実行できます。また、リポジトリ コンテンツのエクスポートやインポートなど、アクションによって制御されていない一部の機能は、このロールに割り当てられたユーザーのみが行うことができます。

管理者が可能な制御が幅広いため、このロールにユーザーを割り当てる際には注意が必要です。システム内のすべての権限にアクセスする必要があるユーザーのみを割り当ててください。アクションのサブセット

のみが必要がユーザーが、カスタム ロールに割り当てます。詳細は、p. 49 [新しいロールの作成](#) を参照してください。

ロール定義の管理

ロールに関する操作を行うには、[ツール] メニューの [サーバー管理] を選択し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバーを選択して、ログインします。そのサーバーに対応する [ロール] アイコンをダブルクリックして、[ロール定義の管理] エディタにアクセスします。

図 5-1
ロール定義とユーザー/グループ割り当ての管理



このエディタで行ったすべての変更は直ちに反映されます。変更内容をキャンセルすることはできません。

すべてのロール: セキュリティ プロバイダで利用できる全ロールのリストが表示されます。新しいロールを追加すると、このリストにエントリが追加されます。システムに新しいロールを追加するには、[新規ロール] ボタンをクリックします。ロールを削除するには、ロールを選択して [削除] ボタンをクリックします。このリストでロールを選択すると、ロールに関連付けられているアクションが表示されます。

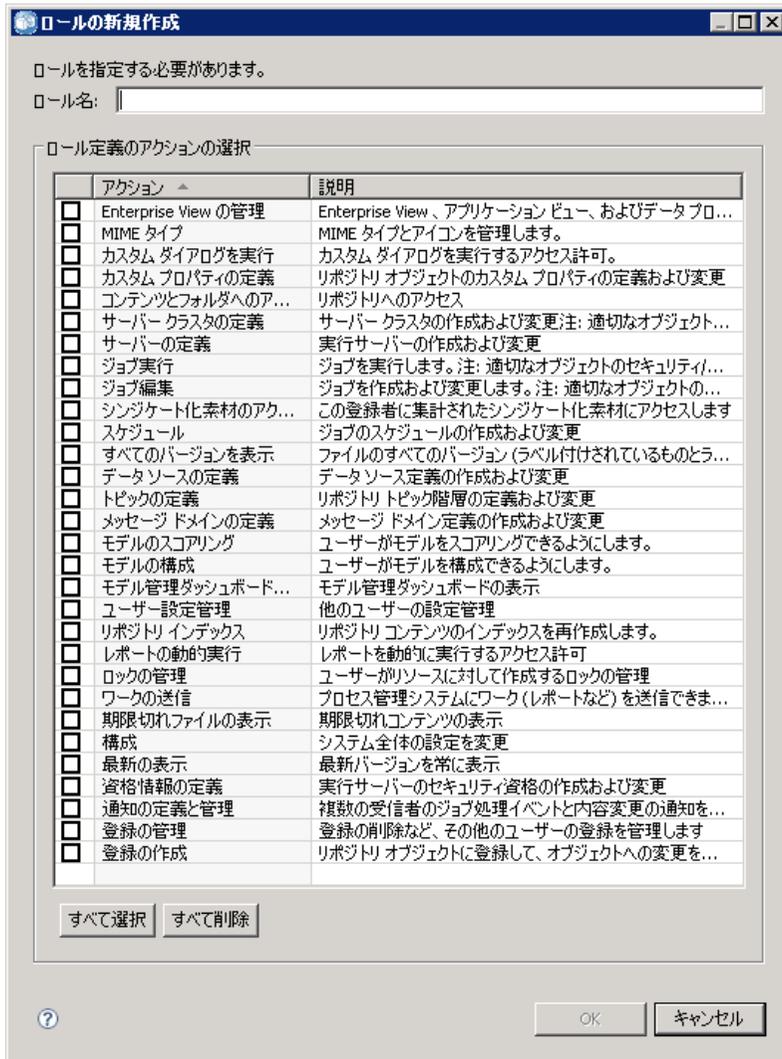
ロールの定義: 選択したロールに関連付けられているアクションのリストが表示されます。選択したロールに関連付けられているアクションを編集するには、[アクションの編集] ボタンをクリックします。

ロールに割り当てるユーザーとグループ: 選択したロールに割り当てられているユーザーとグループのリスト。選択したロールに割り当てられているユーザーとグループを編集するには、[ユーザーとグループの編集] ボタンをクリックします。

新しいロールの作成

新しいロールを作成するには、[ロール] エディタの [新規ロール] をクリックします。[ロールの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 5-2
[ロールの新規作成] ダイアログ ボックス



ロール名: ロールを識別するためのテキスト文字列。ロール名は一意である必要があります。他のロール名と重複しないようにしてください。

アクション。 システム内で定義されている、使用可能なすべてのアクションが表示されます。最初は、ロールにアクションは関連付けられていません。

アクションをロールに割り当てるには、アクションの横にあるチェックボックスをオンにします。また、すべてのアクションをロールに追加するには、[すべて選択] ボタンをクリックします。[すべて削除] ボタンをクリックすると、アクションの選択がすべてクリアされます。アクションのリスト

は、[アクション]列をクリックして並べ替えることができます。[OK]をクリックすると、ロールが作成されて保存されます。

ロールの編集

ロールに割り当てられているアクションのリストを編集するには、編集するロールを[ロール]エディタで選択し、[アクションの編集]ボタンをクリックします。[ロールの編集]ダイアログボックスが表示されます。

ロール名：ロールを識別するためのテキスト文字列。ロール名は一意である必要があります。他のロール名と重複しないようにしてください。

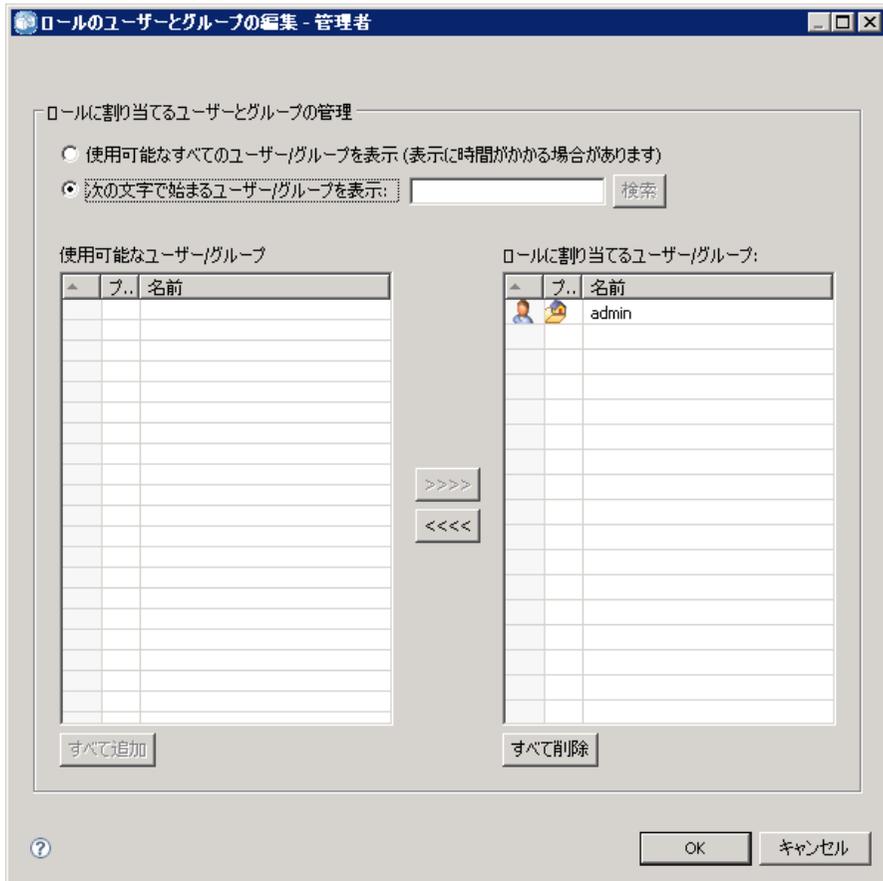
アクション。システム内で定義されている、使用可能なすべてのアクションが表示されます。最初は、ロールにアクションは関連付けられていません。

アクションをロールに割り当てるには、アクションの横にあるチェックボックスをオンにします。また、すべてのアクションをロールに追加するには、[すべて選択]ボタンをクリックします。[すべて削除]ボタンをクリックすると、アクションの選択がすべてクリアされます。アクションのリストは、[アクション]列をクリックして並べ替えることができます。[OK]をクリックすると、変更したロール定義が保存されます。

ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集

ロールを定義した後、アクセスのレベルを定義するために、ロールにユーザーとグループを関連付ける必要があります。ロールにユーザーとグループを割り当てるには、[ロール]エディタの[ユーザーとグループの編集]ボタンをクリックします。[ロールのユーザーとグループの編集]ダイアログボックスが表示されます。

図 5-3
[ロールのユーザーとグループの編集] ダイアログ ボックス



ロールに割り当てられるユーザーとグループの表示には、次の2つのオプションがあります。

- **使用可能なすべてのユーザー/グループを表示**：すべてのセキュリティプロバイダで指定できるすべてのユーザーおよびグループのリストが表示されます。
- **次の文字で始まるユーザー/グループを表示**：検索オプションに従って、指定可能なユーザーとグループのリストをフィルタリングします。

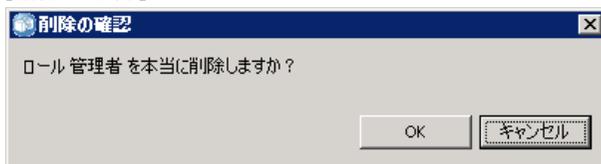
[使用可能なユーザー/グループ] のリストには、検索オプションに適合するユーザーとグループが表示されます。ユーザーまたはグループを選択して [>>>>] ボタンをクリックすると、そのユーザーまたはグループがロールに割り当てられます。ロールからユーザーまたはグループを削除するには、[ロールに割り当てるユーザー/グループ] リストでユーザーまたはグループを選択し、[<<<<] ボタンをクリックします。完了したら、[OK] をクリックします。

ロールの削除

ロールを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ロール] エディタで、削除するロールを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。

図 5-4
[削除の確認] ダイアログ ボックス



3. 削除するロールを確認して、[OK] をクリックします。
そのロールがシステムから削除されます。

セキュリティ プロバイダ

セキュリティ プロバイダは、特定のユーザー ディレクトリに対してユーザーが提供した資格情報を検証します。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services には、認証用の内部ディレクトリが含まれますが、既存のエンタープライズ ユーザー ディレクトリも使用できます。使用できるプロバイダは次のとおりです。

- **ネイティブ (またはローカル ユーザー リポジトリ)**: IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の内部セキュリティ プロバイダ。ユーザー、グループ、ロールをすべて定義できます。ネイティブ プロバイダは常に有効で、無効化することはできません。
- **Active Directory®**: 認証、許可、およびセキュリティ ポリシーを管理する Microsoft バージョンの軽量ディレクトリ アクセス プロトコル (Lightweight Directory Access Protocol: LDAP)。このプロバイダのユーザーとグループは Active Directory フレームワークで直接定義する必要があります。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で使用するために Active Directory を構成すると、ユーザーを Active Directory サーバーに対して認証し、該当するユーザーに関連するアクセス許可やアクセス権限を維持することができます。ネイティブ プロバイダと異なり、このプロバイダは有効化したり無効化したりできます。Active Directory の詳細は、元のベンダーのマニュアルを参照してください。
- **Active Directory (ローカル オーバーライド)**: Active Directory を使用し、拡張グループや許可ユーザーのフィルタリングを作成できるプロバイダ。拡張グループには、Active Directory の一連のユーザーが含まれますが、Active Directory フレームワーク外にあります。許可ユーザーのフィルタリングでは、システムに対して認証を行う Active Directory ユーザーのリストを定義されたセットに制限します。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。
- **IBM i**: IBM i ユーザー プロファイル ディレクトリを使用して、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーを認証することができます。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。IBM i セキュリティ プロバイダをシングルサインオン対応 IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで使用する場合、EIM (Enterprise Identify Management) を有効化する必要があります。また、アプリケーション サーバーが IBM i 以外のホストで稼動している場合、/QIBM/UserData/Java400/ext/eim.jar を IBM SPSS Collaboration and

Deployment Services アプリケーション サーバーのライブラリ ディレクトリにコピーする必要があります。

- **JDE アプリケーション ユーザー:**IBM® ShowCase® を使用する場合、IBM ShowCase アダプタ インストールでは、このセキュリティ プロバイダを IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーにインストールします。このセキュリティ プロバイダを、JD Edwards (JDE) アプリケーションがログインして IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 環境を使用できるように設定する場合があります。詳細については、『IBM ShowCase 管理者ガイド』を参照してください。
- **OpenLDAP®:** 認証、許可、セキュリティ ポリシーに対するオープンソースの LDAP の実装。このプロバイダのユーザーとグループは、LDAP ツールを使用して直接定義する必要があります。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で使用するために OpenLDAP を構成すると、ユーザーを OpenLDAP サーバーに対して認証し、該当するユーザーに関連するアクセス許可やアクセス権限を維持することができます。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。
- **SiteMinder®:** ポリシーベースの認定および認証向けの、Computer Associates の企業規模の Web アプリケーション アクセス管理システム。このプロバイダのユーザーおよびグループは、外部 LDAP ベースのディレクトリに定義され、アクセス ポリシーは SiteMinder に定義されます。プロバイダを使用すると、拡張グループや許可ユーザーのフィルタリングを作成できます。

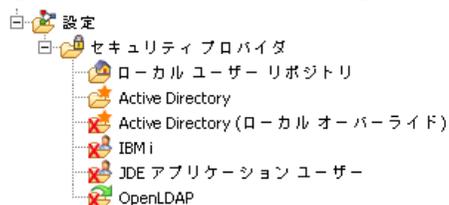
重要: SiteMinder セキュリティ プロバイダは、デフォルトでは有効化されていません。SiteMinder 認証を有効化するには、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストール ディスクの optional フォルダから `siteminder.package` をインストールする必要があります。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるセキュリティ プロバイダ

セキュリティ プロバイダを使用した操作を行う前に、この機能を制御するための管理インターフェイスを開きます。

1. [ツール] メニューの [サーバー管理] を選択します。
2. [サーバー管理] タブから、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーにログインします。
3. サーバーの [構成] アイコンをダブルクリックして、階層を展開します。
4. [セキュリティプロバイダ] アイコンをダブルクリックして、階層を展開します。
5. 構成するセキュリティ プロバイダの種類をダブルクリックします。

図 6-1
セキュリティプロバイダへのアクセス



セキュリティプロバイダの構成

各種類のセキュリティプロバイダには、使用する認証および承認システムに応じた設定があります。

ネイティブ

ネイティブセキュリティプロバイダは IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 内部でだけ使用され、構成する設定事項はありません。

Active Directory

Active Directory 設定を構成するには、[Active Directory] アイコンをダブルクリックします。

図 6-2
Active Directory の構成

Active Directory (PredictiveProseingServer) ✕

セキュリティ プロバイダの構成

有効

ホスト URL

ユーザー ベース識別名

グループ ベース識別名

ドメイン

ドメイン ユーザー

ドメイン ユーザー パスワード

SSL を使用する

- **有効** : Active Directory をサービス プロバイダとして使用するかどうかを指定します。
- **ホスト URL** : Active Directory サーバーの URL。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **ユーザー ベース識別名** : ユーザー検索用のベース識別名。
- **グループ ベース識別名** : グループ検索用のベース識別名。
- **ドメイン** : ユーザーがログインしている DNS 名前空間。
- **ドメイン ユーザー** : 検索を実行するためのユーザー ID。domain#username という形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **ドメイン ユーザー パスワード** : セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワード フィールドに値を入力してください。
- **SSL を使用する** : Active Directory サーバーとの通信に SSL を使用する場合に選択します。

設定の変更が終わったら、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。

Active Directory (ローカル オーバーライド)

Active Directory (ローカル オーバーライド) セキュリティ プロバイダの設定を構成するには、[Active Directory (ローカル オーバーライド)] アイコンをダブルクリックしてください。ほとんどの設定は Active Directory の場合と同じです。ただし、ローカル オーバーライド用の 2 つの設定が追加されています。

図 6-3
Active Directory (ローカル オーバーライド) の構成

セキュリティプロバイダの構成

有効

ホスト URL

ユーザー ベース識別名

グループ ベース識別名

ドメイン

ドメイン ユーザー

ドメイン ユーザー パスワード

SSL を使用する

許可ユーザー

拡張グループ

- **許可ユーザー**：許可ユーザーを使用するかどうかを指定します。許可ユーザーを使用すると、ユーザーを定義するローカルのリストに含まれているユーザーだけを Active Directory で認証できます。
- **拡張グループ**：拡張グループを使用するかどうかを指定します。拡張グループを使用すると、Active Directory ユーザーのグループを定義できます。Active Directory ユーザーは、このようなローカル グループに割り当てることができます。

設定の変更が終わったら、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。

OpenLDAP

OpenLDAP 設定を構成するには、[OpenLDAP] アイコンをダブルクリックします。

図 6-4
OpenLDAP の構成

OpenLDAP (PredictiveProseingServer) ✖

セキュリティ プロバイダの構成

有効

ホスト URL

ユーザー ベース識別名

グループ ベース識別名

検索ユーザー

検索ユーザー パスワード

SSL を使用する

- **有効** : OpenLDAP をセキュリティ プロバイダとして使用するかどうかを指定します。
- **ホスト URL** : LDAP サーバーへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレス (ldap:// など) です。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **ユーザー ベース識別名** : ユーザー検索用のベース識別名。
- **グループ ベース識別名** : グループ検索用のベース識別名。
- **検索ユーザー** : 検索を実行するためのユーザー ID。識別名の形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **検索ユーザー パスワード** : セキュリティのため、指定されたドメインユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワードフィールドに値を入力してください。

設定の変更が終わったら、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。

IBM i

IBM i セキュリティ プロバイダを構成するには、[IBM i] アイコンをダブルクリックします。

図 6-5
IBM i の構成

My Repository の IBM i

セキュリティプロバイダ構成

有効

IBM i Server: localhost

ユーザー プロファイル:

パスワード: *****

EIM ルックアップの有効化

EIM サーバー:

EIM ユーザー:

EIM パスワード: *****

- **有効**: IBM i システムをセキュリティ プロバイダとして使用するかどうかを指定します。
- **IBM i サーバー**: IBM i システムへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレスです。Enterprise Identity Management (EIM) とともに IBM i セキュリティ プロバイダを使用して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services へのシングル サインオンを有効化する場合、この値は EIM 対象レジストリ値に一致する必要があります。EIM 対象レジストリ値がホストの完全修飾名である場合、完全修飾ホスト名を入力してください。
- **ユーザー プロファイル**: IBM i システムでディレクトリ検索に使用されるユーザー プロファイル。
- **パスワード**: 指定した IBM i プロファイルのパスワード。セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワード フィールドに値を入力してください。
- **[EIM ルックアップの有効化]**: IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで有効化されたシングル サインオンの場合、Enterprise Identity Management が有効化されていることを示します。
- **EIM サーバー**: Enterprise Identity Management のホスト URL。
- **EIM ユーザー**: Enterprise Identity Management のホスト ログインのユーザー名。
- **EIM パスワード**: 指定した Enterprise Identity Management ユーザーのパスワード。

注：任意の IBM i ユーザー プロファイルをディレクトリ検索に使用できませんが、表示されるプロファイル一覧は、検索に使用するプロファイルの権限に基づいてフィルタ処理されます。QSECOFR レベルのユーザーを指定すると、システムのプロファイルがすべて表示されます。権限が少ないユーザーを使用すると、ユーザー プロファイルのセキュリティ設定に基づいて、表示されるプロファイルの数が少なくなります。

IBM i ユーザーとグループ権限

IBM i ユーザー プロファイルがグループとしての使用を目的としている場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 権限が割り当てられてから、その他の IBM i プロファイルをそのプロファイルに割り当てる必要があります。そうでない場合、権限がその他の IBM i ユーザーに割り当てられることはありません。たとえば、IBM i ユーザーの test が作成され、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の権限が割り当てられ、その後グループとして IBM i ユーザー test2 に割り当てられた場合、test2 は IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の test の以前の権限を継承しません。ただし、test の IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 権限が定義される前に test2 が test と関連付けられている場合、test2 は権限を継承します。

IBM ShowCase および JD Edwards (JDE) ユーザー

IBM® ShowCase® を使用する場合、セキュリティ プロバイダおよび IBM SPSS Collaboration and Deployment Services との統合に関する追加情報に関する製粉付属のマニュアルを参照してください。

JDE アプリケーション ユーザー

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services - Server Adapter for ShowCase をインストールすると、JDE Application User セキュリティ プロバイダを使用して Deployment Manager および Deployment Portal のエンド ユーザーは Oracle JDE アプリケーション ユーザーでログインすることができます。詳細については、『IBM® ShowCase® 管理者ガイド』を参照してください。

SiteMinder セキュリティ プロバイダ

SiteMinder 設定を構成するには、[SiteMinder] アイコンをダブルクリックします。

図 6-6
SiteMinder 構成

Field Name	Value
有効	<input type="checkbox"/>
Local Computer	127.0.0.1
Site Minder IP	127.0.0.1
Agent Secret	*****
Directory Root	OU=NEWYORK, DC=spss, DC=COM
Organization Root	OU=USERS, OU=NEWYORK, DC=spss, DC=COM
Directory Server IP	127.0.0.1
Directory User Name	SiteMinder
Directory User Password	*****
Directory Name	SPSS AD
Directory Search User Query	(&(objectCategory=user)(sAMAccountName=\$ID))
Directory Search Group Query	(&(objectCategory=group)(sAMAccountName=\$ID))

- **有効** : SiteMinder をセキュリティプロバイダとして使用するかどうかを指定します。
- **ローカルコンピュータ**: IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のホストアドレスまたはドメイン名。
- **SiteMinder IP**: SiteMinder ポリシーのサーバー アドレスまたはドメイン名。
- **エージェント シークレット**: エージェント spss-agent のエージェント シークレットで、SiteMinder ポリシー サーバー ログインに使用されます。
- **ディレクトリ ルート** : DC=domain name part 1, DC=domain name part 2 ... などの、ディレクトリ ルート ベース DN。
- **組織ルート** : OU=unit, DC=domain name part 1, DC=domain name part 2 ... などの、組織ルート。
- **ディレクトリ サーバー** : ディレクトリ サーバー アドレスまたはドメイン名。
- **ディレクトリ ユーザー名**: ディレクトリ ログインのユーザー名。
- **ディレクトリ ユーザー パスワード**: ディレクトリ ログインのパスワード。
- **ディレクトリ名** : LDAP ディレクトリ名。

- **ディレクトリ検索ユーザー クエリー:** ユーザーベース認証に関する LDAP クエリー。
- **ディレクトリ検索グループ クエリー:** グループベース認証に関する LDAP クエリー。

設定の変更が終わったら、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。

ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のセキュリティプロバイダ

[セキュリティプロバイダ] ページにアクセスするには、次の手順を実行します。

- ▶ ナビゲーションリストで [セキュリティプロバイダ] をクリックします。[セキュリティプロバイダ] ページが表示されます。

図 6-7
[セキュリティプロバイダ] ページ



使用されているセキュリティプロバイダを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ セキュリティプロバイダの横のチェックボックスをオン（有効にする場合）またはオフ（無効にする場合）にします。
- ▶ [設定] をクリックします。

セキュリティプロバイダの構成

各種類のセキュリティプロバイダには、使用する認証および承認システムに応じた設定があります。

ネイティブ

ネイティブ (またはローカル) セキュリティ プロバイダは、システムに固有であり、削除することはできません。ネイティブ セキュリティ システムにユーザーを追加することはできますが、これを無効にしたり設定したりすることはできません。

Active Directory

Active Directory の設定を構成するには、[Active Directory (LDAP 経由)] チェック ボックスの右にある [設定の編集] をクリックします。現在の設定が表示されます。次の設定を変更できます。

- **ホスト URL : Active Directory** サーバーの URL。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **ユーザー ベース識別名** : ユーザー検索用のベース識別名。
- **グループ ベース識別名** : グループ検索用のベース識別名。
- **ドメイン** : ユーザーがログインしている DNS 名前空間。
- **ドメイン ユーザー** : 検索を実行するためのユーザー ID。domain\username という形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **ドメイン ユーザー パスワード** : セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。
- **SSL を使用する** : [true] を指定すると、Active Directory サーバーとの通信に SSL が使用されます。

設定を変更したら、[設定] をクリックします。

Active Directory (ローカル オーバーライド)

[Active Directory (ローカル オーバーライド)] セキュリティ プロバイダ オプションを選択すると、Active Directory に加えてローカル プリンシパル フィルタの追加オプションを使用したり、ローカル グループを指定したりできます。[Active Directory (ローカル オーバーライド)] 設定を構成するには、[Active Directory (ローカル オーバーライド)] チェック ボックスの右にある [設定の編集] をクリックします。現在の設定が表示されます。ほとんどの設定は Active Directory の設定に対応しています。ただし、次の 2 つのオプションも使用できます。

- **許可ユーザー**：許可ユーザーを使用するか ([true])、使用しないか ([false]) を指定します。許可ユーザーを使用すると、ユーザーを定義するローカルのリストに含まれているユーザーだけを Active Directory で認証できます。
- **拡張グループ**：拡張グループを使用するか ([true])、使用しないか ([false]) を指定します。拡張グループを使用すると、Active Directory ユーザーのグループを定義できます。Active Directory ユーザーは、このようなローカル グループに割り当てることができます。

設定を変更したら、[設定] をクリックします。

IBM i

IBM i に IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository をインストールすると、IBM i ユーザー プロファイル ディレクトリは、リポジトリ ログインの認証に使用されます。IBM i 設定を構成するには、[IBM i] チェック ボックスの右にある [設定の編集] をクリックします。現在の設定が表示されます。次の設定を変更できます。

- **IBM i サーバー**：IBM i システムへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレスです。Enterprise Identity Management (EIM) とともに IBM i セキュリティ プロバイダを使用して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services へのシングル サインオンを有効化する場合、この値は EIM 対象レジストリ値に一致する必要があります。EIM 対象レジストリ値がホストの完全修飾名である場合、完全修飾ホスト名を入力してください。
- **ユーザー プロファイル**：IBM i システムでディレクトリ検索に使用されるユーザー プロファイル。
- **パスワード**：指定した IBM i プロファイルのパスワード。セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。
- **[EIM ルックアップの有効化]**：IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで有効化されてシングル サインオンの場合、true の値は Enterprise Identity Management が有効化されていることを示します。
- **EIM サーバー**：Enterprise Identity Management のホスト URL。
- **EIM ユーザー**：Enterprise Identity Management のホスト ログインのユーザー名。
- **EIM パスワード**：指定した Enterprise Identity Management ユーザーのパスワード。

注：任意の IBM i ユーザー プロファイルをディレクトリ検索に使用できますが、表示されるプロフィール一覧は、検索に使用するプロフィールの権限に基づいてフィルタ処理されます。QSECOFR レベルのユーザーを指定す

ると、システムのプロファイルがすべて表示されます。権限が少ないユーザーを使用すると、ユーザー プロファイルのセキュリティ設定に基づいて、表示されるプロファイルの数が少なくなります。

OpenLDAP

[OpenLDAP] 設定を構成するには、[OpenLDAP] チェック ボックスの右にある [設定の編集] をクリックします。現在の設定が表示されます。次の設定を変更できます。

- **ホスト URL** : LDAP サーバーへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレス (ldap:// など) です。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **ユーザー ベース識別名** : ユーザー検索用のベース識別名。
- **グループ ベース識別名** : グループ検索用のベース識別名。
- **検索ユーザー** : 検索を実行するためのユーザー ID。識別名の形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **検索ユーザー パスワード** : セキュリティのため、指定されたドメインユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (*) 形式で表示されます。

設定を変更したら、[設定] をクリックします。

SiteMinder

SiteMinder 設定を構成するには、[SiteMinder] チェック ボックスの右にある [設定の編集] をクリックします。現在の設定が表示されます。次の設定を変更できます。

- **ローカル コンピュータ**: IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のホスト アドレスまたはドメイン名。
- **SiteMinder IP**: SiteMinder ポリシーのサーバー アドレスまたはドメイン名。
- **エージェント シークレット**: エージェント spss-agent のエージェント シークレットで、SiteMinder ポリシー サーバー ログインに使用されます。
- **ディレクトリ ルート** : DC=domain name part 1, DC=domain name part 2 ... などの、ディレクトリ ルート ベース DN。
- **組織ルート** : OU=unit, DC=domain name part 1, DC=domain name part 2 ... などの、組織ルート。
- **ディレクトリ サーバー** : ディレクトリ サーバー アドレスまたはドメイン名。
- **ディレクトリ ユーザー名**: ディレクトリ ログインのユーザー名。

- **ディレクトリ ユーザー パスワード:** ディレクトリ ログインのパスワード。
- **ディレクトリ名:** LDAP ディレクトリ名。
- **ディレクトリ検索ユーザー クエリー:** ユーザーベース認証に関する LDAP クエリー。
- **ディレクトリ検索グループ クエリー:** グループベース認証に関する LDAP クエリー。

設定を変更したら、[設定] をクリックします。

シングル サインオン

シングル サインオン (SSO) は、アクセス コントロールの方法の 1 つで、ユーザーは 1 回ログインすると、再度ログインすることなく複数のソフトウェア システムのリソースにアクセスを取得することができます。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、**Kerberos** セキュリティ プロトコルに基づいて、外部ディレクトリ サービスを経由してユーザーの認証を最初に行い、その資格情報を IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal などすべての IBM SPSS Collaboration and Deployment Services アプリケーションまたはポータルサーバーに継続して使用することによって、シングル サインオンの機能を提供しています。追加の認証は必要ありません。

シングル サイン オン構成は、Deployment Manager の [サーバー管理] タブで実行されます。シングル サインオンを有効化するには、さまざまな前提条件を満たす必要があります。詳細は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールおよび構成マニュアルを参照してください。

シングル サインオンの設定

- ▶ [ツール] メニューから [サーバー管理] を選択して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーにログインし、[シングル サインオン] アイコンをダブルクリックします。シングル サインオン プロバイダ エディタが開きます。

図 7-1
 シングル サインオン プロバイダ エディタ
 シングル サイン オン プロバイダ構成

	<input type="checkbox"/> 有効
セキュリティプロバイダ	Active Directory ▼
KDC ホストアドレス	kdc.mycompany.com
Kerberos Realm	MYCOMPANY.COM
ホストアドレス	server.mycompany.com
Kerberos サービス プリンシパル	HTTP/server.mycompany.com@MYCOMPANY.COM
Kerberos サービス プリンシパル パスワード	*****

Kerberos キーテーブル URL	FILE:C:/keytab/krb5.keytab
JAAS 構成ファイル	#USE_SUPPLIED#

- **有効** : シングル サインオン プロバイダを使用するかどうかを指定します。
- **セキュリティプロバイダ**: Windows Active Directory など、構成された外部セキュリティプロバイダ。ローカルセキュリティプロバイダを選択することはできません。
- **Kerberos Key Distribution Center ホストアドレス** : Kerberos ドメインコントローラホストの完全修飾名。Windows Active Directory の場合、Microsoft Active Directory Services がインストールされているホストの名前になります。
- **Kerberos Realm**: Kerberos 方式。Active Directory の場合、ドメイン名となります。
- **ホスト** :IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository ホストの名前。たとえば、`repositoryhost.mycompany.com` となります。
- **Kerberos サービス プリンシパル名**: Kerberos サービス プリンシパルのユーザー名です。
- **Kerberos サービス プリンシパル パスワード**: ユーザーの Kerberos サービス プリンシパルのパスワード。
- **Kerberos キー テーブル URL**: Kerberos プリンシパル認証のためのキーテーブルファイルの URL。
- **JAAS 構成ファイル**:IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ホストファイルシステムの JAAS (Java 認証・承認サービス) 構成ファイルのパス。指定されている場合は、デフォルトの JAAS 構成を上書きします。アプリケーションサーバーに応じて、SSO に対応するように JRE を設定する必要があります。

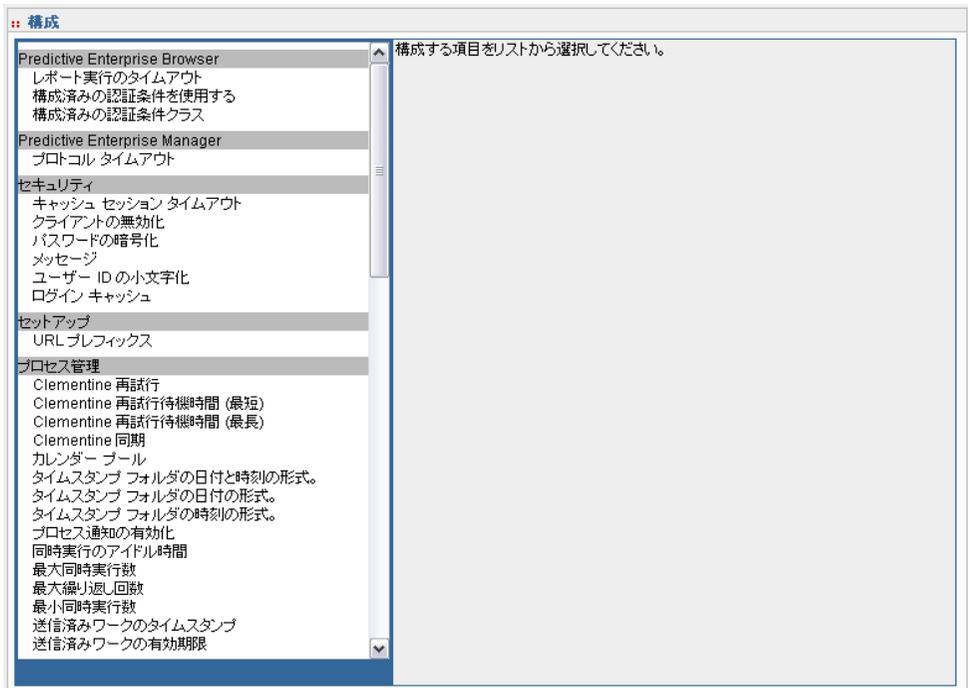
リポジトリ構成

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、ユーザー インターフェイスに使用されるテンプレートや、[ログイン] 画面に表示されるメッセージなど、コンポーネントを構成するためのさまざまなオプションを備えています。

これらのオプションにアクセスするには、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で次の手順を実行します。

- ▶ ナビゲーション リストで **[構成]** をクリックします。[構成] ページが表示されます。

図 8-1
[構成] ページ



- ▶ [構成] リストで、構成するプロパティに対応するリンクをクリックします。

プロパティの各構成画面には、[設定]と[デフォルトの使用]の2つのボタンがあります。構成が終了したら、[設定]ボタンをクリックして新しい設定内容を有効にします。値を元のシステム構成に戻すには、[デフォルトの使用]ボタンをクリックします。

注：下記に表示された特定の構成オプションは、オプションの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services コンポーネントまたは IBM® SPSS® Statistics、または IBM® ShowCase® など、その他の SPSS Inc. 製品向けのオプションです。コンポーネントがインストールされていない場合、オプションは無効です。

管理者

[構成] ページの [管理者] オプションでは、管理ユーザー インターフェイスの生成に使用するテンプレートの場所を指定できます。デフォルトでは、インストール プログラムによって設定されたパスが使用されます。

テンプレート ディレクトリを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [管理者] で [テンプレート] をクリックします。現在のテンプレート ディレクトリが [テンプレート] テキスト ボックスに表示されます。
- ▶ [テンプレート] テキスト ボックスに、使用するテンプレートが含まれているディレクトリの新しいパスを入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定したパスは、システムがテンプレートにアクセスするためのデフォルトのパスになります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトのディレクトリに戻ります。

BIRT Report Designer for IBM SPSS

BIRT Report Designer 構成オプションを使用して、レポートの処理および表示に影響を与える設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの BIRT Report Designer for IBM SPSS で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-1
BIRT Report Designer for IBM SPSS 構成オプション

名前	説明	設定
BIRT リンク リソースの場所	スタイルシートや画像のカスケードなど、レポートの外部リソースが保存されるサーバー ファイル システムのディレクトリ。	外部リソースを含むディレクトリの完全パス。システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトのディレクトリに戻ります。
SVG グラフを有効化	SVG グラフ出力を有効化するかどうかを指定します。SVG 出力が必要で、レポート出力を表示するブラウザが SVG 対応である場合にのみ、この設定を選択します。オフの場合、グラフを生成するレポートでは、SVG ではなく PNG 画像形式を使用します。	デフォルトはオフです。

キャッシュ プロバイダ

[キャッシュ プロバイダ] オプションでは、データ キャッシュ プロバイダ クラスを指定できます。デフォルトでは、Ehcache (com.spss.cache.service.ehcache.EhcacheProvider) が使用されます。クラスタ化された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services インストールでは、追加のオプションを使用して、マルチキャストグループを使用するクラスタのピアを自動検出する Ehcache を構成できます。

または、Oracle Coherence を IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository キャッシュとして使用できます。Oracle Coherence を有効化する手順は、次のとおりです。

- ▶ Oracle から Coherence コンポーネントを取得し、ライセンスを取得します。Coherence*.jar ファイルの場所は、<IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールの場所>/components/cache-provider です。
- ▶ IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストール ディスクの optional フォルダから coherence_cache_provider.package をインストールします。
- ▶ com.spss.cache.service.coherence.CoherenceCacheProvider を、構成設定のキャッシュ プロバイダとして指定します。

設定を変更するには、[構成] リストのキャッシュ プロバイダで対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

名前	説明	設定
キャッシュ プロバイダ クラス名	キャッシュ プロバイダ クラス名。	クラス名。
マルチキャスト グループ アドレス	Ehcache のマルチキャスト グループ アドレス。	有効なネットワークアドレス。
マルチキャスト グループ ポート	Ehcache の、マルチキャスト ハートビート トラフィックの専用ポート。	有効なポート番号。
デフォルト値の上書き	Ehcache でオプションが有効になっている場合、プロバイダはマルチキャスト グループ アドレス およびマルチキャスト グループ ポートの値を使用して、デフォルトを上書きします。	デフォルトはオフです。

カスタム ダイアログ

可能であれば、IBM® SPSS® Statistics カスタム ダイアログ構成オプションを使用すると、カスタム ダイアログを実行する設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [カスタム ダイアログ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-2
カスタム ダイアログ構成オプション

名前	説明	設定
有効なファイル サーバーの参照	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、指定されたファイル サーバーの SPSS Statistics データセットの参照が有効化されるかどうかを定義します。	有効にするには、オンにします。

名前	説明	設定
ファイル サーバーの場所	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、SPSS Statistics の参照に使用するファイル サーバー (リポジトリの外部) の場所。ファイル サーバーの参照が有効で、場所が指定されていない場合、指定された SPSS Statistics サーバーのファイル システムが使用されます。	値は、ディレクトリのネットワーク パスまたは絶対パスとなります。
ファイル サーバー名	SPSS Statistics データセットの参照に使用するファイル サーバーに関連する名前。	文字列値。値が指定されていない場合、「ファイル サーバー」という名前が使用されます。
リポジトリ参照の有効化	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、リポジトリの SPSS Statistics データセットの参照が有効化されるかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
SPSS Statistics サーバー	カスタム ダイアログ シンタックスの実行に使用する SPSS Statistics サーバーのリポジトリ名または URI。代わりに、サーバー クラスタの名前または URI を指定することができます。その場合、サーバーは可用性に基づいてクラスタから自動的に選択されます。サーバーが指定されない場合、検出された最初の有効なサーバー クラスタ定義の使用できるサーバーを使用して、デフォルトのサーバーを選択します。有効なクラスタがない場合、検出された最初の有効なサーバーを使用します。	サーバー オブジェクトのリポジトリ名または URI に対応する文字列値 (例: <code>spsscr:///id=0a30063bc975ede400</code>)。URI は、オブジェクト プロパティにあります。詳細は、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のマニュアルを参照してください。

名前	説明	設定
SPSS Statistics サーバー資格情報	カスタム ダイアログ シンタックスの実行時、SPSS Statistics サーバーへの接続に使用する資格情報。注：IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の使用に Active Directory が設定されている場合、資格情報は必要ありません。	資格情報オブジェクトのリポジトリ名または URI に対応する文字列値。
SPSS Statistics サーバーセッションタイムアウト	ユーザーのアクティビティがない SPSS Statistics サーバーへの接続を維持するタイムアウト値 (分) を定義します。	整数値。デフォルトは 20 分です。

Data Service

Data Service 構成オプションを使用して、Data Service 接続を最適化するためのパラメータを指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [データ サービス] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-3
Data Service の構成オプション

名前	説明	設定
アクティブ接続最大数	有効な接続の最大数。	整数値。デフォルトは 5 です。
アイドル コネクタの最大数	アイドル状態の接続の最大数。	整数値。デフォルトは 5 です。

Deployment Manager

[構成] ページの [Deployment Manager] オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager とリポジトリの間の通信のプロトコル タイムアウトを指定できます。Deployment Manager クライアントがリポジトリ サーバーを待機する秒数を指定します。サーバー トランザクションでタイムアウト エラーが発生した場合は、より大きな値を使用します。

プロトコル タイムアウトを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [Deployment Manager] で [プロトコル タイムアウト] をクリックします。現在の値が表示されます。

- ▶ [プロトコル タイムアウト] テキスト ボックスに、適切な秒数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

Deployment Portal

[構成] ページの [Deployment Portal] オプションでは、Web ベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal アプリケーションの認証設定やレポート タイムアウト制限を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの Deployment Portal で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-4

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal 構成オプション

名前	説明	設定
構成済みの認証条件クラス	Deployment Portal アプリケーションに認証情報を提供するために使用する Java クラス名。デフォルトでは <code>com.spss.er.internal.configuration.ConfiguredAuthenticationImpl</code> になります。これは、アプリケーション サーバーのクラスパスで設定されます。クラスは、Deployment Portal で提供される認証基準インターフェイス (<code>com.spss.er.internal.configuration.ConfiguredAuthenticationInterface.java</code>) に準拠する必要があります。	クラス名。
構成済みの認証条件を使用する	ユーザーが構成済み認証基準を使用して、[ログイン] 画面を省略して Deployment Portal に認証情報を渡すことができるようにします。	デフォルトはオフです。

Deployment Portal スコアリング

[バッチ スコアリングの行制限] 構成オプションを使用して、選択したデータセットからバッチ スコアリングできる最大行数を指定することができます。

行制限を変更するには、次の手順を行います。

- ▶ [構成] リストの [Deployment Portal スコアリング] で、[バッチ スコアリングの行制限] をクリックします。現在の値が表示されます。
- ▶ [バッチスコアリングの行制限] テキスト ボックスに、適切な分数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

Enterprise View

Enterprise View 構成オプションを使用して、IBM® SPSS® Statistics Data File Server を使用するための設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの Enterprise View で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-5
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View 構成オプション

名前	説明	設定
最大 CQL クエリー列	CQL (Common Query Language) クエリーが返す最大行数。	整数値。デフォルトは 2 です。
SPSS Statistics データファイルの追加サーバー	この設定は、SPSS Statistics データファイルからメタデータを取得するために使用できる追加の SPSS Statistics データファイルを指定します。	host:port 値のセミコロンの区切りリスト (例: server2:18886;server3:18886)

名前	説明	設定
SPSS Statistics データファイル負荷バランス	負荷バランシング設定は、SPSS Statistics データファイルからメタデータを取得する際、複数の SPSS Statistics データファイルサーバーがフェイルオーバーモードで使用されるか、または負荷バランシングモードで使用されるかを設定します。フェイルオーバーモードの場合、リストのサーバーが順番に使用されます。最初のサーバーが機能しない場合、2番目のサーバーが使用されます。負荷バランシングをオンにすると、使用できるサーバーのいずれかが無作為に選択されます。追加の SPSS Statistics データファイルサーバーが指定されない限り、この設定は無効です。	デフォルトはオンです。
SPSS Statistics Data File Server ホスト	SPSS Statistics データファイルにアクセスするために使用する SPSS Statistics Data File Server の名前。ホストが指定されていない場合、ローカルホストが使用されます。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SPSS Statistics Data File Server ポート	SPSS Statistics Data File Server のポート番号が指定されていない場合、ローカルホストが使用されます。	有効なポート番号。
SPSS Statistics Data File Server セキュア	SPSS Statistics Data File Server と通信する場合に SSL を使用するかどうかを示すインジケータ。デフォルト値 false は、セキュアソケットが使用されていないことを示します。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。

ヘルプ

[構成] ページの [ヘルプ] オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のヘルプ システムの場所を指定できます。デフォルトでは、インストール プログラムによって設定されたパスが使用されます。

ヘルプ ディレクトリを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [ヘルプ] で [ディレクトリ] をクリックします。現在のヘルプ ディレクトリが [ヘルプ] テキスト ボックスに表示されます。
- ▶ [ヘルプ] テキスト ボックスに、ヘルプ システムが含まれているディレクトリのパスを入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定したパスは、システムがオンライン ヘルプにアクセスするためのデフォルトのパスになります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトのディレクトリに戻ります。

通知

[構成] ページの [通知] オプションでは、SMTP メール設定を指定したり、通知サービスのパフォーマンス チューニングを有効にしたりできます。詳細は、11 章 p.116 [通知サービス パフォーマンスの最適化](#) を参照してください。RSS (Really Simple Syndication) などのフィードの共同設定に指定することもできます。

設定を変更するには、[構成] リストの [通知] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-6
通知構成オプション

名前	説明	設定
バイナリ コンテンツの有効化	通知メッセージで E メール添付などのバイナリ コンテンツを有効にします。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタのコア プール サイズ	アイドル状態でもイベント コレクタ プールに保持するスレッドの数。	整数値。デフォルトは 16 です。

名前	説明	設定
異なる受信者	このチェック ボックスをオンにすると、一意の受信者だけを対象に通知メッセージが生成されます。オフにすると、重複したアドレスは削除されず、受信者は指定した通知イベントに一致するすべての個別の登録と通知により生成されたメッセージを受け取ることとなります。このオプションは、デバッグを行う場合を除き変更しないでください。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタの有効化	通知イベントをサービスで処理するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタ プールのキープ アライブ時間	スレッド数がイベント コレクタ プールのスレッドのコア数より多い場合、超過したアイドル状態のスレッドが終了するまでに新しいイベントを待機する最大時間 (秒)。	整数値。デフォルトは 32 です。
イベント継承の有効化	派生した通知イベントをサービスで処理するかどうかを定義します。	デフォルトはオフです。
イベント ノイズ フィルタ	関連する通知プロバイダや登録者に一致した登録情報を持たない通知イベントを処理の早い段階で除外します。	true または false。デフォルトは true です。
イベント ノイズ フィルタ キャッシュ	イベント ノイズ フィルタ処理中に使用する LRU キャッシュの最大サイズを定義します。	整数値。デフォルトは 2048 です。
イベント ノイズ フィルタ 文字列キー	通知イベントの識別に、ハッシュ コードの代わりに文字列を使用します。	デフォルトはオフです。
イベント キュー記憶域のコミット バッチ サイズ	着信通知イベントの永続記憶域のコミット バッチ サイズを設定します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 32 です。
イベント コレクタの最大プール サイズ	イベント コレクタ プールに保持できるスレッドの最大数。	整数値。デフォルトは 32 です。

名前	説明	設定
メッセージバスの有効化	通知メッセージを JMS メッセージバスに送信するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
メッセージバスフィルタの有効化	関心のある通知のみを JMS メッセージバスに送信するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
通知監査の有効化	通知サービスが監査サービスと連携するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
通知キャッシュの配布	通知サービスが配布キャッシュを使用するかどうかを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	デフォルトはオフです。
通知キュー	バックグラウンドスレッドが処理できるようになるまで、着信通知イベントをキューに格納します。	true または false。デフォルトは true です。
永続イベントキューの有効化	消費されるメモリーを最小にするために着信通知イベントを一時的にディスク上の永続記憶域に保持するかどうかを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	デフォルトはオフです。
永続イベントキューサイズ	着信通知イベントの永続記憶域の最大サイズ (MB) を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 8 MB です。
永続イベントキューのタイプ	永続イベントキューのストレージタイプを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	DISK または JMS になります。デフォルトは DISK です。
永続 JMS 接続ファクトリ	受信通知イベントの継続に使用する JMS 接続ファクトリの JNDI 名を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
永続 JMS キュー	受信通知イベントの継続に使用する JMS キューの JNDI 名を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。

名前	説明	設定
個別登録を優先	このチェックボックスをオンにすると、登録において、ユーザーの個別の登録設定と管理者によって作成された通知設定が同一になっているものが優先的に処理されます。このチェックボックスをオフにすると、処理の順序が逆になります。	デフォルトはオンです。
SMTP 8 ビット MIME	true に設定したとき、サーバーが 8BITMIME エクステンションをサポートしている場合は、"quoted-printable" または "base64" エンコーディングが使用されたメッセージのテキスト部分は、(8 ビットテキストの RFC2045 ルールに従っている場合) "8 ビット" エンコーディングに変換されます。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。
SMTP 認証	true の場合、 AUTH コマンドを使ったユーザー認証が試行されます。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。
SMTP 接続タイムアウト	ソケット接続のタイムアウト値 (ミリ秒)。	整数値。デフォルトではタイムアウトはありません (無制限)。
SMTP 配布の有効化	チェックボックスがオンの場合、SMTP を介して通知メッセージを配布できます。リポジトリ管理者は、サーバーで生成されるすべての電子メールが送信されないよう、SMTP 配布を無効にできます。生成された E メールメッセージがリポジトリに保持されないため、SMTP 配布が無効になっていると、すべてのメッセージが失われることに注意してください。	デフォルトはオンです。
SMTP DSN 通知	DSN の RCPT コマンドに対する NOTIFY オプションです (RFC3461 の「Delivery Status Notifications」)。	NEVER にするか、 SUCCESS 、 FAILURE 、 DELAY の組み合わせを使用します (カンマ区切り)。
SMTP DSN RET	DSN の MAIL コマンドに対する RET オプションです (RFC3461 の「Delivery Status Notifications」)。	FULL または HDRS になります。

名前	説明	設定
SMTP EHLO	false の場合は、EHLO コマンドでのサインオンは試行されません。	true または false。デフォルトは true です。
送信元 SMTP E メール アドレス	通知の E メールに使用する送信者または返信先のアドレス。	既存の SMTP の E メールアドレス。
SMTP ホスト	Eメールの送信に使用される SMTP サーバーの IP アドレスまたはホスト名。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SMTP ローカル ホスト	SMTP HELO または EHLO コマンドで使用するローカルホスト名。デフォルトでは <code>InetAddress.getLocalHost().getHostName()</code> になります。通常、JDK とネーミングサービスが適切に構成されていれば、設定の必要はありません。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SMTP パスワード	SMTP 認証のパスワード。	マスクされたパスワード。
SMTP ポート	送信メールに使用されるポート。	有効なポート番号。デフォルトは 25 です。
SMTP QUIT	true に設定した場合、QUIT コマンドの応答が待機されます。false に設定した場合、QUIT コマンドが送信されると、接続が直ちにクローズされます。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。
SMTP SASL 方式	DIGEST-MD5 認証に、SASL (Simple Authentication and Security Layer) 方式が使用されます。	展開またはサーバー、あるいはその両方に固有の、大文字と小文字が区別される文字列。プリンシパル名を選択する方式またはドメインを識別します。
SMTP 部分送信	true に設定した場合、メッセージに指定された複数のアドレスのうち一部のアドレスが無効でも、メッセージが送信されます。一部のアドレスで発生したエラーは、 <code>SendFailedException</code> で報告されます。false に設定した場合、無効な受信者アドレスが 1 つでも含まれていると、メッセージはいずれのアドレスにも送信されません。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。

名前	説明	設定
SMTP タイムアウト	ソケット入出力のタイムアウト値 (ミリ秒)。	整数値。デフォルトではタイムアウトはありません (無制限)。
SMTP 転送プロトコル	メッセージ転送プロトコル。	smtp または smtps になります。デフォルトは smtp で、SSL/TLS を使用して該当するサービスに接続するには smtps を使用します。
SMTP デバッグ モードの有効化	デバッグ モードのオンとオフを切り替えます。	true または false。デフォルトは偽 (false) です。
SMTP ユーザー	SMTP のデフォルト ユーザー名。	ユーザー名。
登録識別キャッシュ	登録識別に使用する LRU キャッシュの最大サイズを定義します。	整数値。デフォルトは 2048 です。
共同エントリ キャッシュ TTL	共同フィード エントリがキャッシュに保存される期間 (分) を定義します。RSS などのフィードです。	整数値。デフォルトは 15 分です。
共同エントリ最大値	RSS など、共同フィードのエントリの最大数を定義します。	整数値。デフォルトは 256 です。
共同エントリ永続 TTL	共同エントリが永続ストレージに保存される期間 (日数) を定義します。RSS などのフィードです。	整数値。デフォルトは 7 日間です。
共同フィード タイプ	共同フィードの形式を定義します。	RSS_2_0 または ATOM_1_0 です。デフォルトは RSS_2_0 です。
共同配布の有効化	XML フィードの共同配布を有効にします。	デフォルトはオンです。
共同 Vacuumer の有効化	共同 Vacuumer を有効にします。共同 Vacuumer はシステム化が期限の切れた共同エントリを削除します。[共同 Vacuumer の頻度] オプションで指定した間隔に基づいて自動的に操作し、[共同エントリ永続 TTL] の値を使用して、期限の切れたデータおよび削除できるデータを指定します。Vacuumer を指定しない場合、アプリケーションのパフォーマンスが低下します。このオプションを無効にすることはお勧めしません。	デフォルトはオンです。

名前	説明	設定
共同 Vacuumer の頻度	共同 Vacuumer が実行する頻度 (分) を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 60 分です。
共同 Vacuumer マスタ	共同 Vacuumer がサーバークラスターのマスタ ノードにのみ実行されるかどうかを定義します。	デフォルトはオフです。
共同 Vacuumer クォータ	共同 Vacuumer の 1 回の実行中に削除する共同エントリの数を制限します。	整数値。デフォルトは 4096 です。
URL データ ソースのディスク キャッシュ サイズ	通知イベントの一部として送信されるバイナリ コンテンツ (添付) の最大ディスク キャッシュ サイズ。	整数値。デフォルトは 64 です。

ページャー

[ページャー タイムアウト] 構成オプションを使用して、ページ化されたデータを使用できるの時間 (分) を指定します。この値を変更すると、ページング システムのパフォーマンスに影響を与えます。新しいオプションの値を有効にするには、リポジトリを再起動する必要があります。

ページャー タイムアウトを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [ページャー] で [ページャー タイムアウト] をクリックします。現在の値が表示されます。
- ▶ [ページャー タイムアウト] テキスト ボックスに、適切な分数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

プロセス管理

[構成] ページの [プロセス管理] オプションでは、ジョブ実行設定を指定するだけでなく、Web サービス エンドポイントも定義できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [プロセス管理] の下にある対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-7
プロセス管理構成オプション

名前	説明	設定
カレンダー プール	カレンダー スケジュールに従ったリポジトリのスキャンを繰り返す場合に、プロセス管理サーバーが待機する期間。カレンダー スケジュールは、スケジュールの時刻/日付に基づいて実行されます。	秒単位の期間を示す整数値。デフォルトは 60 です。
同時実行のアイドル時間	スレッドがプールから削除されるまでにアイドル状態である秒数。プールサイズが最小同時実行数を下回る場合、スレッドはプールから削除されません。	秒単位の期間を示す整数値。デフォルトは 600 です。
最大同時実行数	一度にアクティブにできるスレッドの最大数。実行中のアクティブな作業 (DBQ など) ごとに 1 つのスレッドが使用されます。	整数値。デフォルトは 25 です。
最小同時実行数	スレッド プールで作成するスレッドの最小数。	整数値。デフォルトは 5 です。
JMS 接続ファクトリ名	JNDI サービスに登録された JMS 接続ファクトリ の名前。適切な値については、アプリケーションサーバーのドキュメンテーションまたは JMS サーバーのドキュメンテーションを参照してください。	デフォルトは ConnectionFactory です。名前は、関連付けられたメッセージング プロバイダ内で一意であることが必要です。
JMS ネーミング ファクトリ	JMS Java クラス。たとえば、JBoss アプリケーションサーバーのネーミング ファクトリは <code>org.jnp.interfaces.NamingContextFactory</code> です。このオプションは、すべてのメッセージベース ジョブのすべてのメッセージが 1 つのリモートサーバーから送信される場合に設定できます。	デフォルト値は、ローカルアプリケーションサーバーの JMS ネーミングファクトリのクラス名です。

名前	説明	設定
JMS ネーミング サービス	ネーミング サービスの場所 (URI)。たとえば、JBoss アプリケーション サーバーのネーミング ファクトリは <code>java:comp/env/jms/localhost:1099</code> です。このオプションは、すべてのメッセージ ベース ジョブのすべてのメッセージが 1 つのリモートサーバーから送信される場合に設定できます。	デフォルト値は、ローカルアプリケーションサーバーの JMS ネーミング サービスの URI です。
JMS プロセス イベント 接続ファクトリ	プロセス イベント キューに使用する JMS ファクトリのクラス名。	デフォルト値は、ローカルアプリケーションサーバーの JMS ネーミング ファクトリのクラス名です。
JMS プロセス イベント キュー	JMS プロセス イベント キューの JNDI 名。	デフォルト値は、ローカルアプリケーションサーバーの JMS プロセス イベント キューです。
最大繰り返し回数	繰り返しジョブ ステップの繰り返しの最大回数。	整数値。デフォルトは 250 です。
ポーリング メッセージ	リポジトリのスキャンを繰り返すときに、プロセス管理サーバーが待機する時間 (秒)。スキャンにより、アクティブ化するメッセージ ベースのスケジュールが取得されます。	整数値。デフォルトは 120 です。
プロセス通知の有効化	プロセス管理サーバーが通知サーバーと連動する必要があるかどうかを指定します。	true または false。デフォルトは true です。
送信済みワークの有効期限	送信済みジョブの有効期間 (日単位)。	整数値。デフォルトは 5 です。
送信済みワークのタイムスタンプ	送信済みワーク フォルダに使用されるタイムスタンプの形式。	年、月、日、時、分、秒の形式は、 <code>yyyy.MM.dd.hh.mm.ss.SSS</code> です。
タイムスタンプ フォルダの日付と時刻の形式。	タイムスタンプ フォルダの日付と時刻の形式。	年、月、日、時、分、秒の形式は、 <code>yyyy.MM.dd.hh.mm.ss.SSS</code> です。
タイムスタンプ フォルダの日付の形式。	タイムスタンプ フォルダの日付の形式。	月、日、年の形式は <code>MM-dd-yyyy</code> です。
タイムスタンプ フォルダの時刻の形式。	タイムスタンプ フォルダの時刻の形式。	時、分、秒の形式は、 <code>HH.mm.ss</code> です。

報告

レポート作成の設定オプションでは、ビジュアライゼーション処理用にデバッグ情報を XML 出力として書き出すためのパスを指定できます。

重要: このオプションの値が指定されていない場合は、ビジュアライゼーション処理のデバッグ情報は生成されません。

ディレクトリパスを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [レポート作成] の下の [ビジュアライゼーション ディレクトリの指定] をクリックします。現在のディレクトリが [ビジュアライゼーション ディレクトリの指定] テキストボックスに表示されます。
- ▶ ディレクトリの絶対パスの値を新たに入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定したパスが、ビジュアライゼーション処理の情報を書き出すためのデフォルトディレクトリになります。

リポジトリ

[構成] ページの [リポジトリ] オプションでは、Web サービス エンドポイントを定義して、接続の有効性を切り替えることができます。設定を変更するには、[構成] リストの [リポジトリ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-8
リポジトリ構成オプション

名前	説明	設定
カテゴリ値の制限	IBM® SPSS® Modeler ストリーム メタデータとして保存されるカテゴリ変数値の数を制限します。保存された値は、検索実行時に評価されるコンテンツに含まれます。リポジトリにストリームを保存し、検索を実行するのに必要な時間を削減するために必要です。	整数値。-1 の値は制限なしを示します。すべてのカテゴリ値はメタデータとして保存されます。値の保存を無効にするには、0 を入力します。保存される値を制限するには、1 以上を入力します。
コンテンツ リポジトリ エンドポイント	リポジトリの Web サービス エンドポイントアドレスを定義します。	URL:

名前	説明	設定
資格情報パスワードは暗号化する必要があります	資格情報パスワードは暗号化する必要があります。false の場合、パスワードを暗号化されていないテキストで渡すことができます。 注：SSL がすでに有効化され、非 SSL 展開でのみ使用して資格情報パスワードを暗号化する必要がある IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の展開の場合、このオプションは無効となります。	デフォルトはオフです。
デフォルトの文字セット	サーバーのファイル システムとの間でダウンロード/アップロードされたコンテンツに使用されるデフォルトの文字、または Web ブラウザでリポジトリファイルを表示するときに使用されるデフォルトの文字を定義します。この値は、プレーン テキスト ファイルなどのコンテンツに文字セットを明示的に割り当てていない場合にのみ使用されます。	文字セットを指定する値 (UTF-8、ASCII など)。
パフォーマンス データをログに記録	true の場合、パフォーマンス データはログに記録されます。	デフォルトはオフです。
メッセージ バス通知の有効化	リポジトリ サーバーがメッセージ バスと連携するかどうかを指定します。	デフォルトはオンです。
Modeler パラメータ パスワード インジケータ	この文字列が含まれている SPSS Modeler のストリーム パラメータは、ストリームの実行をスケジュールするとき、UI に格納してマスクする場合に暗号化されます。	マスクされたパスワード。
インデックス再作成のキュー サイズ	リポジトリのインデックス再作成に使用するキューのサイズを定義します。インデックス再作成スレッドプール サイズ構成オプションで定義された値より大きな値である必要があります。	整数値。デフォルトは 15 です。

名前	説明	設定
インデックス再作成スレッドプールサイズ	リポジトリのインデックス再作成に使用するスレッド数を定義します。	整数値。デフォルトは 5 です。
リポジトリ メンテナンスの有効化	リポジトリ メンテナンスサービスを有効または無効にします。	true または false。デフォルトは True です。
リポジトリ メンテナンスの頻度	リポジトリ メンテナンスサービスの頻度 (分) を定義します。変更を有効にするには、リポジトリサービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 60 分です。
リポジトリ メンテナンスマスタ	リポジトリ メンテナンスサービスがサーバークラスターのマスタ ノードにのみ実行されるかどうかを定義します。	true または false。デフォルトは False です。
リポジトリ メンテナンスクォータ	メンテナンスの間隔の時間 (分) を定義し、システム リソースおよびアプリケーション処理時間を浪費せずにメンテナンス サービスを機能させることができます。負の値は、制限なしを示します。	整数値。デフォルトは 10 分です。
リポジトリ メンテナンス開始日	リポジトリ メンテナンス サービスを開始する日時を定義します。無効な日付または現在の日付より前の日付が無視され、サービスをすぐに開始することはできません。指定した開始時刻を過ぎている場合、サービスは次の日のその時刻に開始します。	日付および時刻の形式は、[YYYY-MM-DD] HH:MM:SS です。
リポジトリ メンテナンス開始 (最大)	メンテナンス サービスを開始する最大遅延時間を定義します。	整数値。デフォルトは 30 分です。
リポジトリ メンテナンス開始 (最小)	メンテナンス サービスを開始する最小遅延時間を定義します。	整数値。デフォルトは 5 分です。
リポジトリ 通知の有効化	リポジトリ サーバーが通知サーバーと連動する必要があるかどうかを指定します。	デフォルトはオフです。

名前	説明	設定
リソース ロック	リソース ロックを有効にします。リソース ロックにより、複数のユーザーが同時にリソースを変更するのを防止します。リソース ロックが有効になっていると、ロックされているリソースは他のユーザーには読み取り専用に見えます。	デフォルトはオンです。
リソース転送ルックアップ テーブル	リソースの転送中に ID をルックアップするためのマッピングを実装する方法です。	DISK または MEMORY。
リソース転送のページ結果のキャッシュ サイズ	リソース転送中のページ結果保存用のキャッシュ サイズ。リソース転送時にユーザーが個別に競合の解決を実行した場合、ユーザー インターフェイスに一度に表示できる数よりも多くの競合が表示されることがあります。結果のキャッシュのサイズによって、1つのセッションに対してキャッシュするページ数が決まります。ユーザーが個別の競合の解決を頻繁に利用する場合、キャッシュのサイズを増やすとパフォーマンスが向上することがありますが、キャッシュのサイズが増加するとメモリー消費量が増加します。	整数値。デフォルトは 5 です。
ストリーム プロパティの更新	使用できる場合、ファイルがリポジトリに公開される場合、ストリーム プロパティが更新されるかどうかを指定します。このオプションを無効にするとパフォーマンスが向上するため、無効にすることをお勧めします。	デフォルトはオンです。
サーバー実行ファイルの検証	サーバーの実行ファイルをリポジトリに保存する際に検証するかどうかを指定します。	デフォルトはオンです。

Scoring Service

[スコアリング サービス] オプションでは、スコアリングの設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの [スコアリング サービス] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-9
Scoring Service 構成オプション

名前	説明	設定
監査タイマーの時間	監査更新の間のミリ秒数。	整数値。デフォルトは 3600000 です。
デフォルトのログ記録先。	デフォルトのログ記録先。	スコアリングのログ記録用に JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
メトリック タイマーの時間	メトリック更新の間のミリ秒数。	整数値。デフォルトは 5000 です。
ホスト名の解決	スコアリング サービスがホスト名を解決する必要があるかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
ワーカー プール最大サイズ	最大ワーカー プール サイズ。	整数値。デフォルトは 100 です。

検索

[構成] ページの [検索] オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の検索結果のページごとに表示するヒット件数や結果セットのサイズを指定したり、監査ビューで検索のログを記録するかどうかを指定したりできます。設定を変更するには、[構成] リストの [検索] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-10
検索構成オプション

名前	説明	設定
検索の監査	監査ビューで各検索のログを記録します。詳細は、13 章 p.128 リポトリの監査 を参照してください。このオプションを有効にすると、検索の処理速度が低下する場合があります。	デフォルトはオフです。

名前	説明	設定
デフォルト ページ サイズ	1 ページあたりに表示する検索結果の件数。	整数値。デフォルトは 25 です。
最大行数	検索結果セットの最大行数。結果の数を無制限にする場合は -1 に設定します。それ以外の場合は、正の整数値を指定します (メモリー不足やクライアントのタイムアウトを回避するために、返される結果セットのサイズを制限します)。	整数値。デフォルトは -1 です。

セキュリティ

[構成] ページの [セキュリティ] オプションでは、リポジトリのアクセスに関する設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [セキュリティ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-11
セキュリティ構成オプション

名前	説明	設定
ログイン キャッシュ	Web サービスの応答速度を高めるために、ログインが保存されます。有効にした場合、ユーザー、グループ、またはロールの変更が反映されるまでに 30 分以上かかります。サーバーの再起動が必要となります。	デフォルトはオンです。
キャッシュ セッション タイムアウト	アイドル (休止) 状態のユーザーのセキュリティセッションが削除されるまでの時間 (分)。	整数値。デフォルトは 30 です。
キャッシュされるログイン再検証の間隔	キャッシュされるログインを再検証する間隔 (分)。設定を有効にするには、サーバーを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 5 です。

名前	説明	設定
クライアントの無効化	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のクライアント アプリケーション (IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal など) のログインを無効にします。	デフォルトはオフです。
パスワードの暗号化	Web サービスでの暗号化されたパスワードの使用を必須にします。Web サービスはパスワードを要求するときに暗号化キーを送信します。サーバーは提示された公開キーを使用してパスワードを暗号化します。[パスワードの暗号化] をオンにした場合、Web サービスは暗号化キーを提示してパスワードを要求することはできません。この設定は、ユーザー設定、コンテンツ リポジトリの資格情報、および同様のサービスに影響を与えます。	デフォルトはオンです。
ユーザー ID の小文字化	ユーザーの内部識別子を小文字にします。この設定は、リモートユーザーのディレクトリでユーザー ID の大文字と小文字が区別される場合にだけオフにする必要があります。	デフォルトはオンです。
メッセージ	ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のようこそ画面に表示されるメッセージ。	メッセージ テキスト。HTML タグを使用して書式を適用できます。
プリンシパルの正規化	ユーザーが作成またはインポートされて場合に正規化された文字の形式でユーザー名がデータベース内に保存されるように指定します (Unicode 技術基準での定義は正規化形式 C となります)。	デフォルトはオフです。

セットアップ

[セットアップ] 構成オプションでは、リポジトリの参照に使用する URL プレフィックス、JMS キュー設定および JMS メッセージバス設定など、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のその他の設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [セットアップ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-12
セキュリティ構成オプション

名前	説明	設定
ログ JMS 接続ファクトリ	ログ JMS 接続 ファクトリの JNDI 名。	ログ JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
ログ JMS キュー	ログ JMS キューの JNDI 名。	ログ JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
メッセージバス JMS 接続ファクトリ	メッセージバス JMS 接続ファクトリの JNDI 名。	メッセージバス JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。

名前	説明	設定
メッセージバス JMS トピック	メッセージバス JMS トピックの JNDI 名。	メッセージバス JMS トピックを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列（大文字小文字を区別）。
URL プレフィックス	プレフィックスは、DNS（または WINS）で解決可能なものにする必要があります。SSL を使用している場合、プレフィックスは http ではなく https で始まる必要があります。さらに、http の標準ポートである 80 または https の標準ポートである 443 をサーバーが使用している場合は、ポートを省略できます。プレフィックスに加えた変更を有効にするには、サーバーを再起動する必要があります。	URL:

IBM ShowCase

IBM® ShowCase® 構成オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager での IBM® ShowCase® Warehouse Builder ジョブ ステップの作成に使用される接続設定を指定できます。IBM ShowCase Warehouse Builder は、IBM ShowCase 製品セットとともにインストールされます。

設定を変更するには、[構成] リストの IBM ShowCase で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 8-13
IBM ShowCase 構成オプション

名前	説明	設定
IBM ShowCase Warehouse Builder Database	IBM ShowCase Warehouse Builder の設定および定義情報のデータベースまたはライブラリの名前。	有効なデータベース名またはライブラリ名。
IBM ShowCase Warehouse Builder のホスト名	IBM ShowCase Warehouse Builder で使用される IBM i サーバーの IP アドレスまたはホスト名。	有効な IP アドレスまたはホスト名。

名前	説明	設定
IBM ShowCase Warehouse Builder のユーザー名	上記のデータベースまたはライブラリに接続するためのユーザー名。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーが Windows にインストールされている場合にのみ適用可能です。	ユーザー名。
IBM ShowCase Warehouse Builder のユーザー パスワード	上記のデータベースまたはライブラリに接続するためのパスワード。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーが Windows にインストールされている場合にのみ適用可能です。	マスクされたパスワード。

CMOR

CMOR 設定オプションでは、[UDF 文字制限] 設定があり、データベースのユーザー定義関数にわたることができる最大文字数を指定できます。デフォルト値はほとんどのシステムに対して十分な値であるため、変更の必要はほとんどありません。その結果、標準構成インターフェイスに CMOR オプションは表示されず、文字数制限を増やす必要がある場合にのみ使用できます。たとえば、バージョンラベルに使用される文字数が指定された上限を超えている場合、スコアリング構成のデータプロバイダを選択している場合に使用できるデータプロバイダ定義 - リアルタイムリストを取得できず、サーバーログに切り詰めエラーが含まれます。ラベル数を少なくすることが泣きない場合、UDF 文字数制限を大きくする必要があります。上限値を変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [設定] ページで、設定リスト上部の [設定] リンクをクリックして、表示されていない設定を表示します。
- ▶ CMOR のリストの [UDF 文字制限] をクリックします。文字数制限の値が表示されます。
- ▶ 必要に応じて値を変更します。
- ▶ [設定] をクリックして新しい値を設定します。
- ▶ リポジトリ サーバーをログオフして再起動します。

SQL Server、DB2、DB2 on IBM i など一部のデータベースの場合、新しい値をするために関数を自動的に更新することはできません。こうした場合、

サーバーをシャットダウンする前に関数を手動で更新する必要がありますが、再起動する前は次の手順を実行します。

- ▶ 設定値を変更した後、サーバーを停止します。
- ▶ サーバーが停止したら、データベースの既存の管理ツールを使用して、2つの関数 `spsscmor_fn_gl2` および `spsscmor_fn_gl3` を変更します。現在の文字数の上限値（始めは 4000）を [UDF 文字制限] 設定で指定された上限値に置き換えます。
- ▶ 値を更新した後、サーバーを再起動します。

次の表は、文字数の上限を 4000 から 6000 に増やした場合、各データベースの指定の置換を示します。

テーブル 8-14
文字数上限増加の例

データベース	以前の指定	新しい指定
SQL Server	<code>@validLabels nvarchar(4000)</code>	<code>@validLabels nvarchar(6000)</code>
DB2	<code>valid_labels varchar(4000)</code>	<code>valid_labels varchar(6000)</code>
DB2 on IBM i	<code>valid_labels VAR- GRAPHIC(4000)</code>	<code>valid_labels VARGRAPHIC(6000)</code>

MIME タイプ

多目的インターネットメール拡張子 (Multipurpose Internet Mail Extensions: **MIME**) は、さまざまな種類の情報を識別するための基準です。MIME は E メール の拡張子 から始まっていますが、HTTP によって使用され、サーバーが配信するコンテンツを定義します。

ファイルに対する要求に応答する場合、サーバーはヘッダー情報をファイルに接続します。この情報には、ファイルに含まれるメディアタイプを示す MIME タイプが含まれています。サーバーは、MIME タイプを定義するファイルの拡張子を使用します。ファイルを受信するクライアントは MIME タイプを使用して、ファイルを処理する最善の方法を決定します。

サーバーは、ファイル拡張子と MIME タイプとの関連性を制御します。これらのマッピングを構成するには、ナビゲーションリストの **[MIME タイプ]** をクリックして、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の **[MIME タイプとファイルタイプのアイコン]** ページを使用します。

図 9-1
[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページ

>MIME タイプとファイル タイプ アイコン

:: MIME タイプとファイル タイプ アイコンの管理

設定を編集する MIME タイプの名前をクリックしてください。

新しい MIME タイプの追加

名前	MIME タイプ	拡張子	小さいアイコン	削除
Archive HTML	application/vnd.spss-htmlic	htmlic		×
Enterprise View	application/vnd.spss-enterprise-view			×
JavaScript	text/javascript	js		×
JDBC データソース	application/vnd.spss-jdbc-connection			×
Joint Photographic Experts Group (JPEG) 画像	image/jpeg	jpe jpeg jpg		×
MIME HTML ファイル	multipart/related	mht mhtml		×
Modeler Server 定義	application/vnd.spss-clementine-serverdef	clmsvr		×
Modeler ストリーム	application/vnd.spss-clementine-stream	str		×
Modeler 出力	application/vnd.spss-clementine-output	cou		×
Modeler 展開パッケージ	application/vnd.spss-pa-cdp	cdp		×
ODBC データソース	application/vnd.spss-odbc-connection			×
PASWBIRT テンプレート	application/vnd.birt-rpttemplate	rpttemplate		×
PASWBIRT ライブラリ	application/vnd.birt-rptlibrary	rptlibrary		×
PASWBIRT レポート	application/vnd.birt-rptdesign	rptdesign		×
PASWBIRT レポート文書	application/vnd.birt-rptdocument	rptdocument		×
Portable Network Graphics (PNG) 画像	image/png	png		×
PostScript	application/postscript	ps		×
SAS サーバー定義	application/vnd.spss-sas-serverdef	sassvr		×
SAS ファイル	application/x-sas	sas		×

[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、次のタスクを実行できます。

- サーバーにマッピングする MIME タイプを追加する。
- ファイルに対する画像の割り当てなど、既存の MIME タイプの設定を編集する。
- サーバーからマッピングする MIME タイプを削除する。

注：デフォルトでは、多くの共通アイコンが IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal に表示されません。外部のファイルタイプ (application/msword など) の場合、管理者は MIME タイプにアイコンを割り当てることができます。詳細は、p. 100 [マッピングする MIME タイプを追加する](#) を参照してください。

マッピングする MIME タイプを追加する

MIME タイプは、タイプとサブタイプの 2 つの部分で構成され、スラッシュで区切られています。タイプでは、一般的なメディアタイプをアプリケーション、オーディオ、画像、メッセージ、モデル、複数パーツ、テキスト、またはビデオに指定します。一方サブタイプでは、メディアの形式を識別し、それはメディアタイプによって異なります。たとえば、text/html は、HTML 形式のテキストに対応しています。

サブタイプには、特定の製品の MIME タイプを識別する接頭辞が含まれます。たとえば、商業製品に関連するサブタイプには、application/vnd.ms-access など、ベンダーのサブタイプを示す接頭辞 vnd. が含まれます。それに対し、非商業製品のサブタイプには、個人的サブタイプを示す接頭辞 prs. が含まれます。

MIME タイプは、Internet Assigned Numbers Authority (IANA) で登録する必要があります。登録されていないタイプには、今後登録されると考えられるタイプとの競合を回避するため、サブタイプに x- の接頭辞を使用して application/x-vnd.spss-clementine-stream とする必要があります。登録されている MIME タイプの詳細は、IANA (<http://www.iana.org/assignments/media-types/>) にお問い合わせください。

マッピングする新しい MIME タイプを追加するには

- ▶ [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、[新しい MIME タイプを追加] をクリックします。[MIME タイプとファイル タイプのアイコンの追加] ページが表示されます。

図 9-2
MIME タイプの作成

- ▶ MIME タイプの名前を入力します。名前では、タイプ自体より解釈が容易なタイプの識別子を使用します。たとえば、名前 カスタム ダイアログ パッケージ はタイプ application/x-vnd.spss-statistics-spd より解釈が容易です。
- ▶ 追加する MIME タイプを入力します。
- ▶ ファイル拡張子を入力して、MIME タイプと関連付けます。複数の拡張子を指定する場合、エントリ間にスペースを使用します。
- ▶ アイコンを MIME タイプに割り当てます。この画像のサイズは 16 x 16 ピクセルで、形式は .gif ファイルである必要があります。画像は通常、コンテ

ンツ リストで使用されます。[参照] をクリックしてファイルに移動します。アイコンの割り当てが必要でない場合は、[いいえ] を選択します。

- ▶ [保存] をクリックすると MIME タイプを追加し、[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページに戻ります。または[キャンセル] をクリックすると MIME タイプがサーバーに保存されずに戻ります。

マッピングする MIME タイプを編集する

既存の MIME タイプを編集するには

- ▶ [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、編集する MIME タイプの名前をクリックします。MIME タイプの [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] のページが表示されます。

図 9-3
MIME タイプの編集

> MIME タイプとファイル タイプ アイコン

:: MIME タイプとファイル タイプ アイコンの編集

名前: Archive HTML

MIME タイプ: application/vnd.spss-htmlc

拡張子: htmlc
複数の拡張子を入力する場合は、スペースで区切って入力してください。

小さいアイコン: いいえ 参照...

保存 キャンセル

- ▶ 必要に応じて設定を変更します。新しいファイルを選択または [いいえ] を選択する場合にのみ、アイコンが変更されます。アイコンを削除するには、[いいえ] を選択します。
- ▶ [保存] をクリックすると MIME タイプの新しい設定を追加して [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページに戻ります。または[キャンセル] をクリックすると新しい MIME タイプがサーバーに保存されずに戻ります。

MIME タイプのマッピングの削除

既存の MIME タイプを削除するには

- ▶ [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、削除する MIME タイプの [削除] アイコンをクリックします。

MIME タイプのテーブルが更新され、削除された MIME タイプを除いて表示されます。

リポジトリのインデックス再作成

インデックス作成は、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository の検索を最適化するために使用します。デフォルトでは、リポジトリがアップグレードされると、古いインデックスがクリアされて再構築されます。リポジトリは、の起動時のジョブ出力など、処理結果のインデックス再作成が強制的に行われるように構成することもできます。詳細は、8 章 p. 85 [プロセス管理](#) を参照してください。リポジトリの検索は、起動時にインデックス再作成が実行されている間、自動的に無効となります。

インデックス再作成は、権限を持つユーザーが必要に応じてブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で実行することもできます。詳細は、5 章 p. 47 [Actions](#) を参照してください。

注：インデックス再作成は、リソースを消費し、時間のかかるプロセスであるため、新しいデータがリポジトリに大量にインポートされる場合など、絶対に必要な場合にのみ実行するようにしてください。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services でユーザーによる操作が行われていない場合にのみインデックス再作成を実行することを強くお勧めします。インデックス再作成を実行する時点で、すべてのユーザーがログアウトすることが不可能である場合、リポジトリの検索を無効にする必要がありますが、システムの使用中にはインデックスをクリアしないでください。

リポジトリのインデックス再作成を実行するには、次の手順を実行します。

1. ブラウザベースの Deployment Manager で、ナビゲーション リストの [リポジトリ インデックス] をクリックします。[コンテンツ リポジトリ インデックス作成] ページが表示されます。

図 10-1
コンテンツ リポジトリ インデックス作成

>コンテンツ リポジトリ

:: インデックス作成

コンテンツリポジトリ全体のインデックス再作成を開始するには、[インデックス作成開始]をクリックします。インデックス作成はコストが高く時間のかかるプロセスなので、絶対に必要な場合にのみ実行してください。インデックス作成の実行中は、検索サービスが矛盾した結果を返す可能性があります。

インデックス作成の実行中はクライアントを無効にする:

インデックス再作成の前にインデックス全体をクリア:

2. 次のいずれかを実行します。
 - リポジトリにログインしているユーザーがない場合、[インデックス再作成の前にインデックス全体をクリア]を選択する。
 - リポジトリにユーザーがログイン中である場合、[インデックス作成中はクライアントを無効にする]を選択する。
3. [インデックス作成開始]をクリックします。インデックスの再構築中には、[コンテンツ リポジトリ インデックス作成のステータス] ページに、処理されたオブジェクトの統計が表示されます。

図 10-2
コンテンツ リポジトリ インデックス作成のステータス

>コンテンツ リポジトリ

:: インデックス作成ステータス

ステータス:	完了
検索の無効化:	いいえ
インデックスのクリア:	はい
エラー数:	0
最新のエラー:	
開始時刻:	1 17 2008 11:08:54 午前
終了時刻:	1 17 2008 11:08:54 午前
経過時間:	00:00:00 (hh:mm:ss)
インデックス付きフォルダ:	2
インデックス付きピック:	1
インデックス付きファイル:	12
速度:	∞ オブジェクト/秒

通知

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、**通知と登録**というメカニズムを備えており、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository オブジェクトの変更やジョブの処理結果を随時ユーザーに通知できます。通知と登録は、ともに対応するイベントが発生したときに E メールメッセージを生成します。たとえば、ジョブが失敗した場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services は、ジョブを担当しているユーザーに E メールを自動的に送信することができます。失敗により、イベントに一致するテンプレートを検索します。テンプレートをイベントに適用すると、イベントに関連する受信者に送信される E メールを作成します。

デフォルトのリポジトリのインストールに含まれた通知テンプレートは、<インストール ディレクトリ>\components\notification\templates のサブディレクトリにあります。サブディレクトリの名前は、一般的なイベント タイプに対応しています。たとえば、components\notification\templates\PRMS\Completion フォルダには、2 つのメッセージ テンプレートが含まれています。これらのテンプレート job_success.xsl と job_failure.xsl は、ジョブ実行の成功と失敗にそれぞれ対応しています。ジョブが正常に完了すると、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services では、job_success テンプレートを使用して、成功を示す通知メッセージを生成します。通知メッセージのコンテンツと外観は、テンプレートを変更することによってカスタマイズすることができます。

通知メッセージ テンプレートの構造

Apache **Velocity** テンプレート言語を使用して、イベント情報を通知メッセージに変換します。

Velocity テンプレートの構造

Velocity テンプレートには、*.vm のファイル拡張子が付いています。このテンプレートでは、/mimeMessage/messageSubject、/mimeMessage/messageContent、/mimeMessage/messageProperty の値を = 演算子で割り当てることにより、メッセージが生成されます。これらの値は、後から E メール プロセッサによって解析されます。次のサンプル テン

プレートでは、ジョブの成功を示す簡単で一般的な E メール メッセージが生成されます。

```
/mimeMessage/messageSubject=Job Completion
/mimeMessage/messageContent[text/plain;charset=utf-8]=The job completed successfully.
```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 11-1
一般的な通知メッセージ

The job completed successfully.

Velocity テンプレートの詳細は、Apache [Velocity プロジェクト](http://velocity.apache.org/) (<http://velocity.apache.org/>) のドキュメントを参照してください。

メッセージのプロパティ

E メール通知テンプレートには、リポジトリのデフォルト設定と異なる SMTP 設定が使用される場合に、メッセージの処理方法を決定するプロパティが含まれることがあります。たとえば、異なる SMTP サーバー名、ポート番号、メッセージに割り当てる返信先の E メール アドレスの指定が必要な場合があります。デフォルトの SMTP のプロパティは、リポジトリの通知構成オプションの下に一覧表示されます。詳細は、8 章 p. 79 [通知](#) を参照してください。リポジトリのインストールで Sun JVM を使用する場合、SMTP のプロパティは、[次の表](#)で定義されているメッセージ処理の JavaMail API のプロパティに対応します。これらのプロパティは、Java 環境によって異なる場合がある点に注意してください。SMTP のプロパティの詳細は、JVM のベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

テーブル 11-1
メッセージのプロパティ

メッセージのプロパティ	属性	イベント プロパティ	説明
mail.debug	値	MailSmtDebug	初期デバッグ モードを示すブール値。デフォルトは false です。
mail.smtp.user	値	MailSmtUser	デフォルトの SMTP ユーザー名。
mail.smtp.password	値	MailSmtPassword	SMTP のユーザー パスワード。
mail.smtp.host	値	MailSmtHost	接続先の SMTP サーバー。
mail.smtp.port	値	MailSmtPort	接続先の SMTP サーバーのポート。デフォルトは、25 です。

メッセージのプロパティ	属性	イベントプロパティ	説明
mail.smtp.connectiontimeout	値	MailSmtpConnectionTimeout	ソケット接続のタイムアウト値 (ミリ秒)。デフォルトでは、タイムアウトはありません (無制限)。
	値	MailSmtpTimeout	ソケット入出力のタイムアウト値 (ミリ秒)。デフォルトでは、タイムアウトはありません (無制限)。
mail.smtp.from	値	MailSmtpFrom	SMTP MAIL コマンドで使用する E メール アドレス。エンベロープ返信アドレスを設定します。
mail.smtp.from	label	MailSmtpFromPersonal	エンベロープ返信アドレスのラベル。
mail.smtp.localhost	値	MailSmtpLocalhost	ローカル ホスト名。通常、JDK とネーミング サービスが適切に構成されている場合は、このプロパティを割り当てる必要はありません。
mail.smtp.ehlo	値	MailSmtpEhlo	EHLO コマンドでサインオンするかどうかを示すブール値。デフォルトは true です。通常、 EHLO コマンドに失敗すると、 HELO コマンドがフォールバックとして機能します。このプロパティは、サーバーのフォールバックが機能しない場合以外は使用しないでください。
mail.smtp.auth	値	MailSmtpAuth	AUTH コマンドでユーザーを認証するかどうかを示すブール値。デフォルトは false です。
mail.smtp.dsn.notify	値	MailSmtpDsnNotify	SMTP サーバーから配信ステータスの通知をメッセージの送信者に送信する条件を指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ NEVER: 通知を送信しない。 ■ SUCCESS: 配信が正常に行われた場合にだけ通知を送信する。 ■ FAILURE: 配信が失敗した場合にだけ通知を送信する。 ■ DELAY: 配信の遅延が生じた場合に通知を送信する。 値は、カンマで区切って複数指定できます。

これらのプロパティを Velocity テンプレートで定義する場合のシンタックスを次に示します。

- プロパティ値は、次の例のように、引数としてプロパティ名とラベルを大かっこ内に指定して、`mimeMessage/messageProperty` に割り当てる必要がある。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][Brian McGee]=bmagee@mycompany.com
```

- プロパティ ラベルの値の指定は任意。したがって、次のような代入ステートメントのシンタックスも可能である。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][]=bmagee@mycompany.com
```

- プロパティの名前およびラベルの値は、静的な値として割り当てるか、対応するイベントプロパティを参照する変数で割り当てることができる。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][$MailSmtFromPersonal]=$MailSmtFrom
```

メッセージ内容

通知メッセージの内容は、通知テンプレートの `messageSubject` 要素と `messageContent` 要素に対して入力されたテキストに対応します。どちらの要素の場合も、このテキストにはイベントプロパティ値（変数）が含まれます。

- Velocity テンプレートでは、変数値は `$` 記号で参照されます。たとえば、`Job step ${JobName}/${JobStepName} failed at ${JobStepEnd}` の場合、`JobName`、`JobStepName`、および `JobStepEnd` プロパティの現在の値でテキストが挿入されます。

メッセージに挿入できる変数は、通知をトリガするイベントのプロパティを参照します。代表的なプロパティには次のものがあります。

- `JobName`：ジョブ名を示す文字列。
- `JobStart`：ジョブの開始時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobEnd`：ジョブの終了時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobSuccess`：ジョブが成功したかどうかを示すブール値。
- `JobStatusURL`：ジョブステータスの表示された URL に対応する文字列。
- `JobStepName`：ジョブステップ名を示す文字列。
- `JobStepEnd`：ジョブの終了時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobStepArtifacts`：ジョブステップ出力の URL を示す文字列値の配列。
- `JobStepStatusURL`：ジョブステップステータスの表示された URL に対応する文字列。
- `ResourceName`：ファイル名またはフォルダ名など、イベントの影響を受けるオブジェクト名に対応する文字列。

- `ResourcePath` : イベントの影響を受けるオブジェクトのパスに対応する文字列。
- `ResourceHttpRequest` : オブジェクトが表示された HTTP URL に対応する文字列。
- `ChildName` : イベントの影響を受ける親オブジェクトが持つ、子オブジェクト名に対応する文字列。たとえば、ファイルがフォルダ内に作成されると、これはファイルの名前となります。
- `ChildHttpRequest` : 子オブジェクトが表示された HTTP URL に対応する文字列。
- `ActionType` : リポジトリ イベントについて、`FolderCreated` など、イベントを生成したアクションの種類。

使用できるプロパティは、イベントによって定義され、イベントタイプごとに異なります。

次に示すジョブ ステップの成功通知のサンプル Velocity テンプレートでは、件名行にジョブとジョブ ステップの名前を挿入します。また、メッセージの内容には、ステップの終了時刻、ステータスを参照できる URL、ジョブ ステップによって生成されたアーティファクトのリストも含まれます。このテンプレートでは、`JobStepArtifacts` プロパティの配列からアーティファクトの URL を取得するために、`#foreach` ループ構造が使用されている点に注意してください。

```
<html>
<head>
<meta http-equiv='Content-Type' content='text/html;charset=utf-8'/>
</head>
<body>
<p>The job <b>${JobName}</b> started ${JobStart} and #if(${JobSuccess}) completed successfully #else failed
#end ${JobEnd}.

<p>To review the job log, go to <a href='${JobStatusURL}'>${JobStatusURL}</a>.</p>

<hr><p>This is a machine-generated message.Please do not reply directly.
この通知を受信しない場合、通知リストから削除してリポジトリ管理者に連絡してください。</p>
</body>
</html>
```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 11-2
カスタマイズした内容を使用したメッセージ

The job **Churn** started May 10, 2010 5:12:09 PM and completed successfully May 10, 2010 5:12:20 PM.

To review the job log, go to

<http://CDSServer:8080/processui/jobStatus/ex/0a70077848fe9ee2000001286fdd14429e25>.

This is a machine-generated message. Please do not reply directly. If you do not wish to receive this notification, remove yourself from the notification list or contact your Repository administrator.

次のコードセグメントでは、フォルダ コンテンツ通知の Velocity テンプレートを変更してジョブへのハイパーリンクをメッセージから削除する方法を示します。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ジョブを IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 以外で開くことはできないため、通知メッセージをカスタマイズしてハイパーリンクを削除することを強くお勧めします。この例では、if 条件を追加してオブジェクトの MIME タイプを調べています。オブジェクトが IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ジョブの場合は、ハイパーリンクを組み込みません。

元のテンプレート:

```
#if($Attachments)
See attachment.
#else
<p>To review the content of the file, go to <a href='${ResourceHttpUrl}'>${ResourceHttpUrl}</a>.</p>
#end
```

変更したテンプレート:

```
#if($Attachments)
See attachment.
#else
#if($Mime Type!='application/x-vnd.spss-prms-job')
<p>To review the content of the file, go to <a href='${ResourceHttpUrl}'>${ResourceHttpUrl}</a>.</p>
#end
#end
```

メッセージ書式

通知テンプレートでは、メッセージ内容の MIME タイプを指定する必要があります。通知テンプレートでは、/mimeMessage/messageContent とともに大かっこで MIME タイプの引数を指定します。

MIME タイプには次のいずれかの値を指定できます。

- text/plain: 通知メッセージはプレーンテキストで表示されます。これは、デフォルトの設定です。
- text/html: 通知メッセージには HTML タグが含まれます。メッセージの内容の外観を制御するには、この設定を使用します。メッセージ内の HTML が適切に構成されている必要があります。

どのような場合でも、テンプレートの出力を Unicode (UTF-8) でエンコードすることが推奨されます。

HTML 通知テンプレートでは、マークアップ言語で使用可能な機能を利用できます。たとえば、メッセージには Web ページや、ジョブの出力へのリンクを含めることができます。

次のテンプレートでは、ジョブ ステップ完了の通知メッセージを生成し、内容を表として書式設定し、本文のインライン スタイルを使用してメッセージの背景色を指定し、段落には、内部のスタイル シートを使用して青色の Verdana フォントを定義します。さらにメッセージにはジョブの出力へのリンクが含まれます。

```
/mimeMessage/messageSubject=${JobName}/${JobStepName} completed successfully
/mimeMessage/messageContent[text/html;charset=utf-8]=
```

```
<html>
<head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html;charset=utf-8"/>
<style type="text/css">
table {font-family: verdana; color: #000080}
p {font-family: verdana; color: #000080}
.foot {font-size: 75%; font-style: italic;} </style>
</head>
<body style="background-color: #DCDCDC">
<table border="8" align="center" width = 100%>
<tr align="left">
<th>Job/step name</th>
<td>${JobName}/${JobStepName}</td>
</tr>
<tr align="left">
<th>End time</th>
<td> ${JobStepEnd}</td>
</tr>
<tr align="left">
<th>Output</th>
<td><p>
#f ($JobStepArtifacts)
#foreach($artifact in $JobStepArtifacts)
<a href=' $artifact.get("url") '>$artifact.get("filename")</a><br>
#end
#else None <br>
#end
```

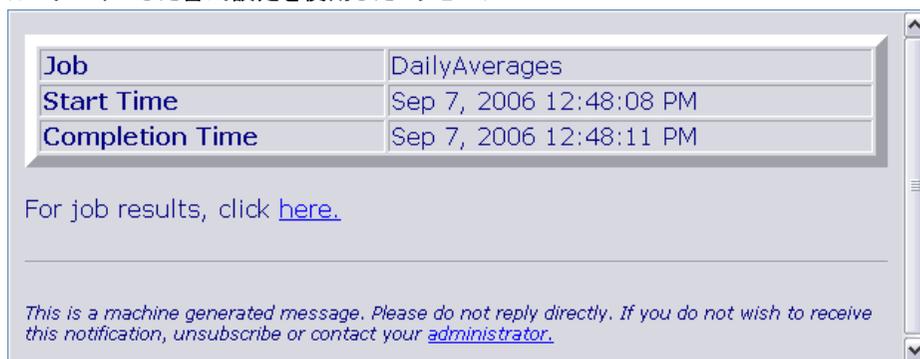
```

<p></td>
</tr>
</table>
<hr/>
<p class="foot">This is a machine generated message.
Please do not reply directly.If you do not wish to receive
this notification, unsubscribe or contact your
<a href="mailto:admin@mycompany.com"> your IBM SPSS Deployment
Services administrator.</a></p></body>
</html>

```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 11-3
カスタマイズした書式設定を使用したメッセージ



通知テンプレートの編集

Velocity メッセージ テンプレートを編集するには

1. テンプレートをテキスト エディタで開きます。
components/notification/templates フォルダのサブフォルダに、使用しているテンプレートの現在のセットが含まれています。
2. /mimeMessage/messageSubject に割り当てられている値を変更します。\$ の表記を使用して、イベント プロパティ変数をメッセージの件名に挿入します。詳細は、p. 109 [メッセージ内容](#) を参照してください。
3. メッセージの MIME タイプを定義します。messageContent に従って、MIME タイプ値が大カッコで指定されます。プレーン テキスト メッセージの場合、text/plain の値を使用します。HTML メッセージの場合、text/html の値を使用します。詳細は、p. 111 [メッセージ書式](#) を参照してください。
4. messageContent に割り当てられている値を変更します。\$ の表記を使用して、イベント プロパティ変数をメッセージ コンテンツに挿入します。

- 元の名前を使用して、テンプレートを保存します。

対応するイベントが発生した場合、後続の通知メッセージでは変更されたテンプレートが使用されます。

ジョブ ステータス

JobStatusURL プロパティを含む通知テンプレートは、ジョブ出力やログへのリンクを含むメッセージを作成します。

ジョブの結果を表示するには、次の手順を実行します。

- 通知メッセージのステータス リンクをクリックします。サーバーの [ログイン] ページが表示されます。
- ログイン名とパスワードを入力します。[ログイン] をクリックします。[ジョブ ステータス] ページが表示されます。

図 11-4
ジョブ ステータス



ジョブ ステータス ビューには、ジョブ内のすべてのジョブ ステップの状態に関する情報など、ジョブの処理ステータスの詳細情報が表示されます。ビューを使用して、生成された出力のほか、ジョブ ログ、各ジョブ ステップのログを表示することができます。

ジョブの詳細

名前：ジョブのリポジトリパス。

バージョン: ジョブのバージョン ラベル。

ステータス: 実行中、成功、または失敗など、ジョブの処理ステータス。

開始日: ジョブの処理が開始された日時。

実行時間: ジョブ実行の期間

ユーザー: ジョブを登録したユーザー。

- ▶ ジョブのステータスを更新するには、[更新] をクリックします。
- ▶ ジョブ ログやジョブ ステップを記載したジョブの詳細を展開するには、そのジョブ名の横の + をクリックします。
- ▶ ジョブ ログを表示するには、ジョブ名の下 [ログ] リンクをクリックします。[ログ] タブが開きます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。

ジョブ ステップの詳細

名前: ジョブ ステップの名前。

ステータス: 実行中、成功、または失敗など、ジョブ ステップの処理ステータス。

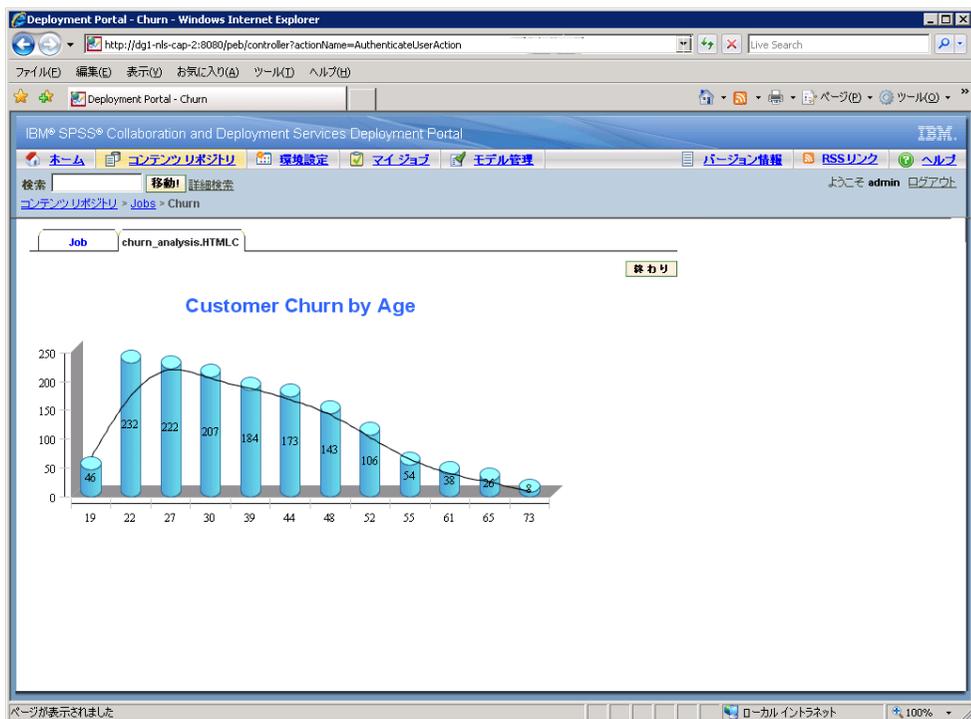
開始日: ジョブ ステップの処理が開始された日時。

実行時間: ジョブ ステップの実行期間。

- ▶ ジョブ ステップのログや結果の出力を記載したジョブ ステップの詳細を展開するには、そのジョブ ステップ名の横の + をクリックします。
- ▶ ジョブ ステップのログを表示するには、ジョブ ステップ名の下 [ログ] リンクをクリックします。ジョブ ステップのログが新しいタブに表示されます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。
- ▶ ジョブ ステップの出力を表示するには、出力ファイル名をクリックします。[結果] タブが開きます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。

たとえば、ここに表示されるジョブは 3 つのステップで構成されています。最初のステップではデータの準備、2 番目のステップでは BIRT レポート、3 番目のステップでは一時ファイルのクリーンアップを実行します。

図 11-5
ジョブ出力



通知サービス パフォーマンスの最適化

通知サービス全体のパフォーマンスは、登録データを保存し処置するデータベース システムのパフォーマンスのほか、登録者および登録データを管理、イベントを収集、通知を生成、形式設定、および配信する IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services コンポーネントの一連のパフォーマンスを示します。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の通知機能には、多くのシステム リソースを必要とし、詳細な設定を必要とする場合があります。通知サービスのパフォーマンスを改善するために、一般的なガイドラインに従うこともお勧めします。

通知サービス構成

通知構成オプション

通知サービス構成オプションで定義されたパラメータを変更して、通知サービス パフォーマンスを改善することができます。次のオプションを使用すると、パフォーマンスに大きな効果が見られる場合があります。

- イベントノイズフィルタリングを使用すると、関連する通知プロバイダや登録者に一致した登録情報を持たない通知イベントを処理の早い段階で無視します。イベントノイズフィルタキャッシュのサイズは、一致する登録情報で解決しないキャッシュされたイベントの最大数を定義します。必要に応じて、イベントノイズフィルタリング（[イベントノイズフィルタ]構成オプション）を有効化して、キャッシュのサイズを拡大し（[イベントノイズフィルタキャッシュ]構成オプション）、通知サービスパフォーマンスを改善することができます。実稼働環境では、イベントノイズフィルタリングを無効化することはお勧めできません。デバッグおよびテスト環境でのみ使用する必要があります。
- 登録識別キャッシュは、一致する登録識別のリストに対する、解決したフィルタリング式のマッピングのキャッシュです。キャッシュのサイズは、キャッシュ内のフィルタリング式の数を定義します。フィルタリング式に関連する一致する登録識別の数に制限はありませんが、解決されたフィルタリング式あたりの一致する登録情報の数は、数十、またはまれに数百という、比較的少数であることが期待されます。キャッシュのサイズを拡大すると（[登録識別キャッシュ]構成オプション）パフォーマンスを改善することができます。
- 永続イベントキューを使用すると、受信通知イベントを一時ディスクストレージに保存し、消費メモリーを最小化することができます。デフォルトで、受信通知イベントをメモリーに保存できます。受信イベントの比率が高く、使用できるRAMが十分でない場合、一時ディスクストレージにイベントを保存することができます。永続イベントキューが有効である場合、イベントキュー記憶域のコミットバッチサイズで、一時記憶域に書き込まれる前にメモリーに保存される通知イベントの最大数を設定します。永続イベントキューを有効化し（[永続イベントキューの有効化]構成オプション）、コミットバッチサイズを拡大すると（[永続イベントキューサイズ]構成オプション）、パフォーマンスが向上し、追加メモリーの要件により、バッチサイズを適度に拡大することをお勧めします。ディスクの永続イベントキュー記憶域ファイルを拡大（[永続イベントキューサイズ]オプション）しても、パフォーマンスに対する明確な影響はありません。永続イベントキュー設定への変更を有効にするには、システムを再起動する必要があります。
- 通知メッセージで送信されるバイナリコンテンツ（Eメール添付）を無効にすると、パフォーマンスが大幅に改善されます（[バイナリコンテンツの有効化]構成オプション）。バイナリを添付した通知メッセージの生成は、プロセスを消費する操作である場合があります。バイナリ添付のコンテンツは、リポジトリから読み込み、通知メッセージに追加し、Eメールサーバーなど適切な配信チャネルを介して送信する必要があります。添付されたバイナリコンテンツの送信では、特定のタイプの通知メッセージを必要とする場合があります。たとえば、ベース64の文字コード化バイナリ添付（SMTP）では、生成されたメッセージの合計サイズに約33%追加します。さまざまなカスタムテンプレートを数多く使用して、大きいサイズの添付を含む通知メッセージの形式設定

をする場合、オーバーヘッドの処理が大きくなる場合があります。こうした場合、通知サービスではメッセージを形式設定し、添付を追加、そして配信チャネルをそれぞれに使用して各メッセージを送信する必要があります。パフォーマンスを改善するために、添付を含む通知の数、添付のサイズ、添付を含む通知メッセージの形式設定に使用するカスタムテンプレートの数を制限することをお勧めします。

- 通知メッセージの処理および配信は、リソースをかなり消費します。より小規模のインストールの場合、または IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services を非専用サーバーにインストールする場合 `m` [イベント コレクタのコア プール サイズ] 構成オプションおよび [イベント コレクタの最大プール サイズ] 構成オプションを変更して、プールのサイズを単一のバックグラウンド スレッドに制限することをお勧めします。

通知構成オプションの詳細、説明、デフォルト値については、「通知」 (p. 79) を参照してください。

専用 SMTP サーバー

E メール サーバーなど、配信チャネルのパフォーマンスは、通知サービス全体のパフォーマンスを制御する重要な要素です。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知の場合、通常の子会社の E メール サーバーではなく、高速の専用 SMTP サーバーの使用を強くお勧めします。専用サーバーを使用すると、メーラー キューに通知メッセージを追加する時間が劇的に短縮され、通知サービスのパフォーマンスが改善されることが示されています。使用可能な構成によりリポジトリと同じホストで専用 E メール サーバーを展開すると、通知サービスがネットワークの E メール サーバーとの通信にかかる時間を短縮します。

スレッド数

SMTP サーバーに割り当てられるスレッド数が十分であることが不可欠です。そのスレッド数は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知サービスのイベント コレクタ プールの処理スレッド数以上です。配信サーバーのスレッド数が不十分である場合、通知サービスは配信サーバーと効率的に通信することはできません。

一般的な推奨事項

次の手法により、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ユーザーが使用できる全体の機能を削減することなく通知サービスのパフォーマンスを大幅に改善することができます。

受信者数の最小化

イベント マッチング時の受信者集計時間全体を最小化するために、各登録者を個別に指定するのではなく、一連の外部配信リストを定義することをお勧めします。これらの配信リストは、会社のディレクトリ サーバー (Microsoft Exchange、Lotus Domino など) に保存することができます。この方法で、通知サービスが受信者および配信デバイスを取得するために実行する必要がある多数のデータベース クエリーの必要性がなくなります。会社の専用SMTP サーバーは、使用可能なリソースを使用し、通知メッセージの配信をより効果的に処理できる必要があります。

カスタム テンプレート数の最小化

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用して、指定されたイベント タイプの通知メッセージの形式設定に使用する、無制限のカスタム テンプレート数を定義します。ただし、通常の場合では、デフォルトのテンプレートのみを使用した通知メッセージの形式設定のみで十分です。デフォルトのテンプレートは、サーバーのファイル システムに保存され、メモリーのキャッシュされます。これらのテンプレートを、特定のユーザー要件を満たすようにカスタマイズすることができます。詳細は、p. 113 [通知テンプレートの編集](#) を参照してください。テンプレートは要求ごとにデータベースから取得し、各通知メッセージを個別に形式設定する必要があるため、多数のカスタム テンプレート (一致するイベントごとに数百または数千) を使用すると、パフォーマンスを著しく低下させる場合があります。同じ理論が、送信元 SMTP カスタム アドレスに適用されます。多くの場合、リポジトリ構成オプションで指定されているように、単一のデフォルトの送信元アドレスで十分です。通知テンプレートの内容 (件名と本文) はデフォルト テンプレートの内容と同じで、送信元カスタム アドレスを指定すると、指定した通知のカスタム テンプレートを設定します。

登録数の最小化

通知サービスのパフォーマンスを改善するために、通常、単一イベントに一致する登録情報数を最小化する必要があります。受信イベントが、さまざまな登録者およびさまざまなメッセージ テンプレートを持つ多くの登録情報と一致する場合、配信を効率的に集計することができず、受信者に個別の通知メッセージを生成する必要があります。処理がイベント タイプ階層を越えるため、初期の単独通知イベントで多くの派生イベントを生成する必要があるという点に注意してください。初期イベントは、アプリケーション固有のイベントスプリッタによって一連のイベントに分割される場合もあります。多数の派生イベントが初期イベントに生成される場合、登録レイアウトを管理する方法について考慮することをお勧めします。たとえば、コンテンツ リポジトリ階層の各子フォルダの多くの登録情報を個別に指定するのではなく、親フォルダの単一登録情報を指定して、

[サブフォルダへの適用] オプションを使用することで十分な場合がよくあります。詳細は、の IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のユーザー マニュアルを参照してください。登録情報を制限することも、また有用です。ユーザーを個別に登録できるようにする代わりに、配信リストを会社の SMTP サーバーに設定し、保存することができます。配信リストを使用し、制限された数の登録情報を作成して、パフォーマンスを改善、メッセージの処理および配信にかかる時間を最小化することができます。

登録管理アクティビティのスケジュール設定

イベント マッチング時のパフォーマンスを改善するために、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知サービスは多くの内部キャッシュを保持します。クライアントがイベント タイプ リポジトリまたは登録リポジトリに変更を行うと、これらのキャッシュは無効化（クリア）されます。通知サービスのイベント処理のピーク時間が重複しないスケジュールに基づいて、登録者の追加、登録情報の削除など、登録管理アクティビティを行うことをお勧めします。処理の負荷が軽い登録管理アクティビティの実行は通常受け入れ可能ですが、パフォーマンスの低下による短時間のバーストが発生する場合があります。

通知サービスのデバッグ

通知サービスのデバッグを有効にするには、アプリケーション サーバーの log4j.xml ファイルを編集します。JBoss を使用している場合、次のように <your_jboss_installation>%server%default%conf%log4j.xml を編集して、com.spss.notification パッケージの **DEBUG** ログ レベルを有効にします。

```
<category name="com.spss.notification"> <priority value="DEBUG"/> </category>
```

その他のアプリケーション サーバーでは、ブラウザ インターフェイスまたは展開されたコンポーネントのログ構成を編集するその他の方法を提供しています。SMTP ログ記録を有効にするには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で [SMTP デバッグ モードの有効化] 構成オプションを **true** に設定します。通知ログは非常に詳細で、イベントマッチングおよび通知配信アクティビティに関する詳細情報を提供します。最も重要なログ項目は次のように表示されます。

```
[...Smtpdistributor] Exiting SMTP distributor.The distribution took 5.906 s.
```

SMTP の配信が 100 ～ 200 ミリ秒以上かかる場合、専用 SMTP サーバーの使用を強くお勧めします。

デバッグの目的で、該当する構成オプションを次の値に設定して、配信ステータス通知 (Delivery Status Notifications: DSN) を有効にすることもお勧めします。

SMTP DSN 通知

FAILURE,SUCCESS,DELAY

SMTP DSN Ret

FULL

注：SMTP サーバーは、これらの配信通知を生成する RFC3461 指定に対応する必要があります。

通知の配信失敗のトラブルシューティング

リポジトリのインストール時に適切な設定を電子メール サーバーおよびデフォルトの送信者の電子メール アドレスに指定すると、通常、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 通知が適切に配信されるための追加の電子メール構成は必要ありません。インストール時に間違いが起こった場合、通知構成のオプションを変更して修正することができます。詳細は、8 章 p.79 [通知](#) を参照してください。

通知および登録の配信失敗が発生した場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の管理者にも次のようなシステムが生成したメッセージで通知されます。

Your message did not reach some or all of the intended recipients.

Subject: IBM SPSS Deployment Services: New version of ChurnAnalysis created

Sent: 4/5/2010 2:35 PM

The following recipient(s) could not be reached:

jsmiht@mycompany.com on 4/5/2010 2:35 PM

There was a SMTP communication problem with the recipient's email server.

Please contact your system administrator.

多くの場合、配信の失敗は、通知受信者を指定またはデフォルトの登録アドレスを指定した場合のユーザー エラーによって発生します。

特定の場合においては、会社のネットワークまたは電子メール サーバーの設定により通知メッセージの配信に問題が発生する場合があります。たとえば、サーバーが外部のアドレスに送信するよう構成されていない場合があります。問題を調査するには、次の手順を行います。

- 通知の配信失敗を確実に検出する場合、リポジトリ監査レコードを使用します。監査の詳細は、「13 章」を参照してください。

- 通知の失敗の原因を確認するには、デバッグ モードを有効にすることをお勧めします。詳細は、p.120 [通知サービスのデバッグ](#) を参照してください。
- nslookup クエリーを使用して、SMTP サーバーの構成を検証することができます。
- 通知メッセージの SMTP ヘッダーを検証すると、SMTP サーバー メッセージの送信についての役立つ情報が取得できます。

通知および登録の配信失敗は、リポジトリ監査ビューに記録されます。詳細は、13 章 p.128 [リポジトリの監査](#) を参照してください。

JMS セットアップ

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は Java Messaging Service (JMS) を使用してサードパーティのアプリケーションと通信し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository イベントに基づいてジョブの処理を開始します。JMS API は、2 つ以上のクライアント間でメッセージを送信するための Java Message Oriented Middleware (MOM) API です。JMS を使用すると、プログラムではまず、接続ファクトリのインスタンスを作成してキューまたはトピックに接続します。その後、メッセージを作成して、送信またはパブリッシュします。受信側では、クライアントはメッセージを受信またはサブスクライブします。同じ Java クラスを使用し、目的のプロバイダの JNDI 情報を使用することによって、さまざまな JMS プロバイダと通信できます。

パブリッシュ/サブスクライブ モデルで JMS 通信を行うことができるのは IBM SPSS Collaboration and Deployment Services だけです。このモデルでは、特定のメッセージ トピックにメッセージがパブリッシュされます。特定のメッセージ トピックに関するメッセージの受信では、0 以上の数の登録者が関心のある対象を登録できます。JMS キューは現在サポートされていません。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services と連携させるための JMS の設定手順は、特定の IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで使用される JMS プロバイダによって異なります。最も一般的なオープンソースの JMS プロバイダには、Apache ActiveMQ、OpenJMS Group の OpenJMS、JBoss の JBoss Messaging などがあります。独自の実装には、IBM の WebSphere MQ (以前は MQSeries)、Sun Java System Message Queue、BEA WebLogic などがあります。

次の例では、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services での JMS の使用方法について説明しています。最初の例では、JBoss Messaging を使用して IBM SPSS Collaboration and Deployment Services と通信するためにサンプルプログラムを構成する方法を示しています。この例では、JMS トピック構成ファイル、JMS メッセージをトピックに公開する Java クラスのソースコード、クラスを実行する Windows バッチ ファイルを提供しています。2 番目の例では、リポジトリ イベントに基づいてジョブ プロセスを設定する方法を示しています。これ以外の JMS プロバイダの設定方法については、ベンダーから提供されるドキュメンテーションを参照してください。

JMS トピックの構成

JBoss JMS では、キューとトピックは**管理対象オブジェクト**であり、構成ファイルによって展開することができます。その例を次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<server>
  <mbean code="org.jboss.mq.server.jmx.Topic"
    name="jboss.mq.destination:service=Topic,name=PEStestTopic">
    <depends optional-attribute-name="DestinationManager">jboss.mq:service=DestinationManager</depends>
  </mbean>
</server>
```

このファイルは %JBOSS_HOME%/server/default/deploy ディレクトリに配置する必要があり、リポジトリ サーバーを再起動する必要があります。トピックは、**jndi 名 topic/PEStestTopic** にバインドされます。

JBoss には、あらかじめ構成されたキューとトピックが用意されています。これらの設定は、%JBOSS_HOME%/server/default/deploy/jms ディレクトリにある `jbossmq-destinations-service.xml` ファイル内で参照できます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のセットアップ

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services で JMS サービスとの通信を構成するには、次の手順で行います。

1. IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用し、**PEStestTopic** を参照するメッセージ ドメインを設定します。
2. そのドメインを使用する IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ジョブにメッセージ ベースのスケジュールを作成します。詳細については、『Deployment Manager User’s Guide』を参照してください。

JMS クライアント プログラムのサンプル

`SendMessageClientMain.java` は、**topic/PEStestTopic** にメッセージをパブリッシュし、続いて IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 処理をトリガするサンプル プログラムです。

```
import java.util.Properties;

import javax.jms.Connection;
import javax.jms.MessageProducer;
import javax.jms.Session;
```

```
import javax.jms.Topic;
import javax.jms.TopicConnectionFactory;
import javax.jms.TopicSession;
import javax.jms.TextMessage;
import javax.naming.InitialContext;
import javax.naming.Context;

public class SendMessageClientMain
{
    public static void main(String args[])
        throws Exception
    {
        System.out.println("SendMessageClient....");
        Connection connection = null;
        Session session = null;
        Topic topic = null;

        // Change these two lines to point to the correct topic and message to send
        String topicName = "topic/PEStestTopic";
        String messageText = "testmsg";

        Properties props = new Properties();
        // Change these two lines to point the correct JMS server.
        props.put(Context.INITIAL_CONTEXT_FACTORY, "org.jnp.interfaces.NamingContextFactory");
        props.put(Context.PROVIDER_URL, "jnp://localhost:1099");

        try {
            InitialContext iniCtx = new InitialContext(props);
            Object tmp = iniCtx.lookup("ConnectionFactory");
            TopicConnectionFactory tcf = (TopicConnectionFactory) tmp;

            connection = tcf.createConnection();
            topic = (Topic) iniCtx.lookup(topicName);
            session = connection.createSession(false,
                TopicSession.AUTO_ACKNOWLEDGE);
            connection.start();

            // Send a text msg
            MessageProducer send = session.createProducer(topic);
            TextMessage tm = session.createTextMessage(messageText);
            send.send(tm);
            System.out.println("sendMessage - sent text=" + tm.getText());
            send.close();
            System.out.println("End TopicSendClient");

            connection.stop();
            session.close();
            connection.close();
        }
    }
}
```

```
        catch (Exception e)
        {
            // Error handling left as an exercise for the student.
            e.printStackTrace();
        }

        System.exit(0);
    }
}
```

メッセージ トピック、メッセージ テキスト、およびエラー処理ルーチンは、必要に応じて変更することができます。ソース コードで `Context.INITIAL_CONTEXT_FACTORY` プロパティおよび `Context.PROVIDER_URL` プロパティを設定する代わりに、次のようにして JMS サーバーのルックアップ方法を定義する `jndi.properties` ファイルを作成できます。

```
java.naming.provider.url=jnp://localhost:1099
java.naming.factory.initial=org.jnp.interfaces.NamingContextFactory
```

このファイルは、サンプル プログラムのコンパイル済みクラスのパスに配置する必要があります。

サンプル プログラムの実行

次のサンプルは、`SendMessageClientMain.class` を実行して JMS メッセージを JBoss Messaging サービスにパブリッシュするための Windows バッチ ファイルのサンプルです。なお、バッチ ファイルにより環境変数が設定され、サンプル プログラムの起動前に適切な JMS ネーミング ファクトリ クラスをポイントするようになります。

```
set JBOSS_HOME=C:\ssk\pgms\pes35\jboss\4.0.3SP1

set JBOSS_SERVER_LIB=%JBOSS_HOME%\server\default\lib
set JBOSS_ROOT_LIB=%JBOSS_HOME%\lib

set CLASSPATH=.;\bin
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_SERVER_LIB%\jboss-j2ee.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_SERVER_LIB%\log4j.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_SERVER_LIB%\jnpserver.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_ROOT_LIB%\jboss-common.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_SERVER_LIB%\jbossmq.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_SERVER_LIB%\jboss.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_ROOT_LIB%\jboss-system.jar
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%JBOSS_ROOT_LIB%\concurrent.jar

java SendMessageClientMain
```

ここまでの手順をすべて正確に実行してから `SendMessageClientMain.class` を実行すると、対応する IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のメッセージベースのジョブ スケジュールの処理がトリガされます。

メッセージ ベース プロセスの例

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のメッセージベースのスケジュール作成機能を使用して、サードパーティのアプリケーションやリポジトリ イベントによってプロセスを開始することができます。たとえば、ジョブ ステップのいずれかで使用される IBM® SPSS® Modeler ストリームが更新されたときにジョブを再実行できるよう設定できます。次のステップを実行します。

- ▶ IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、JMS メッセージ ドメインを作成します。
- ▶ このメッセージ ドメインを使用してジョブのメッセージベースのスケジュールを設定します。JMS メッセージセレクトタは、次の例のように SPSS Modeler ストリームのリソース ID を示す必要があります。

`ResourceID=<リソース ID>`

SPSS Modeler ストリームのリポジトリ リソース ID はオブジェクト プロパティにあります。

- ▶ 定義した JMS 登録者に基づいて SPSS Modeler ストリームの通知を設定します。
- ▶ メッセージベースのスケジュールをテストするには、ストリームを SPSS Modeler で開き、変更してリポジトリに保存する必要があります。すべての項目が正しく設定されると、スケジュールはジョブを開始します。

リポジトリの監査

収集され作成されたデータ オブジェクトの容量が大きくなると、データに関する動作を追跡する必要があります。データベースの監査を行うことで、データを使用した人物、アクセスされたデータ オブジェクト、操作が発生した日時、およびオブジェクトをどのように操作したかを追跡できます。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository は、監査に関する質問の回答を、質問の詳細レベルに応じて取得できる便利なメカニズムを備えています。これを使用すると、必要とされる最大限または最小限の詳細情報を柔軟に収集できます。データベースの監査とレポートは、最初は簡単なレベルで行い、ビジネスに必要な変更に合わせて複雑にすることができます。

注：通知と登録を使用すると、リポジトリ オブジェクトの変更や処理結果を継続的に追跡できます。詳細は、の IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のマニュアルを参照してください。

データベースの監査とレポートを行うと、次のことが可能になります。

- データベースに保存されているデータ オブジェクトの作成や削除などの変更を監視する。
- 将来の分析や参照に備えて、データベース アクティビティの記録やログを作成する。
- データベース アクティビティのレポートを生成する。

これらの操作を簡単に追跡できるようになると、データの制御が強化され、組織のデータ セキュリティおよび変更管理規則を徹底できます。

データベースの監査機能

リポジトリには、システム イベントやオブジェクトの変更内容を記録するためのさまざまなデータベース テーブルが用意されています。サポートされているリレーショナル データベースにリポジトリをインストールすると、監査とレポートに必要なテーブルが自動的に作成されます。ユーザーは、データベース オブジェクトを手動で追加する必要はありません。

監査情報にアクセスする最も簡単な方法は、サポートされているデータベースクライアントアプリケーションで SQL クエリーを実行することです。たとえば、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に付属している BIRT Report Designer for IBM® SPSS® を使用すると、監査レポートを作成できます。

特定の種類の監査情報を定期的を取得する必要がある場合は、ビューを設定できます。データベース ビューは、クエリーの結果セットで構成される読み取り専用の仮想テーブルまたは論理テーブルです。リレーショナル データベースの通常のテーブルと異なり、ビューは物理スキーマの一部ではなく、データベース内のデータを基に計算または収集された動的テーブルです。テーブルのデータを変更すると、ビューに表示されるデータも更新されます。

リポジトリは、複数の事前定義のビューとともにインストールされます。事前定義のビューを使用すると、ファイル、ジョブ、ストリームなどのリポジトリ オブジェクトに関するさまざまな監査情報を取得できます。また、複雑なレポート要件に対応するためにカスタム ビューを設定することもできます。カスタム ビューを実装する場合は、各データベースのベンダーから提供されるドキュメントを参照して、SQL シンタクスの相違点を確認してください。

注： 監査クエリーは、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services イベント テーブル、および事前定義のビューに対して実行できます。ただし、将来のシステム リリースでテーブル構造が変更される可能性があるため、互換性を考慮して、監査クエリーを記述する際はテーブルではなくビューを使用することをお勧めします。

監査イベント

次のシステム イベントは、データベース イベント テーブルに対してエントリをトリガします。

リポジトリ イベント

- ファイルまたはフォルダの作成
- ファイルまたはフォルダの更新
- バージョン
- ファイルまたはフォルダの削除
- ファイルまたはフォルダの許可の変更

セキュリティ イベント

- ログイン成功
- ログイン失敗
- ユーザーの追加

- ユーザーの削除
- パスワードの変更
- グループの追加
- グループへのユーザーの追加
- グループの削除

ジョブ実行イベント

- ジョブの送信
- ジョブの開始
- ジョブ ステップの開始
- ジョブの正常終了
- ジョブの失敗
- ジョブ ステップの成功
- ジョブ ステップの失敗

スコアリング イベント

- スコアリング要求
- スコアリング構成の変更

イベント テーブル

リポジトリ イベントの情報は、監査イベント (SPSSAUDIT_EVENTS) テーブルとイベント パラメータ (SPSSAUDIT_PARAMETERS) テーブルに格納されます。システム イベントが発生するたびに、SPSSAUDIT_EVENTS テーブルに行が生成されます。イベントは、SPSSAUDIT_PARAMETERS テーブルのパラメータ行に (1 対多の関係で) 関連付けることができます。

監査イベント テーブル (SPSSAUDIT_EVENTS)

SERIAL: イベント行の一意的識別子。この番号を基に、イベントが生成された順序を判定できます。

STAMP: イベントが発生した日付と時刻。

COMPONENT: イベントの発生元のシステム コンポーネント。COMPONENT で返される値を次に示します。

- repository/audit_component_name: リポジトリ イベント
- security/componentAuthN: ユーザー認証イベント
- security/componentLRU: ユーザーおよびグループ設定イベント
- prms/prms: ジョブ スケジュール イベント

- notification/notification: 通知または登録イベント
- userpref/auditComponent: ユーザー設定変更イベント
- scoring/scoring: スコアリング サービス イベント

LOCUS: オーナー コンポーネントで定義され、特定のイベント タイプを割り当てます。 **LOCUS** で返される値を次に示します。

リポジトリ イベントの Locus コード

- repository/audit_access_object: ファイルまたはフォルダへのアクセス
- repository/audit_new_object: ファイルまたはフォルダの作成
- repository/audit_update_object: ファイルまたはフォルダの更新 (コンテンツまたはメタデータ)
- repository/audit_new_version: バージョンの作成
- repository/audit_delete_version: バージョンの削除
- repository/audit_delete_object: ファイルまたはフォルダの削除
- repository/audit_move_object: ファイルまたはフォルダの移動
- repository/audit_modify_permissions: ファイルまたはフォルダのアクセス許可の変更
- repository/audit_update_custom_property_value: ファイルまたはフォルダのカスタム プロパティ値の更新
- repository/audit_new_custom_property: 新しいカスタム プロパティの作成
- repository/audit_modify_custom_property: 既存のカスタム プロパティの変更
- repository/audit_delete_custom_property: 既存のカスタム プロパティの削除
- repository/audit_reindex_repository_started: リポジトリのインデックス再作成処理の開始
- repository/audit_reindex_repository_ended: リポジトリのインデックス再作成処理の終了

セキュリティ イベントの Locus コード

- security/locAuthen: ログイン成功
- security/locNotAuthen: ログイン失敗
- security/locLogout: ログアウト
- security/locLRUAdd: ユーザーの追加
- security/locLRUDelete: ユーザーの削除

- security/locLRUUpdate: パスワードの変更
- security/locLRUAdd: グループの追加
- security/locLRUUpdate: グループ名の変更
- security/locLRUUpdate: グループへのユーザーの追加、またはグループからのユーザーの削除
- security/locLRUDelete: グループの削除

ジョブ実行イベントの Locus コード

- prms/audit_job_submit: ジョブの送信
- prms/audit_job_start: ジョブの開始
- prms/audit_job_step_start: ジョブ ステップの開始
- prms/audit_job_success: ジョブの正常終了
- prms/audit_job_failure: ジョブの失敗
- prms/audit_job_step_success: ジョブ ステップの正常終了
- prms/audit_job_step_failure: ジョブ ステップの失敗
- prms/audit_job_update: ジョブの更新

通知イベントの Locus コード

- notification/audit_delivery: 通知メッセージの配信イベント (配信済み、未配信、一部配信済み)
- notification/audit_subscription: 通知または登録の設定変更イベント (登録の作成、更新、削除)

ユーザー設定イベントの Locus コード

- userpref/auditLSet: ユーザー設定値の設定
- userpref/auditLDelete: ユーザー設定値の削除

スコアリング サービス イベントの Locus コード

- scoring/metric_update-スコアリング サービス要求またはスコアリング構成の更新

MIMETYPE: イベントに関連付けられたオブジェクトの MIME タイプ。

TITLE: イベントの簡単な説明。通常、イベントのリストに表示されます。コンテンツ リポジトリ イベントの場合、これはファイル名になります。

PRINCIPALID: イベントを生成したユーザー。

AUDIT_RESOURCE: コンテンツに関連付けられている場合は、コンテンツ リポジトリ オブジェクトの URI。

DETAILS: コンポーネントで定義されたイベントに関する追加情報を示す文字列。たとえば、ラベル変更前のラベル、メタデータ変更前のメタデータ、名前変更前の名前などです。

SIGNATURE: データが有効であるかどうかを確認するために使用する署名。

ADDRESS: イベントに関連付けられたクライアント システムの IP アドレス。

監査イベント パラメータ テーブル (SPSSAUDIT_PARAMETERS)

SERIAL: イベントにパラメータを関連付ける SPSSAUDIT_EVENTS テーブルへの外部キー。

NAME: パラメータの説明的な名前。たとえば、JobExecutionID、JobID、JobStepID、JobName、JobStepName などがあります。

VALUE: 名前付きのパラメータの値。

列のデータ タイプや NULL 値を許容するかどうかなど、イベントテーブルのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用します。

監査ビュー

次は、リポジトリのインストール時にデフォルトでデータベースに作成される監査ビューです。ビューのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用します。監査データベース オブジェクトを実行するには、ビューに対して SQL クエリーを実行します。リポジトリ データベースには、監査ビューをサポートするために使用する他のビューも多数あります。これらのサポートビューは、レポート作成を対象としていません。

監査 (SPSSPLAT_V_AUDIT)

監査ビューには、ファイル バージョン ビューからの監査情報が含まれます。このビューには、全イベントのすべての監査パラメータが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

AUDITSERIALNUMBER : イベントの一意の識別子。この番号を基に、イベントが生成された順序を判定できます。

AUDITTIMESTAMP : イベントを生成したコンポーネントによって設定される監査のタイムスタンプ (イベントが作成された日付)。

AUDITCOMPONENT : イベントを作成した監査対象のコンポーネント名またはサブシステム名。 `com.spss.<component>` の形式で示されます。

AUDITCATEGORY : 監査対象のイベントのカテゴリ。

MIMETYPE : 監査対象のオブジェクトの MIME タイプ。

AUDITTITLE : 監査対象のカテゴリまたはオブジェクト名。

AUDITPRINCIPAL : 監査対象のオブジェクトのプリンシパル ユーザー。

AUDITRESOURCE : 監査対象のコンテンツ ホスト。コンテンツ リポジトリ リソース ID などがあります。

AUDITDETAILS : コンポーネントで定義されたイベントに関する追加情報を示す文字列。たとえば、ラベル変更前のラベル、メタデータ変更前のメタデータ、名前変更前の名前などです。

ADDRESS : イベントに関連付けられたクライアント システムの IP アドレス。

AUDITPARAMETERNAME : 監査イベントの拡張パラメータ。たとえば、`JobStepExecutionID`、`JobExecutionID`、`JobID` などがあります。

AUDITPARAMETERVALUE : 監査イベントの拡張パラメータ値。たとえば、ID 値などがあります。

AUDITRESOURCEID : イベントに関連付けられているリソースのリポジトリ ID。ファイルバージョン (`SPSSPLAT_V_FILEVERSION`) ビュー内のファイルまたはジョブ ID に対する外部キーです。

AUDITMARKER : イベントに関連付けられているリソース バージョン。ファイルバージョン (`SPSSPLAT_V_FILEVERSION`) ビュー内のファイルまたはジョブ バージョン マーカーに対する外部キーです。

カスタム プロパティ (SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY)

カスタム プロパティ ビューには、ファイル バージョン ビューの行に関するファイル カスタム プロパティ情報が表示されます。

PROPERTYNAME : カスタム プロパティの名前。

PROPERTYVALUE : カスタム プロパティの値。

FILEID : このプロパティが適用される、ファイル バージョン ビュー内のファイルまたはジョブに対する外部キー。

ファイル バージョン (SPSSPLAT_V_FILEVERSION)

ファイル バージョン ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリーム、IBM® SPSS® Statistics シンタックス ファイル、SAS シンタックス ファイルなど、リポジトリ オブジェクトに関するファイルおよびバージョン情報が表示されます。このビューには、すべてのファイル、フォルダ、またはジョブの全バージョンが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

FILEID : ファイルの一意の識別子。

VERSION: ファイルのバージョン。

FILENAME : ファイルの名前。

VERSIONMARKER : ファイル バージョンのバージョン マーカー。

VERSIONLABEL : ファイル バージョンのバージョン ラベル。

FILEPATH : ファイルへのパス。

MIMETYPE : ファイルの MIME タイプ。

AUTHOR: ファイルの著者 (ユーザーにより指定)。

DESCRIPTION: ファイルの説明。

FILECREATEDDATE : ファイルが作成された日時。

FILECREATEDBY : ファイルを作成したユーザー。

FILELASTMODIFIEDDATE : ファイルが最後に更新された日時。

FILELASTMODIFIEDBY : ファイルを最後に変更したユーザー。

VERSIONCREATEDDATE : ファイル バージョンが作成された日時。

VERSIONCREATEDBY : ファイルのバージョンを作成したユーザー。

VERSIONLASTMODIFIEDDATE : ファイル バージョンが最後に更新された日時。

VERSIONLASTMODIFIEDBY : バージョンを最後に変更したユーザー。

ジョブ履歴 (SPSSPLAT_V_JOBHISTORY)

ジョブ履歴ビューには、ジョブ ステップ実行に関する情報が表示されます。このビューには、全ジョブの全ジョブ ステップに関するすべての実行が 1 行につき 1 つずつ含まれます。

EXECUTIONID : 実行の一意の識別子。

JOBID : ファイルバージョン ビュー内のジョブ (FILEID) への外部キー。

JOBVERSION : ファイルバージョン ビュー内のジョブ バージョンへの外部キー。

JOBSTEPID : ジョブ ステップ ビュー内のジョブ ステップへの外部キー。

JOBSTEPEXECUTIONSTATUS : ジョブ ステップの成功や失敗を表すステータス。

JOBSTEPEXECUTIONSTARTED : ジョブ ステップの開始時刻。

JOBSTEPEXECUTIONENDED : ジョブ ステップの終了時刻。

JOBSTEPEXECUTIONRUNTIME : ジョブ ステップの合計実行時間。

JOBSTEPERRORLOG : ジョブ ステップのエラー ログ ファイルの ID。

JOBEXECUTIONSTATUS : ジョブの成功や失敗を表すステータス。
JOBEXECUTIONSTATUS で返される値を次に示します。

- Null: 不明
- 0: 失敗
- 1: 成功
- 2: キュー格納済み
- 3: 実行中
- 4: 終了
- 5: カスケード
- 6: エラー
- 7: カスケード エラー
- 8: キャンセル中
- 9: キャンセル済み
- 10: キャンセル待機
- 11: カスケード キャンセル済み
- 12: 参加中

JOBEXECUTIONSTARTED : ジョブの開始時刻。

JOBEXECUTIONENDED : ジョブの終了時刻。

JOBEXECUTIONRUNTIME : ジョブの合計実行時間。

JOBCLUSTERQUEUEDDATETIME : ジョブがキューに配置された時刻。ジョブのキュー格納時刻は、送信時刻よりわずかに遅くなります。

JOBCLUSTERCOMPLETIONCODE : ジョブタイプ別のジョブステータスに対応する整数値。ゼロ (0) は、すべてのタイプのジョブが成功したことを示します。

JOBCLUSTERAPPLICATIONSTATUS : ジョブタイプ別のジョブステータスに対応する文字列値。

JOBPROCESSID : ジョブタイプ別のシステムプロセスに対応する ID。たとえば、実行可能ファイルを実行中の場合は、オペレーティングシステムのプロセス ID。

JOBEXECUTEDPARAMETERS : 現在、このフィールドは使用されていません。

JOBNOTIFICATIONENABLED : 通知がジョブで有効になっているかどうかを示します。

ジョブ ステップ (SPSSPLAT_V_JOBSTEP)

ジョブ ステップ ビューには、ジョブのジョブ ステップに関する情報が含まれます。このビューには、全ジョブの全バージョンに関するすべてのジョブ ステップが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

JOBSTEPID : ジョブ ステップの一意の識別子。

JOBSTEPNAME : ジョブ ステップの名前。

JOBID : このジョブ ステップが含まれている、ファイルバージョン ビュー内のジョブ (FILEID) に対する外部キー。

JOBVERSION : このジョブ ステップが含まれている、ファイルバージョン ビュー内のジョブ バージョンに対する外部キー。

JOBSTEPTYPE : ジョブ ステップのタイプ。現在、ClementineStreamWork、SPSSSyntaxWork、SASSyntaxWork、ExecutableContentWork (全般ワーク)、WindowsCommandWork などのタイプがあります。関連する DOS コマンドは、WindowsCommandWork または ExecutableContentWork のどちらかのタイプになります。

REFERENCEDFILEID : このジョブ ステップにより参照されるファイルの ID (該当する場合)。たとえば、IBM® SPSS® Modeler ストリーム、IBM® SPSS® Statistics シンタックス ファイル、SAS シンタックス ファイルなどがあります。

REFERENCEDFILELABEL : このジョブ ステップにより参照されるファイルのラベル (該当する場合)。

スケジュール (SPSSPLAT_V_SCHEDULE)

スケジュール ビューには、ファイル バージョン ビュー内のジョブに関連付けられているスケジュール情報が表示されます。このビューには、すべてのスケジュールが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

JOBID : ファイル バージョン ビュー内のジョブ (FILEID) への外部キー。

JOBVERSION : ファイル バージョン ビュー内のジョブ バージョンへの外部キー。これはこの時点で実行されるジョブ バージョンです。ジョブ ラベルを削除した場合 (または、新しいジョブ バージョンを保存し、その最新のジョブを実行するようにスケジュールを設定した場合)、ジョブ バージョンは変更されます。

SCHEDULEDFREQUENCY : スケジュールの繰り返し頻度は、スケジュールの期間と時間単位に関連します。たとえば、頻度を日単位、期間を 1 に設定した場合、スケジュールされる曜日は日曜日から土曜日までの任意の曜日になり、月単位でスケジュールされる日付は 0 になります。

SCHEDULEDINTERVAL : スケジュールの間隔を表す数です。この意味は SCHEDULEDFREQUENCY の値によって変わります。たとえば、頻度が週単位の場合に期間を 4 に設定すると、4 週ごとに実行されます。

SCHEDULEDDAYOFMONTH : 月単位のスケジュールで指定する日付。

SCHEDULEDDAYOFWEEK : 週単位のスケジュールで指定する曜日。

SCHEDULEDTIME : ジョブの開始予定時刻。

SCHEDULESTARTDATE : 繰り返しスケジュール (日単位、週単位、月単位) の開始日、または他のスケジュールの実行日。

SCHEDULEENDDATE : 繰り返しスケジュール (日単位、週単位、月単位) の繰り返し終了日。他のスケジュール タイプの場合、この列は NULL になります。また、リストに示されているスケジュール タイプでも、リストに示された日付でトリガを終了する場合には、NULL になります。

NEXTSCHEDULED TIME : スケジュールの次の開始日。スケジュールが終了日を過ぎている場合、または 1 回限りのスケジュールの場合には、NULL になります。

SCHEDULEENABLED : 有効になっているスケジュール。

SCHEDULELABEL : スケジュールがトリガされるときに実行されるジョブのラベル。

SCHEDULELASTUPDATE : このスケジュールが最後に更新されたときの日付タイムスタンプ。

SCHEDULECREATOR : スケジュールを作成したユーザーのユーザー ID。

ストリーム属性値 (SPSSPLAT_V_STREAMATTRVALUE)

ストリーム属性値ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリームにおけるノードに関する属性情報が表示されます。このビューには、全ストリームにおける全属性のすべての許容値が 1 行につき 1 つずつ含まれます。

ATTRIBUTEID : 属性の一意の識別子。

ATTRIBUTENAME : 属性の名前。

NODEID : ストリーム ノード ビュー内のノードへの外部キー。

ATTRIBUTETYPE : 属性のタイプ。

ATTRIBUTE CATEGORICALVALUE : 複数の値を持つ属性に対する、属性の許容値。

NUMERICALUPPERBOUND : 数値属性で許容される上限値。

NUMERICALLOWERBOUND : 数値属性で許容される下限値。

ストリーム ノード (SPSSPLAT_V_STREAMNODE)

ストリーム ノード ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリームにおけるノードの情報が表示されます。このビューには、全ストリームの全バージョンのすべてのノードが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

NODEID : ストリームにおけるノードの一意の識別子。

STREAMID : このノードが含まれている、ファイル バージョン ビュー内のストリーム (FILEID) に対する外部キー。

STREAMVERSION : このノードが含まれている、ファイルバージョンビュー内のストリームバージョンに対する外部キー。

NODENAME : ストリーム内のノードの名前。

NODETYPE : ストリーム内のノードのタイプ。

NODELABEL : ストリーム内のノードのラベル。

ALGORITHMNAME : モデル作成ノードにおけるノードのアルゴリズム。

MININGFUNCTION : モデル作成ノードにおけるノードのデータマイニング機能。

IOFILENAME : FileInput ノードまたは FileOutput ノードにおける、ノードの入力ファイルまたは出力ファイル。

IODATABASETABLE : DatabaseInput ノードまたは DatabaseOutput ノードにおける、データベーステーブルの名前。

IODSN : DatabaseInput ノードまたは DatabaseOutput ノードにおける、ノードのデータソースの名前。

注 : このリリースでは、SPSSPLAT_V_STREAMNODE ビューの ioDSN 列は使用しません。この列には、すべてのレコードで NULL が含まれます。

スコアリング サービス ログギング

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services - Scoring サービスの操作をログ記録するデータベース機能も用意しています。次のデータベースオブジェクトを使用して、スコアリング サービス情報を保存します。

- 要求ログ テーブル
- データベース ビュー
- データベース スキーマ

スコアリング サービス ログギングは、次のようなりポジトリで使用できるすべてのデータベース管理システムでサポートされています。

- DB2
- MS SQL Server
- Oracle

注 : DB2 on IBM i は、スコアリング サービス ログギングに使用できません。

要求ログ テーブル

デフォルトでは、スコアリング サービスの要求情報が SPSSSCORE_LOG テーブルに格納されています。

スコアリング ログ テーブル (SPSSSCORE_LOG)

SERIAL:スコアリング サービス要求の一意の識別子。

STAMP:スコアリング サービス要求の日時。

INFO :スコアリング要求に関する追加情報 (XML 形式)。情報は、データベースで登録された XML スキーマにしたがって生成されます。スコアリング ログ ビューで、同じ情報を関連する形式で使用できます。

クリーンアップとメンテナンス

スコアリング サービス要求がログ記録されるにつれ、SPSSSCORE_LOG が非常に大きくなり、このテーブルからレコードを削除する必要がある場合があります。たとえば、管理者は次の SQL 分を実行して、2009 年 1 月 1 日より前の古いレコードを除外することができます。

```
DELETE FROM spssscore_log WHERE STAMP < '2009-01-01'
```

データベース ビュー

次のスコアリング ビューは、リポジトリのインストール時にデフォルトでデータベースに作成されます。SPSSSCORE_LOG テーブルの INFO 列に XML として保存された情報を、関連する形式で表示します。ビューのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用、または SQL クエリーを実行します。

スコアリング要求 (SPSSSCORE_V_LOG_HEADER)

このビューには、SPSSSCORE_LOG テーブルのスコアリング要求の行の 1 行が表示されます。

SERIAL:スコアリング要求の一意の識別子。

ADDRESS:スコアリング要求を開始するコンピュータの IP アドレス。たとえば、クラスタの負荷バランサーまたはプロキシ サーバーのアドレスなど、クライアントではなくサーバーのアドレスとなる場合があります。

HOSTNAME:スコアリング要求を開始するコンピュータの名前。コンピュータでスコアリング サービスを実行するサブレット コンテナがドメイン名システムの逆検索を許可していない場合、値はコンピュータの IP アドレスに対応します。ホスト名を指定できない場合、Null 値が使用されます。ホスト名の検索にあまりに時間がかかる場合、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で該当する設定オプションを使用し、ホスト名を検索しないようにシステム設定することによって、スコアリング サービスのパフォーマンスを改善できる場合があります。

PRINCIPAL:スコアリング要求と関連するユーザー名。この値が要求に指定されていない場合、情報はログされません。

STAMP:この列には、スコアリング サービス要求がログ記録した時間のタイムスタンプが表示されます。

MODEL_OBJECT_ID:スコアリング サービスで構成されたオブジェクトのリポジトリ ID。たとえば、IBM® SPSS® Modeler ストリームがスコアリングに構成された場合、これはストリームのリポジトリ ID です。

MODEL_VERSION_MARKER:スコアリングに構成された特定バージョンのリポジトリ オブジェクトの識別子。

CONFIGURATION_NAME:スコアリング サービス構成エントリの名前。スコアリング モデルが構成されると、名前が割り当てられます。

スコアリング要求入力 (SPSSSCORE_V_LOG_INPUT)

ビューには、スコア作成に使用されたモデル入力に関する情報が表示されます。SPSSSCORE_LOG テーブルと SPSSSCORE_V_LOG_HEADER ビューの1行に対し、SPSSSCORE_V_LOG_INPUT の複数行となります。SPSSSCORE_V_LOG_HEADER の各行には、入力値が1つずつ表示されます。

SERIAL:スコアリング要求行の一意の識別子。

INPUT_TABLE:入力ソースが IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View の場合、これは Enterprise View テーブル名です。

INPUT_NAME:入力フィールドの名前。入力ソースが Enterprise View の場合、これは Enterprise View 列名です。

INPUT_VALUE:入力値。

INPUT_TYPE:入力データ型。次のデータ型を使用できます。

- date
- daytime
- decimal
- double
- float
- integer
- long
- string
- timestamp

スコアリング要求コンテキスト データ (SPSSSCORE_V_LOG_CONTEXT_INPUT)

このビューには、スコアリング サービスに渡され、Enterprise View データプロバイダ定義 - リアルタイム のコンテキスト データ ソースとして使用されたデータに関する情報が表示されます。SPSSSCORE_V_LOG_HEADER ビューの1行に対し、SPSSSCORE_V_LOG_CONTEXT_INPUT ビューの複数行となります。

SERIAL:スコアリング要求行の一意の識別子。

CONTEXT_TABLE:コンテキスト データ ソースで使用されるテーブルの名前。

CONTEXT_ROW:1 から始まるコンテキスト データの行番号。

CONTEXT_NAME:コンテキスト データ ソースの列名に対応する入力フィールドの名前。

CONTEXT_VALUE:入力値。

スコアリング要求出力 (SPSSSCORE_V_LOG_OUTPUT)

SPSSSCORE_V_LOG_OUTPUT ビューを使用して、スコアリング サービスの出力をログ記録します。SPSSSCORE_V_LOG_HEADER ビューの1行に対し、SPSSSCORE_V_LOG_OUTPUT ビューの複数行となります。スコアリング サービスには、複数の出力を提供する機能があります。各出力は、複数の値で構成される場合があります。たとえば、スコアリング サービスには、2つの推奨事項 (2つの出力) が指定されているとします。これらの推奨事項はそれぞれ、1 から始まる一意の行番号が割り当てられます。各推奨事項に対して、複数の出力値がある場合があります。

SERIAL:スコアリング要求行の一意の識別子。

OUTPUT_ROW:1 から始まるコンテキスト データの行番号。

OUTPUT_NAME: コンテキスト データ ソースの列名に対応する出力フィールドの名前 (属性名)。

OUTPUT_VALUE: 出力値。

スコアリング要求メトリック (SPSSSCORE_V_LOG_METRIC)

SPSSSCORE_V_LOG_METRIC ビューを使用して、スコアリング要求を処理する時間など、スコアリング サービスの出力メトリックをログ記録します。SPSSSCORE_V_LOG_HEADER ビューの 1 行に対し、SPSSSCORE_V_LOG_METRIC ビューの複数行となります。

SERIAL: スコアリング要求行の一意の識別子。

METRIC_NAME: メトリック フィールドの名前。

METRIC_VALUE: メトリック値。

スコアリング要求プロパティ (SPSSSCORE_V_LOG_PROPERTY)

SPSSSCORE_V_LOG_PROPERTY ビューを使用して、要求の処理に使用するプロパティをログ記録します。SPSSSCORE_V_LOG_HEADER ビューの 1 行に対し、SPSSSCORE_V_LOG_PROPERTY ビューの複数行となります。ログ記録できるプロパティは、選択したスコア プロバイダによって異なります。

SERIAL: スコアリング要求行の一意の識別子。

METRIC_NAME: プロパティの名前。

OUTPUT_VALUE: プロパティ値。

監査クエリーの例

監査ビューに対して実行する SQL クエリーの例を次に示します。一部の SQL の機能は、Microsoft SQL Server 固有の機能であり、他のデータベースプラットフォームでは無効になる場合があることに注意してください。

ユーザー 'jsmith' のログイン成功

```
select AUDITTIMESTAMP as "Login date",  
ADDRESS as "Machine address"  
from SPSSPLAT_V_AUDIT  
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'  
and AUDITCATEGORY = 'security/locAuthen'  
and AUDITTITLE = 'jsmith'  
order by 1 desc
```

全ユーザーのログイン失敗

```
select AUDITTITLE as "Username",
AUDITTIMESTAMP as "Login date",
ADDRESS as "Machine address"
from
SPSSPLAT_V_AUDIT
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'
and AUDITCATEGORY = 'security/locNotAuthen'
order by 1 asc, 2 desc
```

先月中のユーザーごとのログイン成功回数

```
select AUDITTITLE as "Username",
COUNT(*) as "Successful logins"
from
SPSSPLAT_V_AUDIT
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'
and AUDITCATEGORY = 'security/locAuthen'
and AUDITTIMESTAMP >= DATEADD(month, -1, GETDATE())
group by AUDITTITLE
order by 2 desc
```

カスタム プロパティ 'Region' が指定されているすべてのリポジトリ リソース

```
select V1.FILEPATH + V1.FILENAME as "Resource", V2.PROPERTYNAME + ' = ' + V2.PROPERTYVALUE as "Property/Value"
from SPSSPLAT_V_FILEINFO V1,
SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY V2
where V1.FILEID = V2.FILEID
and V2.PROPERTYNAME = 'Region'
```

カスタム プロパティ値 'Asia-Pacific' が指定されているすべてのリポジトリ リソース

```
select V1.FILEPATH + V1.FILENAME as "Resource", V2.PROPERTYNAME + ' = ' + V2.PROPERTYVALUE as "Property/Value"
from SPSSPLAT_V_FILEINFO V1,
SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY V2
where V1.FILEID = V2.FILEID
and V2.PROPERTYVALUE = 'Asia-Pacific'
```

ユーザー 'jsmith' によって変更された (新しいバージョンが作成された) すべてのリポジトリ リソース

```
select FILEPATH + '/' + FILENAME as "Resource",
VERSION as "Version",
VERSIONCREATEDDATE as "Modified date"
from SPSSPLAT_V_FILEVERSION
where VERSIONCREATEDBY = 'jsmith'
```

ファイル /Modeler/Base_Module/drugplot.str を変更した全ユーザー

```
select VERSION as "Version",  
VERSIONCREATEDBY as "Username",  
VERSIONCREATEDDATE as "Created date"  
from SPSSPLAT_V_FILEVERSION  
where FILEPATH + FILENAME = '/Modeler/Base_Module/drugplot'
```

トラブルシューティング

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository をインストールして使用する場合、なんらかのエラー メッセージや状況が発生する場合があります。これらのエラーを解決して正常に機能するシステムを設定するための方法と、その方法が対象とする問題点を、次に示します。

- **リポジトリ**: サポートされるサーバー プラットフォームでアプリケーションをインストールし、起動する際の一般的な問題。
- **Solaris 9**: Sun の UNIX オペレーティング システム上のリポジトリに関連する既知の問題。
- **HP-UX**: HP の UNIX オペレーティング システム上のリポジトリに関連する既知の問題。
- **DB2 for IBM i**: IBM i で実行する DB2 データベースとのやり取りで発生する状況やエラー メッセージ。
- **Oracle 10g および 11g**: Oracle 10g および 11g データベースとのやり取りで発生する状況やエラー メッセージ。
- **JBoss**: リポジトリを実行している JBoss アプリケーション サーバー。
- **Oracle WebLogic**: リポジトリを実行している WebLogic アプリケーション サーバー。
- **WebSphere**: リポジトリを実行している WebSphere アプリケーション サーバー。

どのような場合でも、リポジトリのログ ファイルを参照して、問題の原因を明確にすることが推奨されます。

リポジトリのトラブルシューティング

リポジトリを起動および展開するときにパフォーマンス ボトルネックと CPU 使用量に関する問題をどのように回避できますか。

システム構成によって異なります。インストールされているウイルス対策ソフトウェアやスパイウェア対策ソフトウェアがアプリケーション コンポーネントの「ディープ スキャン」を実行するように設定されている場合があります。このようなサードパーティのアプリケーションは、特定の時

間にスキャンを実行するように再設定できます。また、インストール時にオフにして、後で手動で再起動することもできます。

さらに、より厳密なサーバー側のファイアウォール設定により、起動時のパフォーマンスに悪影響が及んだり、アクセスが不可能になる場合があります。

サービスを起動したときにシステムのパフォーマンスが大幅に低下する場合は、不必要なプロセスをすべて無効にした後でリポジトリを再起動してください。

管理インターフェイスにログインした後、アクセスしているデータベースを確認するにはどうすればよいですか。

データベース接続情報は、Web インターフェイスからダウンロードし、アクセスできます。

1. 認証後、ナビゲーション リストのオプションから [バージョン情報] をクリックします。[バージョン情報] ページが表示されます。
2. ページ下部の [バージョンとシステムの詳細をダウンロード] をクリックします。プロンプトが表示されたら、ファイルをディスクに保存します。
3. テキスト エディタでファイルを開き「Database Details」を探します。このセクションには、名前、バージョン、テーブル一覧など、使用するデータベースの詳細情報が含まれています。

アプリケーションで java.lang.OutOfMemoryError: PermGen space 例外がスローされました。

このエラーは、多数のクラスが使用されることによって、JVM で永久ジェネレーション ヒープの領域を使い果たした場合に発生します。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services または設定、保存および復元、またはパッケージ マネージャなどのユーティリティ アプリケーションを実行する場合、このエラーが発生する場合があります。システムのメモリ設定によって、アプリケーション サーバーおよびユーティリティ アプリケーションの開始スクリプトの PermSize JVM パラメータで指定された値を大きくしたり小さくしたりします。アプリケーション サーバーおよびユーティリティが消費するメモリの合計がシステムの空きメモリより大幅に小さい場合、メモリ不足の例外が発生し、値を大きくする必要があります。アプリケーション サーバーおよびユーティリティが消費するメモリの合計がシステムの空きメモリより大きい場合、永続ジェネレーション ヒープ サイズを小さくします。

たとえば、JBoss がインストールされている環境で、ラッパー サービスが使用できる永久ジェネレーション ヒープのサイズを増やすには、<JBoss のインストール ディレクトリ>/wrapper/conf/wrapper.conf で変更できます。

```
wrapper.java.additional.1=-Dprogram.name=run.bat -XX:PermSize=128m.
```

その他のアプリケーション サーバーで、永久ジェネレーション ヒープ サイズを増加する方法については、該当するアプリケーション サーバーのベンダーから提供されるドキュメンテーションを参照してください。

ユーティリティ実行時にメモリ エラーが発生した場合、これらのユーティリティの起動スクリプトを変更して、JVM メモリ パラメータに小さい値を設定します。たとえば、packagemanager.sh/packagemanager.bat の Java コマンドは次のとおりです。

```
java -Xms128m -Xmx1024m -XX:PermSize=512m -classpath $CP com.spss.setup.packagemanager.ui.PlatformPackageTool $@
```

次のように変更できます。

```
java -Xms128m -Xmx512m -XX:PermSize=256m -classpath $CP com.spss.setup.packagemanager.ui.PlatformPackageTool $@
```

JVM パラメータを追加して、メモリーの割り当ておよびガーベジ コレクションを調整することにより、メモリー不足のエラーを防止できます。次に例を示します。

```
-XX:+CMSPermGenSweepingEnabled -XX:+CMSClassUnloadingEnabled
```

BIRT Report Designer for IBM SPSS レポートが IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal で実行されている場合に、レポートのデータソースにアクセスするための資格情報がアプリケーションで認証されず、ログイン画面が繰り返し表示されます。

- レポートのデータ ソースおよび資格情報が正しく定義されていることを確認する。詳細は、『IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager ユーザー ガイド』の該当するセクションを参照してください。
- レポートのデータ ソースが JDBC ベースの場合、適切なドライバがリポジトリとともにインストールされていることを確認する。オペレーティング プラットフォームに固有のドライバ パス情報については、該当するインストール手順を参照してください。

UNIX システム上のリポジトリで処理される SAS シンタックスのジョブは、無効なライブラリ名によるデータベース接続エラー（「エラー: LIBNAME ステートメントのエラー」）を生成して失敗します。

- 共有ライブラリ パスの環境変数（Solaris では LD_LIBRARY_PATH、HP-UX では SHLIB_PATH、AIX では LIBPATH）が適切な値に設定されていることを確認します。

キーストア ファイルがなくなった場合のリポジトリの復元方法

キーストア ファイルには、データベース アクセスのマスタ パスワードなど、リポジトリが使用する暗号化パスワードの暗号化に使用するキーが含まれます。キーストア ファイルがなくなった場合、システムが使用できなくなります。キーストアのバックアップが使用できる場合、元の場所に復元できます。キーストアの元のパスがわからない場合、<リポジトリ インストール ディレクトリ>/platform/setupinfo.xml の keystoreSecurity 要素の keystorePath プロパティを検索できます。

キーストア ファイルがなくなり、バックアップも使用できない場合、<リポジトリ インストール ディレクトリ>/setup のセットアップ ユーティリティを再実行し、既存のリポジトリ データベースを示して、システムを再インストールする必要があります。外部ディレクトリ サービスのパスワードや定義された資格情報など、システム内に存在するすべてのパスワードは、手動で再入力する必要があります。

リポジトリで実行すると、指定された資格情報を使用した DB2 IBM i V6R1 データベースに対する BIRT レポートは失敗します。

prompt=true パラメータを JDBC 接続 URL に追加します。

```
Driver Name: com.ibm.as400.access.AS400JDBCdriver
Driver URL: jdbc:as400://myServer/B101E31E;prompt=false
```

Windows 以外のリポジトリ インストールでスコアリングを構成している場合の「新しいスコアリング構成の詳細の作成に失敗」エラー

スコアリング構成ダイアログを Deployment Manager で開くと、「新しいスコアリング構成の詳細の作成に失敗しました」というエラーメッセージが表示されます。<リポジトリ インストール ディレクトリ>/components/modeler/modelerserver ファイルのアクセス許可を execute に変更すると、この問題は解決します。例を次に示します。

```
cd /usr/CDS/components/modeler/modelerserver
sudo chmod +x modelerserver
```

PDF ファイルとして生成されたレポート出力に各国のキャラクタ セットが正しく表示されない

特定の UNIX システムでは、デフォルトの JVM フォント設定が、アジア言語の文字など、すべての国のキャラクタ セットに適してはなりません。こうした場合、フォント設定ファイルを使用して、デフォルトの JVM フォントを指定する必要があります。Java フォント設定ファイルの詳細は、Sun のマニュアルを参照してください。

Solaris

JBoss および Solaris 9 ではリポジトリを起動できません。

JBoss および Solaris 9 でリポジトリを起動しようとする、 “ld. so. 1: wrapper: fatal: libm. so. 2: open failed: No such file..” というエラーが発生します。

この問題を解決するには、シンボル値リンク /usr/lib/64/libm. so. 2 を /usr/lib/64/libm. so. 1 に作成します。

```
ln -s /usr/lib/64/libm.so.1 /usr/lib/64/libm.so.2
```

HP-UX

HP-UX でリポジトリを NFS とともに実行した場合のインポートの失敗

HP-UX で NFS とともに実行するリポジトリにリソースをインポートすると、次の例外エラーが発生します。

```
java.lang.RuntimeException: The database is already in use by another process: org.hsqldb.persist.NIOLockFile@3ffdc36b[file  
=/qa/projects/pes/HPUX/appserv/boa11g/user_projects/domains/Domain41B179a/cds_transfer_root/  
0a0b0ad397fef2c500000126b4ca991881ab/0a0b0ad397fef2c500000126b4ca991881ad_transfer_database.lck,  
exists=true, locked=false, valid=false, fl =null];
```

問題を解決するには、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、[リポジトリ] → [リソース転送ロックアップ テーブル] 構成オプションの値を **MEMORY** に設定します。詳細は、『IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 管理マニュアル』を参照してください。

Oracle Database

ユーザーとテーブルスペースはどのように作成しますか。

Oracle データベースから spssplat ユーザーとテーブルスペースを消去して再設定するには、次の一連のコマンドを実行します。

```
drop user spssplat cascade;  
CREATE USER spssplat IDENTIFIED BY spssplat  
DEFAULT TABLESPACE SPSSPLAT TEMPORARY TABLESPACE TEMP  
QUOTA UNLIMITED ON SPSSPLAT;  
@$ORACLE_HOME/sqlplus/admin/pupbld;  
GRANT CONNECT, RESOURCE, UNLIMITED TABLESPACE TO spssplat;
```

JBoss

ユーザーがアイドル状態を維持できる時間を調整するために、セッション タイムアウト値を構成するにはどのようにしますか。

ユーザーがリポジトリにログインした後、セッションが終了され、ユーザーの再認証が必要になるまでに、一定期間非アクティブな状態を継続することが許可されています。この値を増減するには、次の手順を行います。

1. インストール ディレクトリから
`¥JBoss¥server¥default¥deploy¥jbossweb-tomcat50. sar¥`
に移動します。
2. テキスト エディタで `web.xml` を開きます。
3. 「Default Session Configuration」のセクションを見つけて、`<session-timeout>` の値を変更します。
4. アプリケーションを停止し、再起動します。

注：このファイルは、アプリケーションの展開時に処理されます。構成の変更はサーバーが再起動するまで有効になりません。

使用している JBoss のバージョンがどのポートで実行されているかは、どのように判定しますか。

JBoss Application Server の HTTP ポートは次のファイルで定義されています。

```
jboss-3.2.7¥server¥default¥deploy¥jbossweb-tomcat50. sar¥server.xml
```

属性は次のとおりです。

```
/Server/Service/Connector@port
```

注：JBoss のリリースによって、パス内のバージョン番号が異なる場合があります。

JBoss のリポジトリ FIPS 140-2 準拠にはどのような追加設定が必要ですか？

FIPS 140-2 準拠モードの JBoss で実行する場合にリポジトリが正しく機能するために、`{URIEncoding="UTF-8"}` 属性を HTTPS コネクタに指定する必要があります。

また、コマンドラインで `netstat` コマンドを使用して、使用中のアプリケーションとポートを表示することもできます。

WebLogic

レポートの出力を含む添付ファイルにアクセスしようとすると、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal で「IOException: リソースはすでに削除されています」がスローされます。

Sun JRE ではなく JRockit を使用する WebLogic のアプリケーション サーバーでリポジトリを実行すると、例外が発生することがあります。例外が発生した場合は、Sun JRE を使用するように WebLogic を再構成します。詳細は、WebLogic のドキュメントを参照してください。

リポジトリを Solaris 10 で WebLogic 10 とともに実行する場合、カスケード パラメータがレポート内で正しく表示されません。

-Djava.awt.headless=true 開始引数を、アプリケーション サーバーの Java 環境に追加する必要があります。

Red Hat v5.4 のリポジトリ セットアップが失敗し、「開いているファイルが多すぎます」のメッセージが表示されます。

ユーザーの使用ファイル制限がデフォルトの設定を超えている場合、このエラーが発生します。次のコマンドを使用して、ユーザーの使用ファイル制限をチェックできます。

```
ulimit -n
```

次の行を追加するなど、/etc/security/limits.conf を編集して、ユーザーの使用ファイル制限の値を大きくすることができます。

```
@username - nofile 2048
```

新しい制限を有効にするには、システムの再起動が必要です。

通知メッセージが RSS リーダーに送信されない

このエラーはドメイン レベルの基本 HTTP 認証の失敗によって発生します。ドメインの基本 HTTP 認証を無効にして修正できます。<enforce-valid-basic-auth-credentials> 要素を、<security-configuration> 要素内にあるドメインの config.xml に追加し、値を false に設定します。

```
...
```

```
<enforce-valid-basic-auth-credentials>>false</enforce-valid-basic-auth-credentials>
```

```
</security-configuration>
```

WebSphere

WebSphere アプリケーション サーバーを使用するリポジトリへのパッケージ インストール (Package Manager を使用) の実行中にエラーが発生します。

最新のベンダー パッチがアプリケーション サーバーに適用されていることを確認してください。

サーバー ログは、例外 `com.ibm.crypto.provider.AESCipher.engineGetKeySize(Unknown Source)` などの暗号化エラーを報告します。

エラーが WebSphere 6.1 Service Pack 19 で、そして不正なパスワード値で発生します。エラーを修正するには、`platform.keystore.password` の値を

<リポジトリ インストール ディレクトリ>/platform/setupinfo.xml

から

<WEBSPPHERE_HOME>/profiles/AppSrv01/config/cells/xi-wyueNode01Cell/nodes/xi-wyueNode01/servers/<server name>/server.xml にコピーします。

WebSphere 6.1 Service Pack 23 にアップグレードすると、暗号化の問題が解決する場合があります。

“CWSIS1535E: The messaging engine’s unique id does not match that found in the data store” エラー

リポジトリを停止して、SIB 接頭辞で始まる名前のリポジトリ データベース テーブルを削除することによって、エラーを修正できます。リポジトリを再起動すると、テーブルが再作成されます。現在保存されている永続メッセージを保持する必要がない場合にのみ、この解決策が適用されます。WebSphere JMS のトラブルシューティングの詳細は、<http://www.redbooks.ibm.com/redpapers/pdfs/redp4076.pdf> を参照してください。

WebSphere クラスタで IBM SPSS Statistics データ ソースに対して BIRT レポートを実行する場合のリモード例外 (IBM SPSS Statistics データ ファイル JDBC ドライバを使用)

クラスタの各ノードの WebSphere 管理コンソールを使用して、`Dcom.ibm.ws.classloader.encodeResourceURLs=true` を一般的な JVM 引数に追加すると、問題が解決する場合があります。

インストールまたはセットアップ操作を実行すると、操作が失敗し、ログは 1 つまたは複数のネイティブのライブラリ ファイル (.dll, .so, .sl) にアクセスできなかったことを示します。

この問題は通常、スコアリング設定がアクティブで現在のライブラリを使用している場合、スコアリング プロバイダ パッケージでネイティブ ライブラリを更新使用する場合に発生します。次の状況で発生する場合があります。

- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Package Manager を使用して、すでにあるバージョンのスコアリング アダプタがインストールされているリポジトリにスコアリング アダプタをインストールする場合
- スコアリング アダプタを含むパッチをあるバージョンのスコアリング アダプタがインストールされているシステムに適用する場合
- スコアリング アダプタが 4.0 以降のリポジトリにインストールされている場合、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Setup を 4.0 以降のリポジトリで再実行する場合。復元後にセットアップ ツールを再実行することも含まれます。

この問題を回避するには、スコアリング ライブラリがインストールまたはセットアップアクションの前に実行されていないことを確認します。基本的な手順は次のとおりです。

1. WebSphere 管理コンソールを開き、リポジトリ サーバーの展開アプリケーションに移動します。
2. scoring および scoring-ejb アプリケーションの自動起動オプションを無効にします。
3. リポジトリがバージョン 4.0 の場合、admin、security、および security-ws アプリケーションの自動起動オプションを無効にします。
4. 変更を保存して、WebSphere アプリケーション サーバーを再起動します。
5. 該当するインストールまたはセットアップ操作を実行します。
6. WebSphere 管理コンソールに戻り、以前無効にしたアプリケーションの自動起動オプションを有効にします。
7. 変更を保存して、WebSphere アプリケーション サーバーを再起動します。

Nativestore スキーマの参照

nativestore.xsd スキーマは、Deployment Manager にインポートされるユーザーおよびグループを含む XML ファイルの構造を定義します。また、このファイルで削除する必要がある廃止されたユーザーおよびグループを指定することができます。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
  <user userID="lsanborn" password="ls7725" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
  <user userID="lalger" password="la4011" encrypted="false">
    <group>analyst</group>
  </user>
  <user userID="cjones" password="cj2683" encrypted="false">
    <group>analyst</group>
  </user>
  <obsolete>
    <user>mmonroe</user>
    <user>bgmurphy</user>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

nativestore 要素

子要素：[user](#)、[obsolete](#)

ローカル ユーザーおよびローカル グループを Deployment Manager にインポートする Root 要素。

user 要素

親要素 : [nativestore](#)

子要素 : [group](#)、[role](#)

追加または更新されるユーザー。

テーブル B-1
user 要素の属性

名前	種類	使用	Default	説明
userID	string	必須の	デフォルト値ではない	システム ログインに使用されるユーザー ID。
password	string	オプション	デフォルト値ではない	通常、プレーンテキストのパスワード。encrypted 属性が true の場合、このパスワードは暗号化されます。通常、インポート時に暗号化されたパスワードを使用することは、実用的ではありません。サーバーからのエクスポート時にパスワードは暗号化されますが、Deployment Manager ユーザー インターフェイスでは使用されません。
暗号化	boolean	オプション	false	パスワードがプレーンテキストであるか暗号化されているかを示します。暗号化されたパスワードはネイティブストアからエクスポートされます (暗号化は一元的で、ユーザーのパスワードを再作成することはできません)。別のシステムからインポートする場合、パスワードはプレーンテキストである必要があります。encrypted 属性は通常省略されます。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
<user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
  <group>sales</group>
</user>
</nativestore>
```

group 要素

データ型 : 文字列

親要素 : [user](#)

ユーザーに関連付けられたグループ。グループが存在しない場合は自動的に作成されます。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
</nativestore>
```

role 要素

データ型： 文字列

親要素： [user](#)

ユーザーに関連付けられたロール。ロールが存在しない場合は自動的に追加されません。

obsolete 要素

親要素： [nativestore](#)

子要素： [user](#)、[group](#)

削除されるグループまたはユーザー。「置換モード」でロードされる場合があります。その場合、自動的にすべてのグループおよび管理者以外のユーザーは削除されます。置換モードでは、この要素は影響を受けません。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <廃止された>
    <user>mmonroe</user>
    <user>bgmurphy</user>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

user 要素

データ型： 文字列

親要素 : [obsolete](#)

削除されるユーザー ID。管理権限を持つユーザーは削除できません。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <obsolete>
    <user>mmonroe</user>
  </obsolete>
</nativestore>
```

group 要素

データ型 : 文字列

親要素 : [obsolete](#)

削除されるグループ名。

XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <obsolete>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

Notices

Licensed Materials – Property of SPSS Inc., an IBM Company. © Copyright SPSS Inc. 2004, 2010..

Patent No. 7,023,453

The following paragraph does not apply to the United Kingdom or any other country where such provisions are inconsistent with local law: SPSS INC., AN IBM COMPANY, PROVIDES THIS PUBLICATION “AS IS” WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF NON-INFRINGEMENT, MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. Some states do not allow disclaimer of express or implied warranties in certain transactions, therefore, this statement may not apply to you.

This information could include technical inaccuracies or typographical errors. Changes are periodically made to the information herein; these changes will be incorporated in new editions of the publication. SPSS Inc. may make improvements and/or changes in the product(s) and/or the program(s) described in this publication at any time without notice.

Any references in this information to non-SPSS and non-IBM Web sites are provided for convenience only and do not in any manner serve as an endorsement of those Web sites. The materials at those Web sites are not part of the materials for this SPSS Inc. product and use of those Web sites is at your own risk.

When you send information to IBM or SPSS, you grant IBM and SPSS a nonexclusive right to use or distribute the information in any way it believes appropriate without incurring any obligation to you.

Information concerning non-SPSS products was obtained from the suppliers of those products, their published announcements or other publicly available sources. SPSS has not tested those products and cannot confirm the accuracy of performance, compatibility or any other claims related to non-SPSS products. Questions on the capabilities of non-SPSS products should be addressed to the suppliers of those products.

This information contains examples of data and reports used in daily business operations. To illustrate them as completely as possible, the examples include the names of individuals, companies, brands, and products. All of these names are fictitious and any similarity to the names and addresses used by an actual business enterprise is entirely coincidental.

COPYRIGHT LICENSE:

This information contains sample application programs in source language, which illustrate programming techniques on various operating platforms. You may copy, modify, and distribute these sample programs in any form without payment to SPSS Inc., for the purposes of developing, using, marketing or distributing application programs conforming to the application programming interface for the operating platform for which the sample programs are written. These examples have not been thoroughly tested under all conditions. SPSS Inc., therefore, cannot guarantee or imply reliability, serviceability, or function of these programs. The sample programs are provided “AS IS”, without warranty of any kind. SPSS Inc. shall not be liable for any damages arising out of your use of the sample programs.

Trademarks

IBM, the IBM logo, and [ibm.com](http://www.ibm.com) are trademarks of IBM Corporation, registered in many jurisdictions worldwide. A current list of IBM trademarks is available on the Web at <http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml>.

SPSS is a trademark of SPSS Inc., an IBM Company, registered in many jurisdictions worldwide.

Adobe, the Adobe logo, PostScript, and the PostScript logo are either registered trademarks or trademarks of Adobe Systems Incorporated in the United States, and/or other countries.

Linux is a registered trademark of Linus Torvalds in the United States, other countries, or both.

Microsoft, Windows, Windows NT, and the Windows logo are trademarks of Microsoft Corporation in the United States, other countries, or both.

UNIX is a registered trademark of The Open Group in the United States and other countries.

Java and all Java-based trademarks and logos are trademarks of Sun Microsystems, Inc. in the United States, other countries, or both.

Other product and service names might be trademarks of IBM, SPSS, or other companies.

Adobe product screenshot(s) reprinted with permission from Adobe Systems Incorporated.

Microsoft product screenshot(s) reprinted with permission from Microsoft Corporation.



索引

- 概要, 16–17, 70–72, 75–77, 79, 85, 88, 92–93, 95–97, 106, 121, 128, 155
 - 共同, 79
 - 書式設定, 111
 - ATOM, 79
 - Data Service, 75
 - Deployment Manager, 75
 - Deployment Portal, 76
 - Deployment Portal スコアリング, 77
 - Enterprise View, 77
 - events, 129
 - groups, 36, 38, 40
 - HTML, 112
 - IBM ShowCase Warehouse Builder, 96
 - IBM SPSS Statistics, 73
 - MIME タイプ, 100, 102
 - RSS, 79
 - URL プレフィックス, 95
 - Velocity, 106
 - オプション, 116
 - カスタマイズ, 107, 109, 111
 - カスタム ダイアログ, 73
 - キャッシュ, 72
 - 拡張グループ, 41
 - コンテンツ, 106
 - 許可されたユーザー, 43
 - 管理対象サーバー, 21
 - サーバー プロパティ, 24
 - システム, 70–72, 75–77, 79, 85, 92–93, 95–97
 - ジョブ出力, 116
 - スコアリング, 77
 - セキュリティ, 70, 93
 - セットアップ, 95
 - テキスト, 112
 - テンプレート, 70–71, 106, 113
 - データベース スキーマ, 130
 - パスワード, 17
 - ファイルとの関連, 101–102
 - プロセス管理, 85
 - 件名ヘッダー, 106
 - ヘルプ, 70, 79
 - ページャー, 85
 - ユーザー, 32, 34, 36
 - リポジトリ, 88
 - ロール, 49, 51
- 管理者, 48, 71, 150
 - 指定, 88
 - 報告書, 88
- 資格情報, 73, 118, 121, 149
 - ユーザー定義の関数, 97
- 管理者特権, 70–71, 77, 79
- 命名規則, 26
 - 名前の設定, 26
- 概要, 26
 - 管理対象サーバー, 26
 - 専用 SMTP サーバー, 116
- Active Directory, 28, 54, 64
 - 無効化, 56
 - ローカル オーバーライド, 54, 58, 64
- Active Directory (ローカル オーバーライド), 28–30
- Apache ActiveMQ, 123
- BEA WebLogic, 123
- BIRT, 71
- BIRT Report Designer for IBM SPSS, 4, 7
- BIRT レポート処理, 149
- Coherence, 72
- collaboration, 1
- CWSIS1535E エラー, 154
- Data Service
 - 設定, 75
- DB2, 150
- deployment, 2
- Deployment Manager
 - 設定, 75
- Deployment Portal
 - 設定, 76
- Deployment Portal スコアリング構成, 77
- domain, 68
- DSN, 120
- E メール通知
 - HTML, 112
 - テキスト, 112
- E メール通知, 106
- EIM, 54, 65
- eim.jar, 54
- encrypted 属性
 - user, 157
- Enterprise Identity Management, 54, 65
- Enterprise View, 77
- events
 - 監査, 129
 - ジョブ実行, 129
 - セキュリティ, 129
 - リポジトリ, 129

索引

- FIPS 140-2
 - JBoss 構成, 152
- group 要素
 - user, 157
- group 要素
 - user, 157
- group 要素
 - obsolete, 158
- group 要素
 - obsolete, 159
- groups
 - 拡張, 28-30, 36, 38, 40-41
 - IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager での管理, 28-29
 - インポート, 40
 - ローカル, 30
- HP-UX, 151
- IBM i, 150
- IBM i ユーザー リポジトリ, 54
- IBM ShowCase Warehouse Builder
 - 設定, 96
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager, 3-4
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal, 4-5
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View, 4, 6
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Package Manager, 155
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository, 3-4
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository Server
 - プロパティ, 24
- IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Setup, 155
- IBM SPSS Modeler, 8
- IBM SPSS Modeler アダプタ, 150
- IBM SPSS Modeler アダプタ
 - ファイルのアクセス許可, 150
- IBM SPSS Statistics
 - 資格情報, 73
 - カスタム ダイアログ, 73
 - サーバー, 73
- IBM SPSS Statistics JDBC ドライバ, 154
- Java Messaging Service, 123-124, 126
- java.lang.OutOfMemoryError: PermGen space, 147
- jBoss, 120
- JBoss Messaging, 123-124
- JBoss ネーミング ファクトリ, 124
- JD Edwards (JDE), 55, 61
- JDBC, 150
 - JDBC ドライバ, 149
 - JDBC ドライバがない, 149
 - JDE アプリケーション ユーザー セキュリティ プロバイダ, 55, 61
 - JMS, 123-124, 126
 - JMS キュー, 123
 - JMS クライアント プログラムのサンプル, 124
 - JMS クライアントを実行するバッチ ファイルのサンプル, 126
 - JMS トピック, 123
 - JMS トピックの構成, 124
 - JMS トピック構成ファイルのサンプル, 124
 - JMS バス, 154
 - JMS メッセージ ドメイン, 124, 127
 - JNDI, 123-124
 - jndi.properties, 124
 - JobStatusURL プロパティ
 - 通知テンプレート, 114
- Kerberos
 - domain, 68
 - JAAS, 68
 - Key Distribution Center, 68
 - realm, 68
 - キー テーブル ファイル, 68
 - サービス チケット, 68
- LD_LIBRARY_PATH, 149
- LDAP, 54
- legal notices, 160
- LIBPATH, 149
- messageContent 要素
 - contentType 属性, 111
 - 通知テンプレート, 106, 109, 111
- messageProperty 要素
 - 通知テンプレート, 106
- messageProperty 要素
 - 通知テンプレート, 107
- messageSubject 要素
 - 通知テンプレート, 106, 109
- MIME, 99
- MIME タイプ, 99, 111
 - 追加, 100, 102
- mimeMessage 要素
 - 通知テンプレート, 106
- nativestore 要素, 156
- nativestore スキーマ, 156
- NFS, 151
- nslookup, 121
- obsolete 要素
 - nativestore, 157
- obsolete 要素
 - nativestore, 158
- OpenJMS, 123
- OpenLDAP, 28-29, 66
 - 有効化, 58

- Oracle
 - エラー, 151
- Oracle AQ, 123
- password 属性
 - user, 157
- PDF, 150
- PEB のレポート処理エラー, 149
- RFC3461, 120
- role 要素
 - user, 157-158
- RSS フィード, 79
- SAS
 - 実行サーバー, 7
- servers
 - 起動, 11, 14
 - UNIX, 11, 14
 - Windows, 11, 14
- SHLIB_PATH, 149
- SiteMinder, 55, 61, 66
- siteminder.package, 55
- SMTP
 - サーバー スレッド, 116
 - プロパティ, 107
 - メッセージ ヘッダー, 121
 - ログ記録, 120
- Solaris 10, 151
- Solaris 9
 - 開始失敗, 151
 - libm.so.1, 151
 - libm.so.2, 151
 - エラー, 151
 - ラッパー エラー, 151
- SQL クエリー, 128
- SSL, 24, 57, 64
- SSO, 16, 54, 65
- Sun Java System Message Queue, 123
- SVG グラフ, 71
- topic, 123
- trademarks, 161
- UDF 文字制限, 97
- UNIX
 - サービス, 11, 14
- URL プレフィックス, 95
- user 要素
 - nativestore, 157
 - obsolete, 159
- user 要素
 - nativestore, 157
 - obsolete, 158
- userID 属性
 - user, 157
- value-of 要素
 - 通知テンプレート, 107, 109
- Velocity, 106
 - version, 19
- WebSphere, 154
- WebSphere MQ, 123
- Windows
 - サービス, 11, 14
- アクション, 28-29
 - ロール, 46-47
 - ロールからの削除, 51
 - ロールへの追加, 51
- アジア言語, 150
- 永続イベント キュー, 116
- イベント コレクタ プール, 116
- イベント ノイズのフィルタリング, 116
- 監査イベントの捕捉, 129
- インストール エラー, 147
- インストール済みパッケージ, 19
- インデックス再作成, 104
- インデックスの作成
 - 実行の権限, 104
 - 強制的構成オプション, 104
 - リポジトリのアップグレード, 104
- インポート, 48
- インポートの失敗, 151
- エクスポート, 48
- エラー, 147, 151
 - 解決, 147, 151
 - java.lang.OutOfMemoryError: PermGen space, 147
 - アクセス, 151
 - インストール, 147
 - ジェネレーション ヒープ サイズ, 147
 - メモリー エラー, 147
 - ラッパー サービス, 147
- エラー メッセージ, 147, 151
- エラーの診断, 147, 151
- 通知構成オプション, 116
- オペレーティング システム
 - トラブルシューティング, 151
- ガイドライン
 - 名前の設定, 26
- カスケード スタイルシート, 71
- カスタマイズ
 - 通知, 107, 109
 - 通知メッセージ, 106, 111
 - メッセージ テンプレート, 106, 111

索引

- カスタム ダイアログ, 73
- ガーベジ コレクション, 148
- キャッシュ, 72
 - ログイン, 93
- 登録識別キャッシュ, 116
- キュー, 123
- キーストア ファイル, 150
- キーストア ファイルのバックアップ, 150
- 監査クエリー, 144
- クエリーの例, 144
- 拡張グループ, 28–29, 41
 - Active Directory, 58
- コンソール
 - UNIX, 11, 14
 - Windows, 11, 14
- コンポーネント, 19
- 指定された資格情報, 150
- 許可されたユーザー, 28–29, 43
 - Active Directory, 58
- 実行サーバー, 6
 - SAS, 7
 - リモート プロセス, 7
- 管理対象サーバー
 - 追加, 21
 - サーバー情報, 22
 - タイプ, 21
 - プロパティ, 24
- 管理対象サーバー
 - 削除, 26
 - ログイン, 25
 - ログオフ, 25
- サービス
 - UNIX, 11, 14
 - Windows, 11, 14
- 検索サービス, 104
- 通知サービスのデバッグ, 120
- ジェネレーション ヒープ サイズ, 147
- 永続ジェネレーション ヒープ サイズ, 148
- システム
 - 起動, 11, 14, 16–18, 26, 70–73, 75–77, 79, 85, 88, 92–93, 95–97
 - ナビゲーション, 11, 18
 - ログアウト, 11
 - ログイン, 11, 16–17
- システム情報, 19
- システム エラー, 147, 151
- ジョブ出力
 - 表示, 116
- ジョブ ステップ履歴, 114
- ジョブ ステータス, 114
- ジョブ実行イベント, 129
- シングル サインオン, 16, 54, 65, 68
- シンボル値の失敗, 151
- スキーマ
 - データベースの監査, 130
- スコアリング, 150
- スコアリング構成, 77
- スコアリング サービス, 92, 150
- 配信ステータスの通知, 120
- セキュリティ, 70, 93
- セキュリティ イベント, 129
- セキュリティ プロバイダ, 28–29, 54–55
 - 有効化, 63
 - Active Directory, 56, 64
 - Active Directory (ローカル オーバーライド), 58, 64
 - IBM i, 59
 - IBM i ネイティブ, 65
 - IBM i ユーザー リポジトリ, 54
 - JDE アプリケーション ユーザー, 61
 - OpenLDAP, 58, 66
 - SiteMinder, 61, 66
 - ネイティブ, 56, 64
- 外部セキュリティ プロバイダ, 29
 - Active Directory, 28
 - Active Directory (ローカル オーバーライド), 28
 - OpenLDAP, 28
- セッション タイムアウト, 93
- セットアップ, 150
 - 設定, 95
- セットアップの実行, 150
- タイムアウト エラー, 75
- タブ
 - ナビゲート, 18
- ディレクトリ パス, 88
- デバッグ情報, 88
- テンプレート, 70–71
 - E メール通知, 106, 113
 - Velocity, 113
 - イベント プロパティ変数の挿入, 109
 - 内容のカスタマイズ, 109, 111
 - プロパティの挿入, 109
 - プロパティのカスタマイズ, 107

- データベース
 - トラブルシューティング, 151
- データベース 監査, 128
- データベース スキーマ
 - 監査, 130
- データベース ロックの例外, 151
- 監査テーブル, 128
- テーブルスペース, 151

- トピック
 - 名前の設定, 26
- ドライバ URL, 150
- トラブルシューティング, 19, 147, 151
 - 通知の配信失敗, 121

- ナビゲーション, 11, 18

- ネイティブ プロバイダ, 54, 56, 59, 61, 64–65

- 検索の上限, 93
- 通知の配信失敗, 121
- 規制の準拠, 128
- 各国のキャラクタ セット, 150

- バイナリ コンテンツの無効化, 116
- パスワード, 150
 - 変更, 11, 16–17
- バッチ, 155
- パフォーマンス調整, 116
- パフォーマンス ボトルネック, 147
- 数値パフォーマンスの推奨, 116
- 数値パフォーマンスの推奨
 - 登録数, 118
 - 受信者数, 118
 - カスタム テンプレート数, 118

- 監査ビュー, 128
- ヒープ サイズ, 148

- ファイル
 - 画像との関連, 101–102
 - 名前の設定, 26
- ファイル権限, 150
- フォルダ
 - 名前の設定, 26
- フォント, 150
- プロセス管理
 - 設定, 85
- プロトコル タイムアウト, 75
- プロバイダ, 54

- ヘルプ, 70, 79
- ページ
 - 設定, 70–71, 75–77, 79, 85, 88, 92–93, 95–97
 - Data Service, 75
 - Deployment Portal, 76
 - IBM ShowCase Warehouse Builder, 96
 - SMTP 設定, 79
 - プロセス管理, 85
 - リポジトリ, 88
 - ログイン, 16–17, 70
- ページャー, 85

- ポート番号, 24

- メッセージ ベース プロセスの例, 127
- メッセージ ベースのスケジュール作成, 123–124, 126
- メモリー エラー, 147–148
- メモリー不足のエラー, 148
- メモリー割り当て, 148

- ユーザー
 - 許可, 28–30, 32, 34, 36, 43
 - IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager での管理, 28–29
 - インポート, 40
 - グループ メンバシップ, 28–29
 - システム リソースへのアクセス, 28–29
 - リモートで定義, 28–30
 - ローカル, 28–30
- ユーザー設定, 5
- ユーザーとグループのインポート, 40
- ユーザー定義の関数, 97

- ライセンス, 19
- 共有ライブラリ, 149
- ラッパー エラー, 151
- ラッパー サービス, 147

- リポジトリ
 - 設定, 88
- リポジトリ イベント, 129
- リポジトリの再インストール, 150
- 切り詰めエラー
 - 修正, 97
- リモート プロセス
 - 実行サーバー, 7

- レポート出力, 150
- 監査レポート, 128

索引

- ログ, 19
- ログアウト, 11
- ログイン, 11
 - キャッシュ, 93
- ログイン ページ, 16-17
- ローカル オーバーライド
 - Active Directory, 54
- ローカル グループ
 - Active Directory, 65
- ローカル セキュリティ プロバイダ, 28-29
- ローカル プリンシパル フィルタ
 - Active Directory, 65
- ローカル ユーザー ディレクトリ, 54
- ロール, 28-29, 46
 - 作成, 49, 51, 53
 - 管理者, 48
 - アクションの削除, 51
 - グループの割り当て, 51
 - ユーザーの割り当て, 51